

精選詞作例便覽

全

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5

始



11-521



祝詞作例便覽

大正
10 11.29
内交

精選祝詞作例便覽

凡例

本書は國典祭式等を修むる初學者にして神祭の祝詞を練習とする人の爲に模範的材料を提供し、又廣く神官職教導職の爲に神社祭祀國祭諸式以外の祝詞作文の參考に備へんとして編纂せり、

本書首卷の作法大意には祝詞宣命の性質、起原、主要の目的、詞句の構成等につきて其の要義を説示し、特に祝詞假字用法を附して創作に便せしむ、次に一般の神事に關しては其の種類を區

別して之を十編となし、各編中の神祭に應用すべき數多の作例を精選して作者参照の資を豊富ならしめたり、然して各編下の作例には長短あり繁簡ありて一樣ならずと云へども何れも古今諸名家の傑作にして最も初學の模範とするに足るべきものを蒐集せり、

毎編の作例には特に一神事にのみ用ふべきものと又諸神事に共通し適用し得べきものあり、故に此等の作例は一編中に一種と定めて重複の煩はしきを避けたり、作者は神祭の種類と其の場合に於て廣く各編の條下を探り自在にその材料を抜摘せらるべし。

本書の特色として附記すべき事は一般學者の通讀に便せん

爲め古來慣用せる各文辭内の助詞をは悉く平假名に改め必要なる言語には皆假字を附し、殊に各編の條下に於て作例の要旨を説き容易に其の大意を會得せしむるに勤めたり。

精選祝詞作例便覽目次

凡例

祝詞作法大意 意義、起原、構成、特質、文字

附祝詞假名用法

模範作例

官國幣社以下神社公式祭
國祭祝日祝詞作例省略

第壹編 年中行事神祭祝詞

一、祓詞	二四頁
二、降神祝詞	二五
三、昇神祝詞	二五
四、歲旦祭祝詞	二五
五、每日祭祝詞	二六

六、日供獻饌祝詞	二六
七、月次祭祝詞	二七
八、式日祭祝詞	二九
九、正月七日祭祝詞	三〇
一〇、全十五日祭祝詞	三一

一一、初午祭祝詞……………	三二
一二、三月三日祭祝詞……………	三三
一三、五月五日祭祝詞……………	三四
一四、七月七日祭祝詞……………	三五
一五、九月九日祭祝詞……………	三五
一六、甲子祭祝詞……………	三六
一七、惠美須講祭祝詞……………	三七
一八、庚申祭祝詞……………	三八
一九、除夜祭祝詞……………	三九
二〇、稻荷祭祝詞……………	四〇

第二編 神職公私神祭祝詞

一、神社合祀祭祝詞……………	四一
二、御昇格奉告祝詞……………	四四
三、全奉祝祭祝詞……………	四六
四、山神祭祝詞……………	四九
五、地鎮祭祝詞……………	五〇
六、新初祭祝詞……………	五〇
七、柱立祭祝詞……………	五一
八、上棟祭祝詞……………	五一
九、鎮座祭祝詞……………	五二
一〇、社殿造營祭祝詞……………	五三
一一、神殿修繕祭祝詞……………	五四
一二、神幸御所祝詞……………	五五
一三、祈晴祭祝詞……………	五六
一四、祈雨祭祝詞……………	五六
一五、鎮火祭祝詞……………	五七
一六、鎮魂祭祝詞……………	五八

一七、神樂奉奏祭祝詞……………	六〇
一八、年神祭祝詞……………	六一
一九、疫神祭祝詞……………	六一
二〇、告神寶奉納祝詞……………	六二
二一、獻燈詞……………	六三
二二、流鏑式神祭祝詞……………	六三
二三、探湯式神祭祝詞……………	六四
二四、墓目式神祭祝詞……………	六五

第三編 家宅諸神祭祝詞

一、家内日拜詞……………	六七
二、拜天神地祇祝詞……………	六七
三、邸宅神祭祝詞……………	七〇
四、門神祭祝詞……………	七二
五、竈神祭祝詞……………	七二
六、井神祭祝詞……………	七三
七、日待祭祝詞……………	七四
八、月待祭祝詞……………	七五
九、星神祭祝詞……………	七六
一〇、祈家内安全祝詞……………	七七
一一、祈病平癒祝詞……………	七八
一二、病平癒報賽祝詞……………	七九
一三、厄年無恙報賽祝詞……………	八〇
一四、清神棚祭祝詞……………	八一
一五、私宅地鎮祭祝詞……………	八一
一六、家宅新築祭祝詞……………	八二
一七、家遷祭祝詞……………	八三
一八、探圖祝詞……………	八四

一九、家祝祝詞……………八五一

第四編 公私開會創業諸工祭祝詞

- 一、諸官省舍築竣工安鎮祭祝詞……………八七
- 二、諸官衙開廳式祝詞……………八八
- 三、日本銀行建築地基礎祭祝詞……………八九
- 四、皇典講究所國學院大學新築祝詞……………九〇
- 五、諸學校新築始業式祝詞……………九一
- 六、道路開通式祝詞……………九三
- 七、架橋神祭祝詞附渡橋式奏上詞……………九六
- 八、新地開墾工事始祝詞……………九八
- 九、鐵道敷設起工祭祝詞……………九九
- 一〇、全 開通式祭祝詞……………一〇〇
- 一一、教會所新設祭祝詞……………一〇一
- 一二、議會開始式祝詞……………一〇三
- 一三、神職講習會開始式祝詞……………一〇四
- 一四、祭式講習會終了學神祭祝詞……………一〇六
- 一五、郵便電信局開業式祝詞……………一〇七
- 一六、新聞發行祝祭祝詞……………一〇八
- 一七、物品陳列所開始式祝詞……………一〇九
- 一八、博覽會開始式祝詞……………一一〇
- 一九、株式會社結成式祝詞……………一一一
- 二〇、慈善會開會式祝詞……………一一二
- 二一、實業開始式祝詞……………一一四
- 二二、商家開店祝詞……………一一五
- 二三、圖書館開始式祝詞……………一一六
- 二四、記念碑建立祭祝詞……………一一七

二五、銅像除幕式祝詞……………一一八

第五編 農工商業祈願祭祝詞

- 一、諸業祖神祭祝詞……………一二〇
- 二、五穀祭祝詞……………一二一
- 三、除蝗祭祝詞……………一二四
- 四、奉初穗祝詞……………一二四
- 五、養蠶神祭祝詞……………一二五
- 六、製茶場安全祭祝詞……………一二六
- 七、製絲場安全祭祝詞……………一二七
- 八、製紙場安全祭祝詞……………一二八
- 八、造船場祈念祭祝詞……………一二九
- 一〇、造船竣工祝詞……………一三〇
- 一一、機業始神祭祝詞……………一三一
- 一二、陶磁器製造開業祭祝詞……………一三二
- 一三、鑄物師神祭祝詞……………一三三
- 一四、金物商店神祭祝詞……………一三五
- 一五、鑄造平安祭祝詞……………一三六
- 一六、竹細工開業祭祝詞……………一三七
- 一七、旅人營業神祭祝詞……………一三八
- 一八、祈造酒造幸祝詞……………一三九
- 一九、祈醬油造幸祝詞……………一四〇
- 二〇、醫神祭祝詞……………一四一
- 二一、藥神祭祝詞……………一四二
- 二二、藥劑師開業神祭祝詞……………一四二
- 二三、祈牛馬病氣平癒祝詞……………一四三
- 二四、創業祭祝詞……………一四四

二五、奏功祭祝詞……………一四五

第六編 旅行誕生結婚拜賀祭祝詞

- 一、發旅祭祝詞……………一四六
- 二、祈外國出稼安全祝詞……………一四七
- 三、出船祭祝詞……………一四八
- 四、祈航海安全祭祝詞……………一四九
- 五、外國留學生安全祝詞……………一五一
- 六、祈授子祝詞……………一五二
- 七、祈安産祭祝詞……………一五三
- 八、誕生奉告祭祝詞……………一五四
- 九、生兒命名奉奏祝詞……………一五四
- 一〇、初宮詣祝詞……………一五五
- 一一、誕生日祭祝詞……………一五六
- 一二、祈生兒育成祝詞……………一五七
- 一三、成年祭祝詞……………一五八
- 一四、結婚式祭祝詞……………一五九
- 一五、結婚祭誓詞……………一六〇
- 一六、養子縁組祭祝詞……………一六二
- 一七、銀婚祭祝詞……………一六四
- 一八、金婚祭祝詞……………一六五
- 一九、年賀祭祝詞……………一六六
- 二〇、光仁天皇立太子詔……………一六七
- 二一、文武天皇御即位詔……………一六八
- 二二、明治天皇御即位宣命……………一六九
- 二三、皇太子御降誕奉祝祭祝詞……………一七二
- 二四、御踐祚奉告祭祝詞……………一七四

二五、御即位奉祭祝詞……………一七五

第七編 入學入營就任奉告祭祝詞

- 一、神道入門式祝詞……………一七八
- 二、信徒入社式祝詞……………一七九
- 三、勸學祭祝詞……………一八〇
- 四、學問始祝詞……………一八二
- 五、學神祭祝詞……………一八二
- 六、遊學神拜祝詞……………一八四
- 七、勅語奉讀式祝詞……………一八五
- 八、教導始祝詞……………一八六
- 九、教祖祭祝詞……………一八七
- 一〇、新兵入營奉告祭祝詞……………一八九
- 一一、官吏奉職奉告祭祝詞……………一九〇
- 一二、郡市町村長就任奏上祝詞……………一九一
- 一三、神職拜命奉告祭祝詞……………一九二
- 一四、教員就職奉告祭祝詞……………一九二
- 一五、議員當選奉告祭祝詞……………一九三
- 一六、勳位記念拜授奉告祭祝詞……………一九四
- 一七、四大人贈位祝祭祝詞……………一九四

第八編 疾病厄難除祈願祭祝詞

- 一、醫業神祭祝詞……………一九七
- 二、拜藥神祝詞……………一九八

三、祈病癒祝詞……………一九九
 四、疾病平癒墓日祭祝詞……………二〇一
 五、病氣平癒報賽祝詞……………二〇三
 六、惡疫豫防鎮魂祭祝詞……………二〇四
 七、厄年祭祝詞……………二〇六
 八、防除方崇祝詞……………二〇七

第九編 出征凱旋招魂祭祝詞

一、武神祭祝詞……………二二三
 二、宣戰奉告祭祝詞……………二二五
 三、出陣祭祝詞……………二二六
 四、軍隊發遣祝詞……………二二八
 五、戰挫報賽祝詞……………二二〇
 六、出征軍人健全祈念祝詞……………二二一
 七、戰捷奉祝祭祝詞……………二二二

九、違方祭祝詞……………二〇八
 一〇、靈符除却祭祝詞……………二〇八
 一一、祈病平癒神祭祝詞……………二一一
 一二、家內安全祭祝詞……………二一一
 一三、主願報賽祝詞……………二一一

八、平和克復奉告祭祝詞……………二二四
 九、新武運長久祝詞……………二二五
 一〇、殉難者墓碑建設祭詞……………二二五
 一一、戰歿者招魂祭祝詞……………二二七
 一二、戰死者葬祭詞……………二二八
 一三、軍旗祭祝詞……………二二九
 一四、軍人歸休報賽祭祝詞……………二三一

第十編 神葬祖靈祭儀諄詞

一五、奉祈徵兵安泰祝詞……………二二三
 一六、徵兵滿期報賽祝詞……………二二三
 一、墓所地鎮祭諄詞……………二三九
 二、誅辭……………二三九
 三、終祭詞……………二四一
 四、移靈祭詞……………二四三
 五、棺前祭諄詞……………二四四
 六、發葬祭詞……………二四五
 七、葬場祭諄詞……………二四六
 八、理葬詞……………二四七
 九、歸家靈祭諄詞……………二四七
 一〇、家祭諄詞……………二四八
 一一、十日祭諄詞……………二四九

一七、青島陷落奉告祭祝詞……………二三四
 一八、征獨戰死者招魂祭諄詞……………二三五

一二、廿日靈祭詞……………二五〇
 一三、三十日靈祭詞……………二五一
 一四、四十日靈祭詞……………二五一
 一五、五十日靈祭詞……………二五二
 一六、百日靈祭詞……………二五三
 一七、一年靈祭詞……………二五四
 一八、三年靈祭詞……………二五四
 一九、祖靈祭諄詞……………二五五
 二〇、改葬式祭詞……………二五六
 二一、每朝祖靈神拜詞……………二五七

精撰 祝詞作例便覽

皇學
院編
輯局
編纂

祝詞
宣命
作法
大意

(一) 祝詞の語義

我國の神祇に奉告する文章を「のり」といふは「のりとごとの畧語にして、即ち告言の意なり。これ神祇に對して其の誠意を極め、言辭を盡して懇に聞え上ぐる文章なればなり。然して此の語に、古來祝詞の文字を當てたるは、祝は示を扁とし、物を傍として、示は神を意味し、兄は口と人とを合せたるものなれば、人が神に向ひて物申す由の表象字なるに因りてなり。又「のり」と諄辭の字をも當つることあり、そは諄は懇に誠なる意と重ねて言ひ盡す意あるによれり。

大凡我が國文中に於て文章の最も古體なるは祝詞なり。この祝詞は常に祭祀に用ひらるゝものなるが、その祭祀は實に我が治國安民の本源なると共に、修身齊家の根基たるものなれば、概して祝詞の文中には敬神尊皇の文義は勿論、風教道德に關する意義を包含せるもの多く、殊にその詞章と語句の配置は、斯文の構成上極めて嚴正にして且つ典雅なりと云ふべし。

(二) 祝詞の意義

元來我國は祭政一致の國風なれば、國家庶般の要務中、神祇の祭祀ばかり重大なるものはあらず、抑々祝詞には、天子より神祇に申告し給へるものと、神官職の天皇に代りて諸神に奏上するものと、神道家の信徒を代表して祖神に祈念するものとあり。然れば鈴屋大人の大祝詞説にも、後釋すべて祝詞の類は神に申すことばなれば、勉めて其言を美麗しく爲べき業也、故に古き祝詞ども、孰れも皆言に甚しく文あやを爲して、愛たく麗はしく綴りたり云々、然れば今時、自身新に綴りて白す詞のみならず、古

の祝詞を讀申すとても古の言を過たず、勉めて其讀を正しく爲て、假にも後の音便に頼れたる言など交へず、清濁などをも嚴に守りて、必ずく等閑に讀むべきにあらずと云へり。その他古來壽詞と稱ふる一種の辭章あれど、此は臣連の家々に傳はれる神代以降の古事舊説を朝廷に出で、奏上する詞なれば、今に至る迄ともに祝詞と併稱せり。

(三) 祝詞の起源

祝詞は遠き神代に於て既に源を發せり、日本紀神代卷に、天照大神の天の岩窟に籠りませる時、天兒屋根命の其の御前に奏し奉れる祝詞を、大神の聞し召し甚く賞讃ありて、此の頃人多に物申せども、未だ斯る麗はしき語はあらずと、磐戸を細目に開けて窺ひたまふとあり。之ぞ我が祝詞の起源なり、爾來今代に存する祝詞の内容を觀るに頗る多種多様にして、措辭の華麗なるは勿論、聲調流暢にして、神奇妙趣に富めるもの尠からず。延喜式の二拾六篇と、出雲國造神賀の一篇は、古祝詞中に於

ても特に有名なり、其の他近世の神道學者が撰録せる、種多の祝詞と註釋書にも著明なるもの尠からず。

(四) 祝詞の構成

我國の祝詞は神祇崇敬の觀念に基き、報本反始の祭祀に伴ひて起りしものなれば、その種類極めて多く従つて、古今の意趣も頗る多端なれど、此等祝詞の歸着する主旨と目的を尋ねれば、大凡左の三種に出でざるべし。

- 一 報賽の祝詞、此は過去現在に於ける神祇の恩顧を感謝せむが爲に、幣饌を供進するを主旨とせり、
 - 二 申告の祝詞、此は諸事經營の終始、慶事、凶事等を、神祇に奉告するを主旨とするものなり。
 - 三 祈請の祝詞、此は或る志望を成就せむとし、又は變災病患等を除去せむとして、祈請するを主旨とするなり。
- 右の三主旨は、祝詞を作るに臨みて先づ確定すべき重要事項なり。故に新に之を作らむとする者は、必らず先づその祭祀の目的を知り、その實地の状況を詳にすべし。かくて後、右の三種中、果して何れに屬するかを考察して、先づその主旨を確定し、次にその従とし補とすべき事を工夫して、之を立案すべきなり。

古來我が祝詞文は、普通の記事文或は論文などと趣を異にし、其の構造體裁共に一定せるものなり。故に之を作らむとするには、先づ一定の體格あることを知らざるべからず。その體格を知らむと欲せば、一篇の文體は如何なる辭句と、如何なる意味を以て組立てられたりや、また之を構成せる幾多の辭句は、如何なる順序を以て綴り成せるかを知るべきなり。

古來の祝詞を見るに、その章句の配列、順序、及び語格の配置等に於て、略ぼ形式を同じくせり。今祝詞文を構成せる形式を類別すれば、左の九種に分たるべし。即ち拜詞、神德、由來、謝恩、裝飾、動作、獻供、祈請、の八句にして、拜詞に起首と結尾の二種あり、此の數句を以て一文を構成すべき順序と意義を擧ぐれば左の如し。

(一) 起首の拜詞句、

こは一文の發端にありて、先づ拜祭する神祇の御名、及び鎮座の場所等を記し、今日敬拜する由を言ひ起すものなり、その例文を擧ぐれば、

掛卷も畏き、其神社に鎮座す皇神の大前に、姓名恐み恐みも白さく、

此の齋場に神籬立て、招奉り坐せ奉る掛巻も恐き某神の(又某靈)御前に、姓名慎み敬ひも白さく、

等の如し、

(二) 神徳の稱詞句

こは神祇の靈徳功績等を稱讃するものなり、その例文を擧ぐれば、

皇孫尊の御世を、堅磐に常磐に、齋ひ奉り幸へ奉るが故に、

遠津神代に大八島國經營め給ひ、又諸の病を治むる道をも開き始めて、人民を助給ひ救ひ給へば、

等の如し、

(三) 由來の原詞句

こは事物の本縁、祭儀の起因、由來等を述ぶるものなるが、往々神徳の詞句と關聯し、又は互換せらるゝ場合なきにあらず。その例文を擧ぐれば、

皇親神漏岐神漏美の命以て、我皇孫命は、豊葦原の水穗國を平けく、知所食と事依

し奉りき、

萬物の造化の大元と坐す大神をば、拜み奉らすては、得有ぬ事と議定めて、此の神殿は作仕奉りき、

等の如し、

(四) 謝恩の報詞句

こは過去、現在に蒙れる、神祇の靈徳、恩顧を感謝、報賽するものなり、その例文を擧ぐれば、

新玉の年立歸る朝より、年の終の夕まで、日に異に蒙る恩顧を辱なみ嬉みて、

守り給ひ幸へ給へば、屋内の者等、安く穩に在經る事を、尊み嬉み、今日の御祭仕へ奉り、稱辭竟奉らくを、平けく安けく聞食せ、

等の如し、

(五) 裝飾の表詞句

こは社殿、祭場、及び物品等の、裝飾の狀を述ぶるものなり、その例文を擧ぐれば、

千歳經む山松を佐根古士の根古士にして五百枝刺小竹取添て御門に挿立て木
綿取垂て端籠の繩引延て

神籬結固め御船代に載奉て天の御蔭日の御蔭覆ふ物と絹笠刺羽幸行の道の守
と楯矛弓竝て鳥羽玉の夜吉と人の熟寐爲る亥時に人垣立て

等の如し

(六) 動作の行詞句

こは社殿の造營物品の調製及び儀衛等に就きて人々の行動し作業する狀か述ぶ
るものなるが往々裝飾の詞句に關聯し又は互換せらるゝ場合も多しとすその例
文を擧ぐれば

遠山近山に生立る大木小木を本末打切て持參來て皇御孫命の瑞の御舍仕奉り

御供の神職は大路も狹に並列り笛の調の亂るゝ筋無く送り奉りて今是の假の
御座に鎮め奉ると爲て

等の如し

(七) 獻供の列詞句

こは神祇に獻ぐる諸供物の品目等を列述するものなりその例文を擧ぐれば
奉る幣帛は照妙明妙に豊御饌豊御酒海川山野の机代物を横山の如置足はし捧
奉り

大前に御食御酒居竝稱辭竟奉くと白す

等の如し

(八) 祈請の願詞句

こは神祇の威靈に依りて諸事の圓滿なる成功を祈り請ひ願ふ詞なりその例文を
擧ぐれば

天下の公民の取作れる奥津御年を惡風荒水に不相賜成幸へ賜はば

天皇が御世を堅磐に常磐に齋奉り伊加志御世に幸へ奉て大座坐しめ給へ

某が家にも身にも枉事なせず夜の守日の守に守幸へ給ひ子孫の八千續に立榮
しめて家名を貶さしめず御祭美しく仕奉しめ給へ

等の如し

(九) 結尾の拜詞句

こは一文の結末に在りて、祝詞を奏し終る由と、神を拜む詞を述ぶるものなり。その例文を擧ぐれば、

云々を聞食宇豆那比給へと畏み畏みも白す、

鹿自物膝折伏せ、鶴自物頸根突貫て恐み恐みも祈願奉らくと白す、

等の如し、

右の數句を祝詞の骨肉として、一篇の文を構成するなり、然れど或る文の如きは、唯だ僅に二三種の詞句に依りて成り、また四五種の詞句に依りて成れるもあり。而して起首、神徳、獻供、祈請、結尾の五詞句は、通常の祝詞に最も多く、その他の由來、謝恩、裝飾、動作等の詞句は、特別なる祝詞以外に用ふること寡しと知るべし。

なほ毎詞句に抄出せる例文は、古今の祝詞中正格なる物のみなれど、悉く要趣を盡さざる所あり、學者宜しく古事記、古風土記を始め、續紀の宣命文、萬葉集の歌詞等に就きて、深くその妙處を探り、巧にその秘奥を體得習熟せば、遂には人心の機微

を穿ち、畏き神慮をも動かし奉るに至らむ。こゝに鈴屋集なる一文を採輯して、各種の詞句の組立を實習せしめむとす。

祭二靈祝詞

掛卷も畏き、崇道盡敬皇帝命の大御靈、寧樂大朝の民部卿大朝臣命の御靈、二柱の御靈の御前に、姓名等恐みも申給はくと申す。以上、起首、皇帝命は、日本書紀を撰び給ひ、朝臣命は、古事記を記し給ひて、天地の判し時より、神の御代々々の七御代の御代々々、五御代の御代々々、天皇命の遠都御代の御代々々の天津日嗣の御次手を始めて、世間に有とし有けむ、雑々の故事を漏る事無く、落る事無く、委曲に撰び給ひ記し給て、天地の共彌遠長に、大皇朝廷の御大寶と遣し給ひ傳へ給ふ、廣き厚き大御恵に依て、以上神徳、千年五百年の後の世に、遠運なく拙き某等が友がらに、至までに、遙けき神代の有ける形を、宇迦迦ひ尋ねて、明けき貴き御世の意を、百箇が一も悟知る事得てし有る恩頼を、二の御書讀奉る度、毎に頂に捧持て、畏み宇禮斯美なも思給

ふ、以上謝恩句故是以今年の某月の某日を生日の足日と擇定て、某が宅の奥の小床を、伊豆の磐境と掃ひ清めて、奥山の小柴の枝を打折持來て、伊豆の眞坂樹と二所に刺分波夜志齋ひ奉て、以上謝恩句和幣取置き、忌齋居並べ、海山の多米都物を負な負な机代と貢奉て、以上謝恩句恐み恐みも申さく、二柱命の御靈等、今如是刺立齋奉る神籬に、唯暫時の間天翔依來坐て漏落む事をば、神直毘大直毘に見直し聞直し坐て貢奉れる物を、神隨平けく安けく所聞看て、今も去前も、某等が學の業を彌助に助給ひ、彌獎めに獎給へて八十禍津日の禍事有せず夜の守日の守に守幸へ給へ、以上謝恩句と某等諸共に、牝鹿成膝折伏せ、鞆自物頸根衝抜て、恐み恐みも申給はくと申す、以上結尾此の祝詞に祭る、二靈の一は崇道盡敬皇帝と稱して、日本書記の撰修總裁たりし、舍人親王の御靈號なり、而して其一なる民部卿大朝臣は、古事記の記述者たりし安麻呂朝臣を稱せり。今此の二柱の御靈を神籬に招き奉りて、その撰修記述の功德を報賽し、併せて學業の助成を祈請する文なり。斯くて全文は起首、神德、謝恩、裝飾、獻供、祈請、結尾の七種の詞句より綴合せたり。然れどもその眼目とする所に謝恩の詞句にありて、尙は祈請の意をも含めり。

右の例文に依りて、各詞句の配列せらるゝ状は大方會得せらるべし。なほ本篇に

は神職その他の公私祭に關する祝詞一切を種類に應じて拾餘編に區劃し。各編毎にその題稱趣旨の類似せるものを一括し、仔細に作例を精撰して、初學者の創作に便せり。

(五) 祝詞の特質

吾人は本篇の作例に先立ちて、些か祝詞文の特質を講せざるべからず。祝詞は元より神前に奏上して、赫たる神靈を慰安し奉るものなるが故に、常に裝飾に富みて、雄健莊重なるべきは勿論なり。然れば古今の祝詞には、大概左の三大特質を備へ居れり。

(一) 生氣の潑瀾として、敬拜せる神威を崇高ならしむるに努めたり。

(二) 意志の明白にして、申告すべき希望と願意の悉くを盡せり。

(三) 言辭の流暢にして、深く神靈を慰悦し奉れり。

以上の三特徴を有する祝詞にして、始めて文技辭工の典型と爲すに足れり。然

らば如何にして潑瀾たる生氣を詞上に表はし得べきか、是れぞ譬喩法の必要なる所以なり。譬へば、

○天の下四方の國には、罪といふ罪はあらじと、科戸の風の天の八重雲を吹き放つことの如く、朝の御霧夕の御霧を、朝風夕風の吹き拂ふことの如く、云々大賦とあるが如し。

次に敬拜せる神威を崇高ならしめんには、最も誇張的筆致を要するなり、即ち、

○天つ神は、天の磐戸を押し開きて、天の八重雲を稜威の千別きに千別きて聞召さむ、國つ神は、高山の末短山の末に登りまして、高山のいほり短山のいほりを掻き分けて聞召さむ、云々同上、或は、……

○底津岩根に宮柱太しき立て、高天原に千木高知りて云々、などあるが如し。

更らに第二條の意義を明ならしめんに、對照法に及くものなし。例令ば、

○青雲の靄く極み白雲の墜居向伏す限り——

青海原は棹花干さず舟艦の至り留る極み云々式記

など記せり、その他獻供に關する魚類獸類の大小を擧ぐるに、

○青海原に住むものは、鱧の廣物、鱧の狭物

○山に住むものは、毛の和物、毛の荒物、同上

など稱ふる類なり。

殊に第三條の言辭を流暢にして、深く神慮を慰悦し奉らむには、各所に對句、疊句、或は重句法を用ひて、字句辭章を典雅ならしめ、圓轉瑩朗にして、口耳に滑かならしむるを特色と爲す、こゝに其の例言を擧ぐれば、

谷蟻のさわたる極み——鹽沫のといまる限り、

狭き國は廣く、——峻しき國は平けく、同上

見し明らむるものと鏡——もてあそぶものと珠、

射放つものと弓矢——うち斷つものと太刀、

▲白玉の大御白髪まし、——赤玉の御赤らびまし、

青玉の瑞江の玉の行あひに云々

等あるは對句の好例にして、また、

●八束穗の伊加志穗——行井井焚——生國足國同上

等の如きは疊句の絶妙なるものなり。その他、

■畏み畏みも白す——彌獎めにすゝめ同上

など云へるは、重句法の適例と見るべきなり。

願ふに此等は皆悉く規模の雄大なるのみならず、何れも莊重にして典雅なる特質を有し、我が古文辭と祝詞の構成上に絶好の資料を與ふるものなり。實に此の如き特質と光彩は本邦に於ける古來の祝詞或は宣命中に遺る所なき迄發露せられ、尙且つ周到なる意義を以て組立てられし狀は、當しく錦上に珠を轉するが如し。之に加ふるに、修辭の豊醇と雅麗を盡して、英氣の紙上に潑瀾たるは、神州正氣の大發現として稱揚するに餘あり。是れぞ我が純然たる古典文の他邦に比なき光華として、千古に價值ある所以なりとす。

(六) 宣命の意義

本邦儀式上の典型として祝詞文と共に併稱せらるゝものは宣命なり。宣命は歴帝の大御言葉を記し奉れるものにて、即ち今日の詔勅文なり。元より我國は君臣上下の分義嚴明にして、一朝天皇の御位を皇子皇孫に譲らせられ、或は先帝より寶祚を受け繼ぎ給ひ、又は皇后を立て定め給へる時は、その因由を懇に臣民に誥げ給へり。その他國家皇室の御大事ある毎に、必らず先づその次第を祖宗に報じ給ふと共に、ひとしく衆庶に宣示せらるゝを例とす。かゝる天皇の大御言は遠く神代に起り、降て神武の朝以來、歷世連綿として存續せられし事は言を埃たす。

爾來宣命の稱は續紀の第十卷に見えて、雅麗なる漢文語中に、萬葉假名を以て書き綴りしものなり。然れば歴代御世々々の至尊は、何れも此の文體を用ひて天下の億兆に皇命を宣詔あらせ給ひし趣なるが、その後更に一轉して天皇の御詔勅をも稱するに至れり。要するに本篇に掲ぐる宣命の意義は、陛下の御口づから臣下

に宣り聞かせたまふ御詔勅なりと稱し得べし。

(七) 宣命の由來

宣命の國史に特筆せられしは文武帝の頃より、光孝天皇の仁和年間に至る迄、約壹百九十餘年に亘れり。中にも平安遷都の時代迄は悉く續日本紀に載録せられて、我が宣命の精髓となれり。然るに其の後時世の變移するに従ひ、漸次漢文の風調を帯び來りて、殆ど乾燥無味に陥りたるが、遂には全然漢文體に變化し、純粹の古文としては、僅に奈良朝時代のものゝみに止まれり。祝詞は古來多くの人の續ぎ續ぎ作りなせる言語の集り積れるものにして、幾多の推蔽と改竄とを経て其の繁を芟り冗を除かれたるに反し、宣命の構作には略ぼ一定の職員ありて、延喜の内記式にも、凡そ神社山陵の宣命の大臣勅を奉じ、内記に命じて之を作らしむ。内記作り了りて大臣に進る、大臣宣命使に給ふ云々とあるを見ても、専ら内記の所職とは知られたり。其の後文章博士を置かれし以來、主として儒家の任となれるが、既に多

くは學士に起草せしめて内記より之を宣命したる趣なり。

(八) 宣命の特質

さて宣命と云ふ語は命を宣る由にて、宣とは君命を受け傳へて諸臣に告聞すを云ふなり。神祇令に「中臣祝詞を宣る」とありて、義解に「宣は布なり、神に告る祝詞を以て百官に宣り聞かするを言ふ」とある如く、宣命の宣もその意なり。然れば他に宣り聞かすと云ふ點に於て、祝詞と宣命とは頗る酷似せるも、祝詞は神徳を稱へ神慮を和らげ、福祉を祈らむとするものにして、宣命はたゞ大御心の在します所を下萬民に示させ給ふのみなり。即ち彼に在りては言辭を飾り、章句をあやなし、彫琢に力めたるに反し、此に在りてはたゞ明白に率直に、胸臆を吐露するのみに止まれり。斯く宣命は率直を尙ぶが故に浮華に陥ることなく、自から森嚴にして犯すべからざる趣あり。

宣命の内容は君臣相愛の情を主とし、極めて平易ならしむる爲に通俗の言語を

擇びて記述せり、元より宣命は讀み聞かするものなる故に音節の美妙なるに努め、之を讀む者を宣命使と稱し三位以上にして聲音の明晰と高調なるものを選び、大臣の捧進せる文書を受けて誦讀し皇太子以下列座にて之を聞き召し、各段の終りに諸々聞き召さへと宣る所に至りて、皇太子先づ唯と稱へ、次に親王以下諸人同聲に唯と唱へて、愈々莊重の感を深からしめたるなり。斯くて其の書き方も祝詞の漢字もて國語を寫せると同じく彼の文字の正訓を用ひ、且つ讀み易からしめむ爲に細字にて助字の假名を添へたり。古へは片假字平假字と云ふもの無かりしかば物を記すに皇國語のまゝには物し難ければ、漢國の書き様に倣ひて萬の事皆漢文もて記しけるを歌のみは所謂萬葉假字を以てし、祝詞宣命も古語のまゝに書きて一文字も違へず、てにをばの假字をさへに細書に添へたり、世に之を宣命書と稱して萬葉書と區別せられたり。

(九) 送假字と音假字

さて祝詞宣命等を創作せる後は、其の書様を正しくせざるべからず。然して之を正確にせむとするには、先づ送假字の規則を知るにあり。送假字は必ず音假字を用ひて訓假字を用ひざる例なれば、古來の慣用に基きて相當の習熟を心懸けざるべからず。著者は後進者の便益を圖りて、茲に祝詞宣命假字遣用法を附記することゝせり。

凡そ祝詞文に送假字を加ふるに、單語法と複語法との二様あり。單語法とは一言一語に送假字を加ふるものにて、生く嫁ぐ開くる遣はす見所行等の如し。複語法とは二言二語及び神名地名等に送假字を加ふるものにて、例へば聞食す知食す祓給ひ清給ふ健御雷命齋主命皇御孫命出雲國等の如し。然して音假字は常に送假字に用ふるのみならず、古今の言語を祝詞文に寫さむにも用ふべきものなり。その音假字には通常清音と濁音との二種に區別せり。之を臚列すれば左の如し。

○ 清音假字

阿安(あ)、伊い、宇汗(う)、叙愛(え)、意淤(お)、加可(か)、伎支(き)、久玖(く)、氣計(け)、
 許古(こ)、佐沙(さ)、志之(し)、須周(す)、世勢(せ)、曾宗(そ)、多太(た)、智知(ち)、都(つ)、
 氏天(て)、登刀(と)、那奈(な)、爾仁(に)、奴怒(ぬ)、彌泥(ね)、能乃(の)、波八(は)、
 比斐(ひ)、布府(ふ)、閉閉(へ)、保富(ほ)、麻萬(ま)、彌美(み)、牟武(む)、賣米(め)、
 母毛(も)、夜也(や)、由(ゆ)、與用(よ)、良羅(ら)、利理(り)、留流(る)、禮(れ)、呂漏(ろ)、
 和(わ)、韋(わ)、惠(ゑ)、袁(ゑ)

○濁音假字

我賀(が)、藝疑(ぎ)、具(ぐ)、下宜(げ)、恭(ご)、邪奢(さ)、事自(じ)、受(す)、是(せ)、叙(ぞ)、
 陀(だ)、遲治(ぢ)、豆頭(づ)、傳殿(で)、杼度(ど)、婆(ば)、備(び)、夫(ぶ)、倍辨(べ)、煩(ば)、
 右の音假字を以て、假名用法の大概を知らるべし。但し本編には讀者の便宜を
 圖りて、右作例の送假字を悉く平假名に改めたり。

祝詞模範作例

從來世に傳はれる祝詞宣命の種類は非常に多く、隨つて其の作例の繁多なるが爲めに、
 初學の者は往々玉石を混淆して眞意妙趣を捉へ難き弊あり、之を以て編者は古今數千
 種の傑作中より特に精を凝め粹を極めたるものを選抜し、江湖一般の模範とすべき絶
 好の名篇を各編に列擧し、各人創作の實例に提供せり、

第一編 年中行事神祭祝詞

吾人國民は貴賤老若男女を分たず、皆悉く神祇の産み成し給ひし國土に生れ、長き天神
 の御正系たる歴代天皇の御政治の下に住み、祖先世々の慈恩に霑ひて生息するものな
 れば、苟も此土に生存する限りは一日片時も神恩皇德を忘るべからず。是れぞ本編年中
 行事祭の至重至要なる所にして、各位は懇ろに左の模範作例を参照し、厚く其の誠意を
 注ぎ深く丹心を凝して平素に蒙れる神恩聖德の萬一を感謝し、于早振神靈に感格すべ
 き名文を奏して皇室國家の安泰と家人子孫の健全幸福を祈請すべき也。斯くて神祇を
 敬拜するには必ずその身心を淨くし、先づ祝詞を唱へて赤心より神靈の降格を仰ぐべ
 し。然して神前に跪拜し神慮の感應を量るべき拍手拜揖等の作法を行ひ其の願意を正

直に白すべし。此の神拜の場合に常に一定の祝詞を用ひて苟且にも非禮不嚴の言葉を吐くべからず、是れ特に祝詞作練を要する所以なり。

さて第一に祝詞を掲げしは各自の祭祀に先立て其の妄想邪念を抜ひ清明遷新なる心氣となりて事を行ふなり。その行事終らば直に神明奉送すべきは言を待たず。

然れば本編に於ては先づ年頭に奏する歳旦祭を始め毎日々供祭より月次、式日祭等の祝詞に及ぶ、殊に毎月の一日十五日廿八日は式日祭とて各神社並に家々の神棚又は祖靈社等を祭る日なれば力めて祝詞を丁寧にすべし。その他初午祭以下除夜祭に至る多種の詞は古來世俗の慣行せる節日祭に必要なものにて何れもその準備なかるべからず。尙委しくはその條下に於て次々に注意すべし。

(一) 祝詞

諸祭の款式

神職必携

掛卷も畏き、祠伊邪那岐命、筑紫の日向の橘の小戸の檍原に、身禊祓給ひし時に、座成せる祓所の神等、今日の祭の神事仕奉るゝ爲て、此の齋場に集侍れる神職及諸人が過犯けむ難雜の罪穢在らむをば、海川に持出で遠き涯に、伊吹放ち作須良比失給ひて、神事清く麗しく仕奉らしめ給へと白す事を、馬耳の彌高に所聞食せと畏み畏

みも白す。

(二) 降神祝詞

臨時に神座を設くる時に用ふべし

祭文彙

掛卷も畏き、吾大神を此神床を、伊豆の眞屋と忌ひ鎮めて招奉り坐奉らくを平けく安けく聞して、天翔神集ひ坐せと畏み畏みも白す。

或は「掛卷も畏き、何々祠等、此神床に來格座し坐せと。畏み畏みも白す。」

(三) 昇神祝詞

降神の時

同上

此神床に招奉り坐せ奉る其祠等、本津御座に還り鎮座し坐せと畏み畏みも白す。或は、此神座に坐せ奉れる皇大神の威の靈い、今御祭仕奉罪ねれば本つ御座に還り鎮り坐せと恐み恐みも申。角田忠行

(四) 歳旦祭祝詞

神事略

掛卷も畏き、其社に鎮坐す吾皇神の大前に、恐み恐みも白さく、千歳將經山松を佐根

古士の根古士にして五百技刺小竹取添て御門に挿立て木綿取垂で端籠索引延て奉る幣帛は千世の若水餅鏡和稻麴稻酒は白木黒木に屠蘇酒をも取竝て奉る雜物を大御心も宇良宜豊明に所聞食て天日嗣は日月の共無動く恒も奉祈天皇命の大御壽を足長の大御命と堅磐に常磐に幸奉り親王諸臣諸王百官人等此郷の刀禰男女天下四方國の公民に至までに平く安く守福へ給へと頸根突抜て新年の始の朝日の豊榮登に稱言奉竟と申す。

(五) 毎日祭祝詞 祭文私稿

掛巻くも畏き何々大神の大前に慎み敬ひ恐み恐みも白さく大神の高く尊き御稜威を畏奉り廣き厚き御恩頼を忝奉りて如此日に異に進る幣帛を安幣の足幣と平けく安らけく聞食て夜の守日の守に守恵まひ幸給へと恐み恐みも白す。

(六) 日供獻饌祝詞 四部 饌

掛巻も恐き某神社に鎮座す某大神の大前に職姓名恐み恐みも白さく日に異に變る事無く朝日の豊榮登に大前を持忌まはり持清まはりて奉る御饌御酒種々の味物を平けく安けく大御心も清々しく聞食て千代田の大宮に座て顯御神と大八洲國知看す天皇の大御代を嚴御世の足御世に守り幸ひ給ひ親王等王等百官人等皇神の敷坐せる村々里々の産子の人等及國々所々の信徒等より四方の公民に至るまで伊賀志夜具波叡の如く立榮えしめ給ひ夜の守日の守に護り幸へ給へと恐み恐みも白す。

(七) 月次祭祝詞 毎月一日の例 神職必携

此の神殿に齋奉る掛巻も畏き吾大神等の珍の御前に畏み畏みも白さく顯御神と

天下知食す天皇の大御代は日刺方の天と長く生金の地と久く國內には吹風の騒
無く四方海には立濤の亂無く殿し御代の足し御代と守幸へ奉給ひ皇太子を始奉
り諸親王百官百僚等喪無く難無く忠に貞に恪み仕奉らしめ給ひ敷座せる(市町郷
村)の御氏子(信徒)等は今も今も蟹が行如す横さの道に惑ふ事無く泥む事無く皇神
等の建給ひ教給ひし墨繩の一筋の正道の大道に神習ひて大王に仕奉り皇國を護
奉り人を幸へ物を憐み親族家族饒び睦び心安く轉樂く依し給へる産業を怠らす
放らさず勤締りて新玉の年緒長く萬代に病き事無く煩き事無く立榮え家門をも
彌廣に彌高に興さしめ給ひ萬事等思ふが任に事成竟しめ給ひ樂歡の變る事無く
盡る事無く恵給ひ愛給ひむ事を嬉み謝び常の例の隨に(月次の幣帛と進る御酒御
饌を始め種々の物を)御饌御酒を机代に置足はして月始の御祭仕奉くを平けく安
けく所聞食せと恐み恐みも白す。
辭別て攝社末社の神等の御前に白さく此の御前に獻る幣帛を相嘗に所聞食て大
神の御業を輔奉り助奉給ひて守り幸へ給へと畏み畏みも白す。

(八) 廿五日 式日祭獻饌祝詞 四部讀

此の何里の底津岩根に宮柱太敷立高天原に千木高知て靜宮の常宮と鎮座す掛卷
も恐き皇大神等の宇豆の御前に職姓名長み畏みも白さく何國何郡何町村に住
る何某を始め何人の人等が日に異に蒙り奉る恩頼を喜み辱み入紐の同心に獻る
幣帛を捧げ奉らむと爲て毎月の例の隨に今日の生日の足日に大御祭奉り獻る
御饌は八白杵に杵搗白けし洗米を土器に盛高成し御酒は八入折に折釀し清酒を
嚴瓶に滿竝べ海川山野の物は鮭廣物鮭挾物澳津藻菜邊津藻菜甘菜辛菜御水堅鹽
に至まで机代に打積置て獻らくを安幣帛の足幣帛と平けく安けく聞食て其人々
の家内には八十禍津日の禍事無く煩の大人の煩無く親族家族睦じく負持祖先の
家門を荒す事無く穢す事無く家の業を勤み勉め彌益々に富榮しめ給ひ身を健全
に病しき事無く堅磐に常磐に命長く子孫の八十連續に至まで千代萬代も嚴し夜
具波衣の如く立榮しめ給ひ夜の守日の守に守り幸へ賜へと恐み恐みも白す。

次に招ぐる正月七日と十五日祭は我が古来の習風として上下等しく七草粥今は小豆粥を煮家人が壽命の長久を祝ひ祭れるもの故當日は何れも神前に祝詞を奏して御恩徳の新ならむことを祈請すべきなり。

(九) 正月七日祭祝詞 六人部是香

此の所の底津磐根に宮柱太敷立高天原に千木高知て天の御蔭日の御蔭と定奉て稱言竟奉る皇神等の御前に白く春野に萌る若菜を御籠持御鏡持歌ひ乍摘持來て今日の假日の豊逆登に奉る七種の若菜を平く所聞食て皇御孫命の御世を手長の御世と堅磐に常磐に茂御世に幸へ給ひ阿禮坐す皇子等をも長く平く護惠幸へ給ひ百姓の取作む五穀を始め草の片葉に至まで悪風荒水に不令相給成幸へ給へと稱言竟奉くと白す。

言別て白く此國領す守殿をも平く安く生の御子の彌繼々に遠く長く令榮給ひ護惠幸へ給へと白す又皇神の敷坐す此郷の刀稱男女諸の各過將在をば神直備大直備に見直し聞直し坐て惠給ひ幸へ給ひ産業をも彌進めに進給ひ彌勤に令勤給て根國底園より荒び疎び來む物に相率相口會給事無く下行ば下を守り上行ば上を守り夜の守日の守に守給ひ給給へと士六自物膝折伏宇事物頸根突抜て稱言竟奉くと白。

(一〇) 正月十五日祭祝詞 同上

此の所の底津磐根に宮柱太敷立高天原に千木高知て天の御蔭日の御蔭と定奉て稱言竟奉る皇神の御前に白く今年正月十五日の御粥仕奉むと奥山の大峻小峽に茂立る木を打切持來て御籠木と稱爲て若菜の七種合煮たる御粥を持奉て稱言竟奉くは皇御孫命の御世を手長の御世と堅磐常磐に茂御世に幸へ給ひ阿禮坐皇子等をも長く平く護惠幸へ給へと稱言竟奉くと白。言別て白く中略皇神の敷坐此郷の百姓の取作む五穀を彌榮に令榮て年貢は稱在せず粟田豆田麥稗に至まで八束穂の茂穂に成幸へ給へと十六自物膝折伏宇事物頸根突抜て稱言竟奉くと白。

(一一) 初午祭祝詞 高階幸造

二月の初午の日は上代より神祠又は家々にて年々稻荷の神靈を祭祀し、知人親戚を招きて赤飯を炊ぎ、之を饗して五穀農桑の豊穰を祈請するなり。

山城國稻荷山に稱辭竟奉る、掛巻くも畏き宇迦之御魂大神、及相殿に鎮座す、掛巻くも畏き須佐之男大神、大市比賣大神と御名は申して、齋主何某、恐み恐みも白さく、天下の公民の食ひて活くべき五穀物を始めて養蠶牛馬萬の業に至る迄、落る事無く漏る隈無く御靈幸給ひ守惠給ふが故に、毎も恩顧を忝みて拜み奉りつゝ、有れど年毎に二月の上の午の日を齋日として、由志利嚴志利如此御祭仕奉りて進る幣帛は洗米神水、堅鹽鏡の餅、赤飯、大御酒、大御食、海川山野の物を、種種々作り設備へ、八取の机に置高成して獻り、宇豆の太玉串を捧持ち、拜仕奉らくを相宇豆那比給ひて、安幣の足幣と平けく安けく聞食て、彌遠に彌長に守給ひ幸給へと、畏み畏みも白す。

(一二) 三月三日祭祝詞 六人部是香

此の日は女兒ある家々にて雛を祭り、髪を供へ、挑の節句を祝して、知己親族等を招く慣なれば、殊に神祇を祭りて、家内の無病息災を祈り、子孫の繁榮を壽ぐ次第なり。

此の所の底津磐根に宮柱太敷立、高天原に千木高知て、天の御蔭日の御蔭と定奉て、稱言竟奉る、皇神の御前に白く、今年三月三日の朝日の豊逆登に、奉る幣帛は、雉子鳴大野原に、宇良若く萌出たる、艾草摘持來て、弱肩に、太手次取挂て、山志理伊都志理春合たる草餅を始め、御酒は、豊閉高知、豊腹滿雙て、今日を盛と、咲艶ふ櫻桃柳の枝を折添て、奉る幣帛を、安幣帛の足幣帛と平く所聞食て、皇御孫命の御世を、手長の御世と堅磐に常磐に、伊賀志御世に幸へ給ひ、何禮座皇子等をも、長く平く護惠幸へ給ひ、百姓の取作む、五穀を始め、草の片草に至まで、惡風荒水に、不合相給成幸へ給へと、稱言竟奉くと白す。

言別て白く、此國領す守殿をも、朝日に艶ふ櫻花の彌榮に、令榮給へと白、又皇神の敷

坐此郷の刀禰男女諸は三千歳に成云桃の齡足はし根園底園より荒び疎び來む物
に相牽相口會給事無く柳糸の彌遠長く護惠幸へ給へと十六自物膝折伏宇事物頭
根突抜て稱言竟奉くと白す。

三四

(一二三) 五月五日祭祝詞 同上

此の日は端午の佳節とて男兒ある家々には武者人形を飾り、門幟、五月鯉、吹流等を掛て、
軒には菖蒲を非き、粽拍餅など造りて神に饗し家人の繁榮と子孫の幸福を祈る祭なり、
發端句前に同し今年五月五日の朝日の豊榮登に持齋まはり持淨まはりて奉る幣
帛は糶の御食を始め菖蒲草御酒に浮べ、机物に置足はして奉る幣帛を安幣帛の足
幣帛と平く所聞食て、皇御孫命の御世を、手長の御世と堅磐に常磐に伊賀志御世に
幸へ給ひ百姓の取作五穀を始め草の片葉に至まで、惡風荒水に不令相給成幸
へ給へと稱言竟奉久と白、申略又皇神の敷坐此郷の刀禰男女諸親族玉緒長く息緒
平く夜守日守に守幸へ給へと、菖蒲草可豆良に挂て稱言竟奉くと白。

(一四) 七月七日祭祝詞 同上

此の日は七夕祭とて色紙短冊に和歌を記し竹葉に結びて星の神を祀ふ慣あれば、家々
にては特に草花を神前に飾し酒饌を饗して家族の隆運を壽ぐべし、
發端句前に同し今年七月七日の朝日の豊逆登に奉る幣帛は由紀の御食御酒は斐邊高知、
斐腹滿雙て今日を盛と咲艶ふ七種花をも取添て稱言竟奉くは、以下祈願句前に又
此里の男女を不言延葛の彌遠長く護惠幸へ給へと、十六自物膝折伏宇事物頭根突
抜て稱言竟奉くと白。

(一五) 九月九日祭祝詞 同上

此の日は重陽とて菊の佳節なれば家々に於ても例年神床を祭り饗宴を備し知人親近
を集めて家族の盛運と長壽を祝福せり、然れば今後も神祇に與れる士は常にその心し
て此の文例に準據し懇篤なる神祭を行ふべし。
發端句前に同し今年九月九日の朝日の豊榮登に奉る幣帛は由紀の御食御酒は斐の閉高

三五

知盤の腹滿雙て今日を盛と咲艶ふ園生の菊を取添奉て稱言竟奉らくは、下新願句前と同じ
又皇神の敷坐此郷の刀禰男女諸をも惠給ひ慈び給ひて加波良於波波の變る事無
く左岐奈の令幸有給へと十六自物膝折伏宇事物頸根突抜て稱言竟奉くと白。

次に掲ぐる甲子祭惠美須庚申祭等は我皇孫の御天降以來國土の修理經營に偉大なる
功蹟ありし大國主神事代主命猿田彦大神等を祭祀せるものにて古來民間一般に行は
るゝ年中行事の一なれば各自は毎年の曆日に定むる時期に於て必らず神々に酒饌を
饗し其恩澤を報謝すると共に家運の發展幸福と子孫の繁榮を祈請すべきなり。

(一六) 甲子祭祝詞

松道合詳辭集

懸をも恐き百不足八千隈手に隠るひ坐て幽冥事所知食す大己貴大神の珍の御前
に畏み畏みも白さく千早振神代の昔豐葦原中國の如水母浮漂へる時に五百箇組
神組所取て國土經營堅め給ひし故に國造大穴持命と申し又如狹繩惡神如螢火光
神等を神攘に攘ひ平げ給ひし御稜威武く坐し故に葦原志許男神と申し廣矛を御
杖と突かして天下巡給ひしに依て八千矛神と稱へ國等悉言向て大國主神と成り

此の顯見蒼生の爲に種々の法を教へ授け給へば顯國玉神と稱へ其の所知食し現
事顯露事を天神の勅の隨に皇御孫命に禪給ひて吾作りし國は御孫命に奉れり但
八雲立出雲國は吾鎮坐す國青垣山四方に廻らし玉置て守ると宣給ひ千尋の栲繩
百結々八十結々下て柱は高く太く板は廣く厚く造れる天の日隅宮八百丹杵築大
社に隠り鎮り給ひき故其の廣き厚き御恩頼を綾に貴く文に長く敬ひ忝なみ奉り
て今日の生日の足日を吉日と定めて御酒御食種々の物を御前に置足はして稱辭
竟奉らくを平けく安けく聞食て命も長く病しき事無く諸の福を満足しめ給ひ子
孫の八十連續に至までに堅磐に常磐に令榮給ひ咎過有らむをば見直聞直坐て禍
物の枉事不令在夜の守日の守に守り幸へ惠み給へと畏み畏みも白す。

(一七) 惠美須講祝詞

岡吉胤

掛卷も畏き都味羽八重事代主命の大前に、恐み恐みも白く皇睦神漏岐神漏美命を
以て皇御孫命は豐葦原の瑞穂國を安國と平く所知食と事依して天降し賜ふ時に、

大神は出雲國三種之崎に鳥遊魚取を樂み座しを立處に葦原の中國を皇御孫命に奉り坐て父大神と共に事遊座しは最も畏く君親に忠誠なる道を顯し坐し廣き厚き神徳を仰ぎ尊み貴も賤も家々の神棚に齋奉れるを十月二十日はしも惠美須祭と稱奉りて市人等の御祭仕奉らくを平に安に聞食て商の業を守給ひ清き明き眞心に家をも身をも令治賜ひて櫻の木の彌嗣々に絶る事無く墮る事無く富榮仕奉らしめ給へと今日の朝日の豊榮登に稱辭竟奉らくと恐み恐みも白す。

(一八) 庚申祭祝詞 同上

掛卷も畏き猿田彦大神の大前を慎み敬ひ畏み畏みも白く高天原に神留坐皇陸神漏岐神漏美の命を以て皇御孫命に豊葦原の水穂國を安國と平けく所知食と言依し奉りて天の磐座を離ち天の八重雲を伊豆の千別に千別て天降し奉りし時天の八衢に迎奉りて日向の高千穂の申觸峯に啓行奉り給ひ大神は神風の伊勢の狭長田五十鈴の川上に鎮り座て天照大御神を待受給ひ諸の荒振邪神を拂却て上は皇

美麻命を齋奉下は青人草を守惠みて導き誘ひ給へる神功を萬世の今に至る迄仰き尊み奉るが故に今日の生日の足日の夕日の降より五百枝賢木に木綿取垂神繩引延て是の小床を伊豆の眞屋と齋麻波利清めて由紀の御酒御饌種々の物を貯へて天甕和に齋許母里終夜仕奉らくを平に安に聞食て諸の禍事を祓ひ給ひて惟神直き正き大道に誘ひ導き座て太き雄々しき功を立しめ給へと畏み畏みも稱辭竟奉らくと白す。

(一九) 除夜祝詞 大社教年中拜辭畧

掛卷も畏き某大神等の大前に畏み畏みも白く今年の十二月の三十一日の今夕の吉時に忌回り清回り御燈及種々の御饌物を進奉りて一年の間に蒙り奉れる恩頼を嬉み辱み奉る報賽の御祭仕奉らくを御心宇良解看備し聞食て親族奴婢等に至まで和び睦びて新玉の年平けく迎しめ給へと畏み畏みも白す。

二二〇 祭稻荷大神祝詞 古今祝詞要覽

掛巻も畏き、稻荷大神の御前に、職姓名畏み畏みも、稱辭竟奉らく、宇迦能御魂命、豐御食津乃大神と御名は申して、山城國紀伊郡三乃峯に鎮坐す大神の分御靈を此の神床に招奉り齋奉りて、今日の生日の足日に、乃美の禮代と獻る物は、秋の垂穂の八束穂を、忌火以て炊げる宇豆の大御饌を、天の平迦の高山なす盛双べ和稻を以清まはり、荒稻を以由まはりて、醸める宇豆の大御酒を、天甕和に深淵如す満湛へ、甘菜辛菜、島つ物種々を置足はして、御祭仕奉る狀を、宇麻良に聞食享給ひて、家人等が商の道を始め、萬の業、五穀、蠶、牛、馬の上に至る迄、守り幸へ給ひ、皇大神の皇孫命に依し給へる瑞穂の稻をも、年毎に授け賜ひて、青人草の飢る事無く、凍ゆる事無く、命長く家富み國榮えて、諸の幸福を令満足給ひ、萬の寶をも數多令得給ひ、夜守日守に、守り給ひ、恵み給へと、畏み畏みも、稱辭竟奉らくと白す。

第貳編 神職公私神祭祝詞

現今の神社祭祀令に於て、神官職の奉行せる公式祭の祝詞は、既に嚴然たる規定あれば、更に格別の取捨を要せざるも、古來我が神社の諸祭祀並に四時の神事として、隨時に舉行せるものには、尙ほ數多の種類あると共に、其の祭詞に於ても、重要缺くべからざるもの尠からず。是れ即ち本編の必要を生ずる所以なり。然れば左に掲ぐる神社合祀祭を始め、昇格、地鎮、上棟、神幸、鎮魂、祭等に用ふる諸祝詞の如きは、臨時の公式に屬すれども、其他の新晴雨、神樂、年神夜神祭、又は流鏑馬、藝目祭の如き特殊の神事に要する各祝祭詞は、私祭として最も必要なりと云ふべし。殊に此等の諸神祭に於て適用せる祝詞の種類作例は頗る頗多なるのみならず、後進者の俄にその要旨を會得し難きものあり。是に於てか、編者は此等に關する古今の神祭詞中、極めて優秀絶美にして、眞意妙趣を發現せるもの、みを精選し、一般の神官職が創作上の参照に便せり、なほ本編に遺漏を生ぜしものは、順次後編に於て補ふべし。

(一) 神社合祀祭祝詞 其一 神職必携

此の祭詞は、先づ合祀すべき神社奏上を第一に整へ、次で遷祀すべき神靈に對するものと、遷靈後の鎮座を奏上するもの、三種に區別すべし。然して其の一は、共殿合祀の次第を

本社の神祇に奏するを主とし其二は勅座すべき神祇に其の因由を告ぐるを主とし其
三は遷座の状況と御霊の祈請を要旨とすべき也、委しくは本文の例に就て觀察すべし。
掛卷も恐き、何神社の大前に、職姓名恐み恐みも白さく、今回畏かれど、何處に年久
に鎮座し、何社の大神の御種代を嚴の御殿の内に合祀り、令座奉らむと爲るが故
に、此の由奏上奉らくを相諾ひ給ひて、來む月の良日の佳刻に御遷りの式仕奉らむ
事を聞食し、輔ひ助け給へて、禮代の幣帛捧げ持て、恐み恐みも白す。

同上 其二 山内祀夫

掛卷も畏き、何大神の大前に、職姓名恐み恐みも白さく、此の御社殿を宇麻し御座と、
年久に鎮り給ひしも、仕奉る御氏子の家數少くて、如斯荒蕪ぬるを見恐みて、神地廣
く格式總ての具備在る何神社に坐す神等の同殿に合祀る事と成りぬ故、今日の何
日何時を吉日の吉辰と撰定めて、某が弱肩に太禰取掛て、御正體を戴奉り、諸人を率
ゐ御遷の式仕奉らむとして、御饌御酒種々の多米津物を捧げ奉りて、稱言竟奉る状

を平けく安けく聞食て、咎め給ふ事無く、崇り給ふ事無く、神慮穩に遷幸座せと、畏み
畏みも白す。

同上 其三 山内祀夫

懸纏も恐き、何神社の珍の御前に、職姓名畏み畏みも白さく、前には奏上奉り、乞祈奉
りしが如く、何の處に年久に鎮座し、何大神を、此の神社に合祀る御事仕奉ると、千
々の御装束物、萬の神寶をも、備備て、月の中に日を擇び、日の中に時を擇び、鳥羽玉の
夜吉と、人の熟寝爲る此の吉辰に、忌しり、嚴しり、弱肩に太禰取懸て、御氏子(崇敬者)諸
忌廻り清回り、人垣立て、御尾前に仕奉り護奉りて、御供の列も正しく、打鳴す鼓の音
は、彌高く、雲居に響き、吹立る笛の音も、佐々夜々に仕奉り、今し是の御殿に遷し奉り、
坐せ奉り、鎮め奉らくを、御心穩ひに、諾ひ給ひて、同殿の神等と、御力を合せ給ひ、御靈
幸ひ給ひて、今ゆ往先彌益に怠る事無く、御祭殿に仕奉らむと誓ひ奉り、拜み奉る御
氏子(信徒)諸が家にも身にも八十禍津日の枉事、在しめず、夜守り日守りに、守惠幸給

へと獻る禮代の御饌御酒海山の多米津物を平けく安けく所聞食て彌遠に彌長に
鎮り坐せと畏み畏みも、稱言竟奉らくと白す。

(二) 神社御昇格祭祝詞 青木陳實

從來の由緒ある神社にして、御事歴の不明なりし爲めに漸次衰頽せしものを、神職有志
の盡力に依り、新に御昇格を遂げられし際、其の次第を神祇に奉告し、兼て祝賀の式を舉
ぐるなり、因りて此の祭祀に要する祝詞は、左の作例を参照して仔細にその内容の意を
述ぶべし。

掛卷も畏き何々神社の御前に、職姓名畏み畏みも白さく、此社祠に祭り來し皇神は、
上古に座して御功高く、其事はしも古書に口碑に世に廣く聞ては有ども、何時と無
く衰へ來て、今は只此の村郷縣府社と爲て微に此處に存在て坐せば、其を憚み畏み
て、里人諸思議り、右に左に事取調べて、申文を官に捧げ力の極み盡して在しに、其眞
心の程も徹り思も協ひて、此度御社の格を昇て、何々の社と被定しは、最も尊く辱き
事と里人の限り老も若も悦び畏み乍、今日其の由を奉告と爲て、種々の物莫りて、御

祭仕奉る狀を平けく安けく聞食て、今より往く前、其神徳の耀き給はむ事は、聳え立
つ御庭の松よりも高く、萬世に榮坐む御榮は、千代經る御前の樟よりも久に、常磐に
堅磐に立榮え坐と、畏み畏みも白す。

同奉告祭祝詞 山内祀夫

從來の神社にして、要路に於ける調査の不備或は他の事由より新に御由緒を審査し、御
事歴の明確なるものと崇敬の度高きものある時は、更に御昇格の御沙汰を蒙れり、是に
於て神職は先づ基の次第を神祇に奉告し、祝賀の式を舉ぐるなり、此の祭儀に要する祝
詞の内容は以下の作例に準すべし。

掛卷も恐き、何神社の大前に、官位職姓名、恐み恐みも白さく、今年の一月四日の御政
事始に、天皇が大命以ちて、何社(社格)に昇せ給ひき、故爰を以て、今回其由を告奉ると
何某(勅使官位勳等姓名)を御使と爲て、齋ひ祭らせ給ふが故に、大前を慎み敬ひ獻る
御食は、和稻荒稻に御酒は、麴上高知、麴腹滿並て、鰯廣物、鰯狭物、奥津藻、菜邊津藻、菜、
菜、辛菜に至るまでに、置足はして、仕奉らしめ給ふ事を聞食せと、恐み恐みも

同奉告祭文

天皇の大命に坐せ、挂巻も恐き何神社の大前に、何某勅使官位勳等姓名を使と爲て
白給はくと白さく古より崇め尊び祭らせ給へる例を以て先年何社(社格)と定奉り
給ひしを、此度猶其廣く厚き恩顧を思はし食すが故に、更に何社格と崇め奉りて、
御幣帛奉出し齋祭らせ給ふ、故此狀を聞食て、天皇の大朝廷を始めて、仕奉る百官
人等天下四方國の人民に至るまでに、伊加志夜具波延の如く立榮しめ給へと、白給
ふ天皇の大命を聞食せと、恐み恐みも白す。

(三) 御昇格奉祝祭祝詞 同部議

石橋の近淡海國、薦枕多賀の郷を、天地の國の眞秀良と神隨鎮座す掛巻も長き神御
祖二柱皇大神の珍の大前に、宮司從五位勳六等岡部讓、恐み恐みも白さく、何時は有
れども敷島の大日本心と、櫻の花の盛に匂ふ、今日の生日の朝日の豊榮登に、祝の壽

詞を言賀ぎ奉らうは、天原豊榮登る日本の倭の國は、天皇尊の惟神永久に知らせる
神の御國と、二柱御祖神の神世より彌繼々に、御執の荒木の眞弓本を重み末を憐み
天楯弓始を慎み終を調へ給ふ、何恰御手風と尊き御儀典を以ちて、統給ひ治め給ふ
からに、御歴代の大御政事は、皇御祖の御前を齋奉り給ふ神事を以ちて、其始めとぞ
成し給ひける、故鶴が呼ぶ千代田宮に、現津御神と天下知食す、天皇の天津日嗣の高
御座に、即かせ給ふべき年の御政事始の生日の足日に、官幣大社に昇げ給ひ進め給
ふ大御言を下し給ひ、尙此月の二日と云ふに、大御使を差遣さへて、大幣帛を捧げ奉
らしめ給ひて、天津日嗣の大元を尊み給ひ、大御祭仕奉らせ給ふ事を重き御式と定
め給へる、神隨なる大御懿訓を行ひの上、に顯して、普く世に示し給ひ、國土人草の基
く所に報ひ奉り給ひつゝ、天下平穩に民草安寧かれと乞祈給ふは、吾神の御國の外
に復と無く尊く嚴しき御手風にして、即て大御稜威の御光になも座ける、嗚呼、樂し
御民我等正き神統に據りて、姓氏を受繼ぎ世々の祖の創め坐し、家業を彌續々に
受傳へつゝ、萬飽ぬ事無く殖り榮えて在る事の原因を、懇に窺覺ては、大神等の深き

遠き廣き厚き御恵に依てこそと仰ぎ畏み嬉み奉り謝び奉りて此月の四日と云ふ
 日を始めと御祭殿に仕奉り大御心を和め奉ると今日の此日に至る迄或は煙火或
 は競馬或は俳優或は角力能樂など種々の枝藝をも行ひ語り舞ひ言祝ぎ奉りつゝ
 獻る幣帛は鏡如す餅八束穂の荒稻白雪如す洗米美酒は心那久斯と饗上高知饗腹
 滿並へ鱒廣物鱒狹物沖津藻菜邊津藻菜甘菜辛菜御水堅鹽に至る迄打列ね常世の
 香果をも取添て今日の御饗と進らくを那久斯の饗の彌高に鱒の廣物彌廣に饗御
 饗の足御饗と樂しく平けく安けく聞食て天津日嗣の御隆は天地日月の蔭高く行
 ては還る事の如く限無く守奉り大御國內にも四方海にも吹立風の噪ぎ無く八重
 及浪の亂れ無く荒木の眞弓に大羽々矢執て射放つ事の如く清く正き美しき心安
 國の眞秀國と輔ひ奉り給ひ皇太子又親王等百官人等天の櫛弓始を慎み終を調へ
 萬の事違ふ事無く曳注連繩の端長く彌續々に長く久しく立祭え仕奉らしめ給ひ
 氏子(信徒)の刀禰悉皆天下四方國の公民等に至る迄身をも心をも健全けく負と負
 ふ家業勤め締りて茂し八桑枝の如く立榮しめ給ひ敷島の大和心と咲花の朝日に
 句ふ事の如く清く潔く君の稜威國の光を四方八方に輝かさしめ給へ仰がしめ給
 へと恐み恐みも白す。

(四) 山神祭祝詞

小野清秀

此の山神祭以下地鎮、新初、柱立、上棟、遷座等の諸祭は我國古來の祭儀中最も重要なるも
 のにて、各地の宮殿人家を始め其他學校銀行會社の建築に至る迄何れも其の建築物の
 鞏固安全にして永久に幸運ならむ事を神祇に祈願するなり、然れば本項の祝詞は左の
 作例を参照して如上の趣旨を貫徹すべきやう心懸くべきなり、
 掛巻も畏き大山祇大神の廣前に白さく大神の主領座せる山々の大峽小峽に雙立
 る大木小木を打伐りて本末をば山神に祭りて中の間を持來りて天の御蔭と隠り
 住む家居を始め或は器械に作り或は炭薪と爲して公民の世を渡らむと爲るを神
 隨憐み給ひ惠賜ひ山人の取持斧の缺る事無く杣人の引る綱手の絶る事無く手の
 躓足の躓不令在患幸へ給へと齋清の御酒御饗を如海山置足はして旭の豊榮昇に
 稱言竟奉くと恐み恐みも白す。

(五) 地鎮祭祝詞 六人部是香

掛巻も畏き大地主神壇山姫神産土神の御前に白さく此の新室敷居に此地を齋鋤
齋鋤を取持て石切平均地曳平均掃清て家居の地と齋定むと爲て奉る幣帛は由紀
の御食御酒は豊戸高知豊腹満並て山野の物は甘菜辛菜青海原の物は鰯廣物鰯狭
物奥津藻菜邊津藻菜に至る迄に如横山置足はして奉る幣帛を安幣帛の足幣帛と
皇神の御心も平けく所聞食て此の新聖宮家地の底津磐根の極み下津網根波布蟲
の禍無く夜守日守に護給ひ祈み給へと鹿自物膝折伏宇自物頸根突抜て稱言竟奉
くと白す。

(六) 新始祭祝詞

掛巻も恐き八意思兼神手置帆負命彦狭知命三柱の大神等の御前に恐み恐みも白
さく此度木工姓名が此の處に御殿家倉門合造初むと爲て今日の生日の足日に大

前に御酒御饌奉供り手斧初の御祭奉仕らくを平けく安けく聞食して今日從り日
日に勞務むる木工の道に恩頼を幸へ坐て執行ふ工人等が手の躰足の躰に過つ事
無く打墨繩の一筋に勤み務めしめ給ひ法の任に思慮りて違ふ事無く速く營作竣
功しめ給へと恐み恐みも白す。

(七) 立柱祭祝詞 祭文例

挂も恐き手置帆負命彦狭知命の大前に恐み恐みも白く木工何某が此神宮殿或は幣
御御門或は家倉會社 銀行鐵道等上に同じ 作る業を大神等の廣き厚き御恵に依て打墨繩も執る手斧も
無違事無過事柱桁梁を始其外の物等を可有狀に作訖ぬ故是以て今日の生日の
足日に齋柱建始むと爲て大前に大御酒居並稱辭竟奉狀を平く安く聞食て今も往
前も彌益々に恩頼を幸へ坐て不事過令建訖給へと恐み恐みも白す。

(八) 上棟祭祝詞 同部

挂卷も恐き八意思兼神、手置帆負命、彦狹知命、三柱の大神等を、此の伊豆の神籠に奉
 招奉令座て、大工姓名恐み恐みも白さく、此の宮上、家命門命等、造事始てより、大神等の
 廣く厚き大御恵に依りて、日に異に事執行へる工人等が、手の躓足の躓に過つ事無
 く、今日しも如此梁棟上げ畢ぬる事を嬉しむ辱み奉捧る禮代の御饌御酒御鏡餅種
 々物を平く安く聞食て、此の大宮を安宮と吾皇前、の御靈給ひて、建造れる御殿、門上
 には、雨降り風吹き地震揺るとも、柱桁棟梁の動き傾き折れ損はる事無く礎せし
 堅石の常磐に堅磐に變る事無く、取上げし棟木の彌高に、千代萬代に立榮しめ給へ
 と、恐み恐みも白す。

(九) 鎮座祭祝詞

祭文私稿

此の何々の地を、荒草刈拂ひ高低きを打平均し、打堅固め、底津岩根に宮柱太敷立、高
 天原に千木高知り、菅疊八重敷、雙羅疊八重敷、種種々の神寶をも設備へて、招奉り令
 坐奉り齋鎮奉る掛卷も綾に畏き、何々大神の御前に、齋主某姓名、恐み恐みも白さく、

八十日々は在れども、今日の生日の足日の吉辰を卜定て、大神を此殿の宇豆の玉床
 に波自弓の始て齋鎮奉りて進る幣帛は、洗米神水、堅鹽鏡の餅御酒は、麩の上高知り、
 麩の腹滿並て、海川山野の種々の味物を清き明き心計の禮自の幣帛と捧奉り、五百
 枝眞賢木に青和幣白和幣を取垂て、太玉串と棒持ち、神職諸同心に手拍拜み、仕奉ら
 くを宇豆那ひ給ひ、過犯しけむ罪穢有らむをば、神直日大直日に見直し聞直し坐て、
 獻る幣帛を安幣の足幣と、平けく安けく聞食て、今日より後は、此の御殿を、常宮の靜
 宮と彌遠に彌長に鎮坐して、時々御祭をも絶る事無く、怠る事無く仕奉らしめ給
 ひて、夜の守日の守に、守恵まひ幸給へど、恐み恐みも白す。

(一〇) 神殿修繕祭祝詞

祝詞作文集成

掛卷も恐き某大神の宇豆の御前に、姓名恐み恐みも白さく、吾皇神の鎮まり座す、此
 の御殿も、許々太の年月経ぬる随々、最甚く古び荒れに荒れば、今度某等相議りて、
 大神の氏子を語らひ、大殿修繕ひ仕奉らむとす、故年中に月を選び、月の中に日を

選定めて、今日の吉日の足日より、其の工事に取懸らむと爲る状を、聞食字豆那比給ひて、始終事幸く、枉事無く成畢へしめ給へと、恐み恐みも告奉らくと白す。

(一一) 神幸御所祝詞

神職必携

掛巻も恐き、皇神の大御輿を、此齋場に御供仕奉り來て、昇据奉座せ奉て、職姓名畏み畏みも白さく、例の任に今日の大御祭に神幸の御裝仕奉り、大路を掃清め、百杖を持列ね、御棹を立並べて御先を追ひ押立て、箴手は久堅の天雲に飄り、指頭挿せる御笠の花は、天傳ふ日影に照耀き、打鳴す鼓音は、御室山の反響、打動み、吹鳴す笛音は、御手洗川の流水と澄波り、丁等が弱肩も手豊に、大御輿を昇上奉り、侍等が眞袖、打拂ひ、御佩の太刀、御執の弓矢、伊探持、神職等、白妙の齋服忌襲て、侍奉り、(官吏等禮服、敬纏ひ、御尾前も志美々に伊群列り、御供仕奉る任に、集れる信人等襟、撮合せ、袖振延え、所狭き迄引列り、拜奉る平手音は、多々志々と打聞えつゝ、長き神幸路も長しと思はで、齋場に着給ひぬ、故御前に御旅の御饗を捧獻る、色々の物を美酒の美味しと、赤丹穂に所

聞食鏡如す、餅の御饗、御面足ひに見行し、盛の御饗の高々に、大魚小魚の和やかに、受給へと、八十玉串の取々に、稱言竟奉らくを、面向しと、所聞食て、天皇尊の大御代を、足し御代の茂し、御代に幸へ奉給ひ、御氏子、信徒諸家、業怠る事無く、恪み勤しめ給ひ、作りと作る物等を、豊に向榮に、成幸へ給ひて、靡く箴手の饒ふ里、御笠花の美しき御民と在らしめ給ひ、守護り給へと、彌開手打上て、畏み畏みも白す。

(一二) 祈晴祭祝詞

六人部是香

此の祈晴祈雨祭以下は、主として年穀の豐饒を祈請し、鎮魂疫神毒目等の諸祭は、専ら人民の健全を祈願すべき重要な私祭にして、此の神徳の厚薄は、直に國民の生活に影響するが故に、神官職は大に慎重の態度を維持し、熱心至誠を以て、神明の感應を期せざるべからず、然れば本項の祭詞を作らむする者は、何れも此の趣旨に基き、作例の内容を委かに會得すべきなり。
此は世に霖雨する事甚しく、數旬に亘りて、尙歇まず、爲めに五穀を始め、其他の農作物一切を傷害するに際し、速に其の雨の晴む事を祈願する祭なり、依りて其の意に基き、祭詞を作るべし。

此里の宇夫須那神と持崇く掛巻も長き皇神を始奉り高龍神開神天水分神國水分神天久比奢母智神國久比奢母智神天津神千五百萬國津神千五百萬の皇神等の御前に白く此頃雨雲久く覆ひ霖雨降て高山の末短山の末より作久那太理に落瀧つ川の瀬溢れて百姓の作と作物は五穀を始めて草の片葉に至まで不生傷へるが故に百姓等憂歎きて寐も不安佐麻與比有を大神等相宇豆那比給て雨雲を科戸の風の氣吹掃て天津日の伊照徹らし百姓の作と作物は五穀を始めて草の片葉に至まで成幸へ給へと禱白す事を進る白き馬の耳彌高に所聞食と恐み恐みも白す。

(一三) 祈雨祭祝詞

青木陳實

此は世上幾句となく早打續きて五穀を始め其他の作物悉く拓潤する災に逢ひし時速に御雨を降して救ひ給はん事を祈願する祭なり依りて作者は其の意を述ぶべし。何々神社の御前に御酒御饌を奠て乞祈奉らくは植し田も蒔し畠も此頃久に雨不降月を重ね日を連ねて天津日の御照し直照に照續き河の流れも絶え果て池の水も

盡行て作と作物は朝に凋み夕に枯れ公民諸の夜と無く晝と無く所爲べ知らに嘆惑はひ思悲て天津水を仰奉り請奉る状を皇神の御心に惑と看行し輔ひ給て由々敷雨雲悉に四方の御空に立覆ひ光神鳴波多々伎速雨頻に降瀧て甘水の良水を心足ひに受け令足坐て河に漲り池に溢れ國土の限り潤ひ亘り田毎無隈く滿湛て枯損ひし田畠悉如舊く茂榮に可立榮き廣惠を幸給へと恐み恐みも白す。

(一四) 鎮火祭祝詞 同上

此は生民の晝夜取扱ふ火の過失より大災を起す事あるか故に其の禍無らむことを冀ひ神代より傳ふる故事に依りて鎮火を祈願する祭なり依りて其の意を述ぶべし。

掛巻も長き火神の御前に御酒御饌を奠て乞祈奉らくは朝夕に食物を炊ぎ羹を煮剛鐵をも柔け穢をも盡失ひ闇黒を光し寒凍を温め顯世の人に取て片時も無ては協ぬは火なるを其速び發るに至ては數知ぬ燒家令失資産人をも失ひ命をも損せて甚も忌々しく戰慄べき大なる災を蒙を以て人草諸の晝と無別事其扱を畏

五八
み慎て每人に取用乍有れば其些少過の有とも建給ひ進給ふ事無して御心安く
穩に居坐と古伊弉册神の宣給し御定事を以て言祝鎮奉る事を平けく安けく聞食
と此清水埴土匏川菜の四種の物を奠て直稱に奉稱る事の由を捧る水の清く平に
汲取る匏の漏さず落さず明に聞食し首肯坐て安く平に鎮坐と恐み恐みも白す。

(一五) 鎮魂祭祝詞 小野清秀

此は人の身上に非常の異變ある時、起居の間に心神の放散惶迷して落付かず、爲めに大
事を誤るものなれば此の放心せる魂を各人の腑内に靜安ならしめ久遠に壽福を祈願
する祭なり、依りて其の意を述ぶべし。

懸卷も畏き大宮中の神殿に座神魂高御魂生魂足魂留魂大宮能女御膳津神辭代
主大直日神等の御前に畏み畏みも白さく高天原に神留座神魯岐神魯美の命持て、
宇麻志麻治命の御父饒速日命に十種の瑞寶瀛津鏡邊津鏡八握劍生玉足玉道反玉
死反玉蛇比禮蜂比禮品々の物比禮を授給ひて天津日嗣と大八島國所知食皇御孫
命の大御身を始め豊葦原の水穗國に在ゆる現き青人草等が身に至まで阿都加比

奈夜米流所有むには此の十種の瑞寶を合て一二三四五六七八九十と云て布流倍
由良々々と布流倍如此奈志氏ば死れる人も生反りなむと言依して天降給ひし御
因縁に依て志貴島の大和國檀原の大宮に肇國所知食座し天皇の大御代に宇麻志
麻治命に令て大御魂を齋鎮奉しめ給ひし御例の隨々御代々々の天皇の大御代に
も仕奉しめ給ひし御神事に習ひて掛卷も畏き大宮中の神殿に座神魂高御魂生魂
足魂留魂大宮能女御膳津神辭代主大直日の大神達の大前に宇氣槽覆て撞登騰
呂加志天の敷哥宇多比阿計て浮れ往まくする玉緒を多志に結留て魂結の神事仕
奉る状を宇麻良に所聞食幸へ給へと献る幣帛を平く安く所聞食座て某が身に阿
都加閉奈夜米留佐加美阿倍具病をば献る嚴の清酒伊登須美夜加に伊夜し給ひて
曾我命をば堅酒の堅磐に常磐に守幸給ひて玉緒は齋の庭佐良受現身の世の長人
と在しめ給へと乞祈奉る言の由を平く所聞食給へと猪自物膝折伏賴自物頸根衝
拔天の八平手打上て畏み畏みも白す。

(一六) 神樂奉奏祭祝詞 祭文彙略

此は氏子崇敬者の祈願又は報賽として神社に神樂を奏し神慮を慰安する祭なり依りて其の意味を述ぶべし。

掛卷も恐き某大神の御前に、恐み恐みも白さく、大神の高き尊き大御徳を重み、廣き厚き大御恵を乞禱奉らむと爲て、今日の生日の足日に、神職等齋麻波利清麻波利て、大御神樂を式の任に事執持て仕奉らくを、平けく安けく聞食せと白す、如此仕奉に依ては、神代の昔天鈿女命の天磐戸の前に空筒伏せ庭燎を擧げ神懸して神樂遊び爲給ひし古事の例の隨に、御前に仕奉らくを、大御心も宇豆良に、鈴の音の彌高々に聞食て、廣き厚き大御恵を垂させ給ひ、天下は浦安く、四方の海は浪静けく、風雨の時節を違事無く、五穀は豊に茂榮に令熟給ひ、各々も家門高く廣く、諸の産業を緩事無く、怠事無く、彌獎に獎め、諸の災は、萌さぬ先に遠く拂ひ退け給ひて、親族家族命長く、子孫の彌繼々彌益々に令榮給ひ、夜守日守に守幸給へと、鹿自物膝折伏、宇自物

頸根突抜て、恐み恐みも白す。

(一七) 年神祭祝詞 祭文例

此は年穀の豐饒を神祇に祈願する祝詞なり作者は其の意にて参照すべし。
大年神御年神若年神と御名は白して、稱辭竟奉くは、毎年に春の初に、此神棚に招奉りて朝夕に御祭仕奉くを、平く安く聞食と白す、此如仕奉に依て、手脰に水沫搔垂向股に泥搔寄て、取作む奥津御年を始め、穀物等百の草木に至まで、不成傷ふ事無く、蝗及種々の病不令有、雨風時節に協ひて、農粟の便を失はず、守給幸給へと、恐み恐みも稱辭竟奉くと白す。

(一八) 疫神祭祝詞 廿九題作例

此は世に惡疫の流行して醫業其他に全力を盡すも、日々に蔓延して、底止せざれば神祇の靈教に依りて速に撲滅せむ事を祈願する祭なり、作者は其意して参照すべし。

此の所に神籬立て招奉り令坐奉る、掛卷も畏き、建速須佐之男大神の大前に、恐み恐みも白さく、此項疫病起りて、村内の人民多に惱み苦むが故に、醫師等は更なり、人民等品々に力を盡して防ぐと爲れど、尙も蔓延る状態れば、進むも知らに退くも知らに、家業をも不營日に異に憂ひ恐はひ、今は大神等の廣き厚き御恩頼に依り奉る外なしと、御饌御酒種々の物を捧げ獻りて、御祭仕へ奉り乞祈奉らくを、平けく安けく所聞食て、大神の遠き神代に、蘇民將來の親族を救ひ給ひ助け給ひし事の如く、高き貴き大稜威を以て、疫神を始め疎び荒ぶる物氣を、神祓に祓退けて、病臥せる人をば速に癒し給ひ直し給ひて、夜守日護に幸へ給へと、畏み畏みも乞祈奉らくと白す。

(二九) 告神寶奉納祝詞

祭文私稿

此里の底津岩根に宮柱太敷立、高天原に千木高知りて、神隨鎮座坐す、掛卷も畏き、何々大神の大前に、恐み恐みも白さく、汝大神の廣き厚き大御恵に依りて、諸人が家にも身にも、惡事無く、日に異に彌榮に榮えしめ給ふ事を、重み奉り尊み奉り、恭み奉るが故に、今度何々い思起して、諸人に議り、何日を大神の神寶と、長く久しく廣前に納奉らくを、眞澄の鏡の面游之波流之て、見曾奈波之給ひ獻る諸人の清く明き誠の心を、慈し愛しと、宇豆那比給ひ、神寶を彌遠に彌長に、愛納給ひて、今より後も、彌益に夜の守日の守に、守幸給へと、恐み恐みも白す。

(二〇) 獻燈詞

同上

掛卷も畏き、何々大神の大前に、恐み恐みも白さく、齋麻波理清麻波理て、掲奉る嚴の燈火を、明く清く、宇豆那比給ひて、火甕の如輝く神の惡しき事無く、五月蠅なす騒ぐ物の禰事無く、参入り罷出る人の手の躓ひ足の躓ひ爲さしめず、彌進に進め、彌勤に勤しめて、答過有らむをば、神直日大直日に見直し、聞直し坐て平けく安けく仕奉らしめ給へと、畏み畏みも白す。

(二二) 流鏑馬式祝詞

祭文私稿

此の流籠馬式以下探湯、養目式等の神事は古來神社若くは民間に行はれし特殊の古儀式なれば今尙ほ各地に於て舉行せらるゝなり、然して流籠馬は籠馬の開籠、馬術の教場等に用ひられ、探湯養目式は氏子特殊の祈願又は公私の祈禱式に慣用せり、是れ皆練馬の發達と國民の健全を目的となすか故に常に其の意を以て参照すべし。

此の某神社に鎮坐す、掛卷も畏き某大神の宇豆の大前に、恐み恐みも白さく、藤原宮に天下知食し、天皇の大御世に、事始め給ひしより、櫻木の彌繼々に行來し例の隨に己が自志馬牽立て、大前に參來て今日なも夜夫佐米の和祁任奉らくを、廣き厚き大御心に、受宇豆那比給ひて、献る幣帛を、安幣の足幣と平けく安らけく聞食せと、恐み恐みも白す。

一一一 探湯式祝詞 祭文集

掛卷も畏き、八十神津日神、大禍津日神、神直日神、大直日神、四神に、干庭神と坐す太祝詞命、櫛眞智命、二神をも、此里の産土神と持崇ぐ、吾大神の御前に、奉招り奉坐りて神職某、畏み畏みも稱辭竟奉らくは、今日を生日の足日と齋ひ定めて、此處に探湯瓮を

居る伊豆の眞湯を沸して、氏子の八十氏人を集へて、區訶多智の神事奉仕り、虚實を正し定めむと、誓奉り願奉る狀を、神隨も聞食諸ひ給ひて、天之禍津日と云神の言はむ八十の禍事萬の惡業に、氏子の諸人は更にも言はず、天下四方の公民諸に至る迄一人も相麻自許里相口會へしめ給はず、衆多の人の中には思はぬ過計らぬ咎有りとも、神直毘大直毘の神の禍事惡業を、憎み嫌ひ給ふ御心と、見直し聞直し坐して、卜庭の神の御心と、告出でむ太任の卜事をも、一つ御心に守給ひ助給ひて、吉事凶事の分別を、一も狂ぐる事なく、違ふ事なく、正き直き赤き清き誠の卜事に、登保加美延美多米と、町は正手にも多米合へしめ給へと、畏み畏みも白す。

一二二 養目式祝詞 撰秀成祝詞文集

掛卷は畏かれど、出雲國杵築宮に坐大國主神、大和國三輪山に坐大物主神、二柱の神の御前を、姓名畏み敬ひ拜て、稱言竟奉る、此大神に、奉獻弓矢は、上津代に天照大御神の速須佐之男命の御荒びを、退け給はむと、御會比良に千入之鞆を負ひ給ひ、大御手

に弓腹振立給ひ太流を始め須佐之男命の大國主神に八十神を坂之御尾に退伏河
の瀬に追撥へと生弓矢を授け給ひ皇御孫命の天降坐時に不隨順神等を拂ひ退け
むと天忍日命天津久米命天之波士弓を取持天之眞鹿兒矢を手狹み御前に立て仕
奉しに至まで凡て仇なす物を退たる古の例に依て今奉獻此弓矢を生弓矢の足弓
矢と守護給ひ天鹿兒弓天羽々矢と取成給へ如此取成給ひ守護給ふ此弓矢を取
奉獻餅鏡の望月の如く大御酒の八折に引折て御魚の尾緒立進て訴云く云卷は畏
き此二柱の大神達并天神千五百萬國神千五百萬和魂は鎮坐荒魂は皆悉弓にも矢
にも懸坐て皇神の愛給ふ人草を惱つゝ世を迷す妖怪をば坂の尾毎に退伏河の瀬
毎に追撥給ひし事の如く葦原中津國に違ふ神も無く不隨順人も無かりし事の如
く神の依給し此弓矢の稜威は彌輝き神の傳給ひし此墓目矢の業は彌正く立所に
御驗得しめ給へと畏み畏みも申す。

第參編 家宅諸神祭祝詞

本編に列舉せる數項の諸私祭は往古より我國の家庭に於て常に營まれ來る年中行事
の神儀にして最も重要なものなり苟も皇國に安住する者は其の家門の貴賤又貧富
を別たす歳時の恒例臨時を問はず隨時に神官職を招待し諸家の御神前に於て嚴に調
度を設備し懇に各祭を執行せざるべからず斯くて家人は神恩皇徳の多大なるを感謝
し益々家運の隆盛と子孫の繁榮を祈請し奉ると共に永遠に神祇の加護を祀祭すべき
なり即ち左に掲ぐる諸神祭祝詞は此の主旨に依りて精選せる作例なれば讀者宜しく
其の意を以て参照せられたし。

(一) 家内日拜詞 神事年中行事

本項は第一編に掲げし毎日祭祝詞の補遺にして一家庭の主人を始め下僕下婢に至る
迄家族一同毎朝必らず神前に跪拜し恭敬を盡して奉唱すべき詞なり作者も亦此の意
を以て見るべし。

掛卷も恐き天之御中主大神高皇產靈神皇產靈大神天照大御神大國主大神產土大
神等の大前を謹み敬ひ恐み恐みも白さく大神等の廣き厚き恩頼に因りて食物衣

服住所を始め萬の事等求むる任に得さしめ給ひ、勤むる任に成らしめ給ひ、親族家族和び睦び日に異に心安く樂しく撫給ひ守り給ひて此の世を去りぬる後も永久に治め給ひ恵み給ひ、幽冥の制度の隨に神の御列に入らしめ給ひ、裔の彌次々に家をも身をも守り幸へ助け給ひて現世も幽世も歡ひの變る事無く盡る事無く、恵み給はん事を嬉しき添けなみ稱言竟奉らくを、御心も平和に聞食せと、恐み恐みも白す以上一回

天津神國津神守り給へ幸へ給へ以上一回

(二) 拜天神地祇祝詞

黒澤 荏居 後集

本題は先づ皇室の隆昌と國家の繁榮と國民の幸福を祈請するものにして其の辭章には種々の構成あれども此詞の文意は主として大御代の隆盛と國民の繁榮とを祈り、皇威皇道の衰頹を歎きて古道に復興せしめ給ふべき趣旨に成れり、依りて其の意味を以て參看すべし。

高天原に神留坐す、八百萬の天つ神等、大地の極み傾知き伊坐す、百八十の國つ神等

の大前に申さく、葦原中國の國の眞區の瑞穂國と我大君の知食す大御國の悉事無く恙無く安國と平けく天地の共遠長く常磐に堅磐に知食す可く其大御惠を蒙り奉る大前つ君等を始て、靱負ふ伴之緒、太刀佩く伴之緒、伴之緒の八十伴之緒、天の下の大御寶人と有る人の悉大御法を過つ事無く、犯す事無く守らひ坐し、若過犯さむ天津罪國津罪諸の罪穢は、大直日神直日に聞直し見直し坐して、崇り疎び荒ぶる事無く、雨の幸ひ風の幸ひ四の時失はず五の種つ物愈榮えに實りて、生御世の足御世の嚴御世と夜の守日の守に守らひ坐さねと申す。

辭別て神風の伊勢の國佐古久志呂五十鈴の宮に高天原に千木高知坐す、天皇が大御祖の大御神八雲立つ出雲の國八百丹杵築の宮柱底つ岩根に太敷坐す、天皇が大御守りの大神の大御前に申さく、此葦原の中つ國の在の盡我大日本に手夫里異なる國の退き島の退き鹽沫の留る限馬の爪伊都久す極み皇孫の尊の知食すべき大御國內と任せ給ひ依さし給へる事の志太米天皇命の大御守と顯事避奉りて、幽事知す事の志太米高麗百濟新羅を始て、許多の加良國共も漸漸に服従ひ來しを、中々

七〇
に其御耶都古國の手夫里共に損はれて御親の尊の教へ給ひ御孫の尊の受け續給ひ我皇祖の行給へる誠の道の衰へ廢れぬるに付ては清く赤く直き大和魂を忘れ醜めき穢き戒心の奴等も世に出來て何時しか大御稜威の有れども無きが如く成りにたる事よ五十鈴宮の神與左志杵築宮の神守に此狂事を拂ひ給ひ清め給ひて掛まくも思き古風の茂御世に立歸らしめ給へと申す。又負氣無く怯き身にも此く思ふ眞實心を憐び坐して道の學の事成りぬべく名をし立べく親族家族が上迄も身に禍無く恙無く春花の家の榮えを天地の大神等諸眞澄の鏡の明けき大皆に懸給ひて恩頼を賜ひぬべく鶴如す伊這ひ回り鶴自物頸根突抜き岩潰す畏み畏みも乞祈み申すになも有る此く祈申す事の由を天津神は天の八重雲を伊頭の道別に道別きて聞食し國津神は高山短山の伊穗理搔別けて聞食入れ給へと申す。

(三) 宅神祭祀詞 祝詞文例

此は世の家宅に居住する者の祭儀にして毎年一定の祭日必らず家神を奉齋し其の神

護に依りて永遠に災害なく家門の益々繁榮せむ事を祈祝するなり故に其の意を以て參照すべし。

八十日日は在ども今日の生日の足日に掛まくも長き屋船久々乃運命屋船豐宇氣姫命の大前に白さく此の家宅を底津岩根の極み下津網根波府蟲の禍無く天の血垂飛鳥の禍無く築立し柱の傾き引渡せる桁梁の損ひ無く打上し棟の撓み取替る屋根の噪ぎ無く打立し釘堅成す楔の緩み戸窓の錯ひ動鳴事無く火の災ひ水の憂ひ地震霹靂の障有事無く甘美家の佳家の福家と堅磐に常磐に守り幸へ給へと進る幣帛は由紀の御食御酒は甕の上高知甕の腹滿並て山野物は甘菜辛菜青海原物は緒廣物緒狭物奥津藻菜邊津藻菜に至までに種々物を横山の如く置足はして棒げ奉らくを安幣帛の足幣帛と平けく安けく所聞食て今より後は四方四隅より荒び疎び來む狂物に相率り相口會ふ事無く諸の歎事は兆さぬ先に防逐ひて病煩ふ事無く子孫の八十連續家の業彌榮に立榮えしめ給ひ夜の守日の守に守惠幸へ給へと鹿自物膝折伏宇自物頸根突抜て稱言竟奉くと白す。

(四) 門神祭祝詞

祝詞初學

櫛磐龍命豊磐龍命の御前に恐み恐みも白さく大神の夜は夜の明る極み日は日の暮る、迄此れの門邊に湯津磐群の如く塞坐して惡事に相交こり相口會しめむと欲る天の禍都比又貨財を加蘇ひ奪はむと欲る盜賊等が四方四角より疎び來て前つ戸に伊行違ひ後つ戸に伊行違ひ候はくを大神の上を守り下を守り待防ぎ掃却り言掛け坐すに依りて屋内の者等安く穩に在經る事を尊み嬉み年毎の今日を吉日と撰定めて御祭仕奉り稱辭竟奉らくを平けく安けく聞食せと恐み恐みも白す。

(五) 竈神祭祝詞

青木陳實

此は世人は皆火食して生存するが故に其の火氣を守護し給へる竈神の大恵を感謝すべく家毎に之を祭り四時に火災の無らむ事を祈願するなり。讀者その意して見るべし、掛卷も畏き竈神と齋き奉る火武主比神奥津比古神奥津比賣神の大前に恐み恐も

白さく世に生る人草の限は上代の昔より今の現に至まで鑽出す火の幸を得て食物を炊ぎ寒を凌ぎ不飢不凍有經る事は専此火の恵に依る者なれば毎家に竈定め火處祝て年久に奉齋る例なるが故に、今何某も今日其事を行ふと爲て捧物奠て御祭奉仕る狀を平けく安けく聞食て朝夕に焚上る火の一速振る事無く夜晝と不言取扱火の進ひ不令有嚴戸黒益し彌益に此屋根裏の凝烟の八束垂まで焼擧げ地下には下遠に底津岩根に燒凝とも荒び進む禍事無く御心穩に安まり居坐と奠る御儀の平瓮の平に備る水の直湛に奉稱る事を聞食て平けく安く鎮坐と恐み恐みも白す。

(六) 井神祭祝詞

同上

此は世人の一日も缺ぐべからざる井水の惠澤を感謝し、時に隨ひて其の井神を祭祀し、永久にその恩徳に潤はむ事を祈願するなり、作者は此の主旨に依りて記述すべし。掛卷も畏き彌都波能賣神御井神鳴雷神の御前を職姓名謹み敬ひ畏み畏みも白さ

七四
く顯世人の無間無時、日に異に汲用ひて、食物を炊き穢たる物を濯ぎ、清く健全に有ける事は陸地無限く滿通れる水の恵の廣きに依れば、各自家居する人の限り井を作りて不祝置は無く、又以時此を奉齋るが故に、今何の某も其例の隨に、今日の生日の足日を以て、捧物奠て、此祭奉仕る状を平けく安けく聞食て、今も將來も汲取る水の障無く、烈き早魃にも潤る事無く、打續く霖雨にも濁る事無く、清く冷に澄渡たる味水の眞清水と常磐に堅磐に、此生井の淺る事無く、水底深く涌出る水は、掘たる井筒の都々美無く、時日不別汲得るゝ事は、釣瓶の綱の遠長に無絶事く、無盡事く、奇し井の幸井と守恵み幸へ給へと、恐み恐みも白す。

(七) 日待祭祝詞 祭文彙

此の日待、星神祭は春秋の季節又は四時に各家にて天照大御神月讀命八百萬の天つ神を祀祭し、其の御光徳を感謝すると共に將來に於ける家運の長久と子孫の繁昌を祈願するなり、依りて其の意を記述すべし、但し此の日月二祭は各人の寄集りて壽社を結び一間となりて奉齋せる趣なり。

掛卷も綾に恐き、日刺方の天津日の御國を主領き知召給ひて、皇御孫命の食國天下四方里々を天之壁立極國之退立限青雲之靄極白雲之向伏限漏事無く落事無く、日に異に大御光彩明麗く伊照通らして天益人國益人彌益々に飛禽走獸昆蟲游魚を始め、海川山野の草木玉石に至る迄、豊に茂榮に生し立て給ひ、彌高に彌廣に蕃殖り行かしめ給へる天照坐皇大神の大御徳を仰奉り頂奉らむとして、新玉の月立初むる今日の朝日の豊祭昇に、講中の人等諸々寄集ひて待出で奉るを、大神の御心も穩ひに聞食諸給ひて家々に諸の禍事爲在す身に萬の病無く、作と作す業に思慮の覺深く種々の利に心敏からしめ給ひて、家々に給ぎ人々に足ひて子孫の八十續に至る迄、樛木の彌續々に五十櫃八桑枝の如く令立榮賜へと神職某畏み畏みも白す。

(八) 月待祭祝詞 祭文彙

奴婆玉の夜の食國を知食し、其光彩天津日に次て麗しく、四方八表の國々里々所々を、至らぬ限無く伊照通らして清かに明らかに蒼生諸を救給ひ、助給ひ恵給ひ憐給

七六
へる掛巻も恐き月讀尊の大前に講中の人々諸集侍りて此月の都基茂利の二十餘
三日の夜を甘夜の良夜と齋定めて終夜に待出で拜奉らくを平く安く聞食諸給ひ
て講中の人々か家にも身にも禍神の禍事無く煩大人の煩爲在す産業を无緩事く
无怠事勤み務めて其家門を令起給ひ令廣給ひ堅石に常石に命長く子孫の八十連
屬に至る迄五十櫛八桑枝の如く令立榮給ひて過犯す事の有むをば見直し聞直し
坐て夜守日守に守給ひ幸へ給へと神職某太玉串に隠侍りて畏み畏みも白す。

(九) 星神祭祝詞 祭文私稿

久形の天津御虛に奴羽玉の毎夜々々に伊照輝く百千萬の星球内に大座坐し各も
各も持分けて傾知座る八百萬千五百萬の大神等の御前を遙に拜奉り齋奉りて恐
み恐みも白さく何恰吉事凶事の互に往來爲なるは現身の世間の常なる故にや安
見知し我大君の撫給ひ愛給ひ慈給へる公民に異しく怪しき一種の病流行て此處
彼處に惱み煩ふ者在るは最惜く最愷き事の限と思へりしを此里にも入來て病臥
せるを物識人の卜術以て質すに星運の不良障なりとぞ云ふなる故禮代の幣原進
りて御祭仕奉らくを慈し愛しと所思食て障らふ事無く煩らふ事無く逝水の早く
速けく妖氣を掃退け星運の直く正しく人性の良も不良も神和しに和し神幸ひに
幸給ひて魂幸ふ天然の命の限り長壽しめ給へと恐み恐みも白す。

(一〇) 祈家内安全祝詞 祭文私稿

懸巻も畏き吾大神の大前に慎み敬ひ恐み恐みも白さく常に愛慈み給ふ某が家内
に疎び荒び來む狂神の上より仕かば上を守り下より往かば下を守り相萬自古利
相口會へ給はず病しき事無く煩しき事無く家内古止恭止明く正しき誠の心以て
神を敬ひ君を尊び親子兄弟夫婦朋友の中睦合ひ異しき道惡しき教に惑ふ事無く
依る事無く家の業を彌務に務め彌締に締りて惠良々々に和良比仁岐波比榮行く
門と有るべく夜の守日の守に守惠まひ幸給へと恐み恐みも白す。

(一一) 祈病平癒祝詞 同部讀

此は世の生民氏子、若くは家人の疾病に罹る事ありて名醫國手の勞を煩すも顯しき効
を見る能はざるに際し神明の靈徳に依りて速に全快せしめ給はむ事を祈願する祝詞
なり、讀者は其の意を以て委曲に内容を参照すべし。

掛卷も畏き何神社と稱辭竟奉る、何大神等の御前に、恐み恐みも白さく、何國何郡何
村何誰い、何月何日(去)し(更)より、何病に罹りて悶熱懊惱むに依りて、百方に醫療の術を
盡し看護の法をも惰らず朝夕に直り怠む事を圖れども、其の驗無ければ、無く日に
異に重行狀なれば、恐れれど今は大神等の廣き厚き大御恵を仰ぎ奉り、祈願奉る外
無しと思ひ定めて、大御前に禮代の幣帛獻り(洗)米清酒種々の味物を机代に供へ置
て(乞)祈奉る狀況を阿波禮と見備し、開食して八十禍津日の禍事をば神直毘大直毘に
直し給ひて、醫師等が用ひ飲しむる種々の藥の上に、高く尊き稜威の神靈を幸ひ給
ひ、醫藥の驗有らしめ給ひ、看護の効有らしめ給ひ、春の泡雪の照日に消行く事の如
く、秋の眞霧の吹風に晴行く事の如く、(洗)米の阿良波に清酒の(速)けく直し給ひ癒し

給ひ、廣き厚き恩頼を蒙らしめ給ひ、堅磐に常磐に息内長く、世の長人と在らしめ給
へと、畏み畏みも乞祈奉らくと白す。

(一二) 病平癒報賽祝詞 同上

掛卷も畏き、何神社の瑞の神殿に鎮座す、何々大神等の大前に、職姓名恐み恐みも白
さく、住所何誰い、何の痛付に病臥し、時速けく藥の功驗有しめ給へ、平けく安けく
癒さしめ給へと、直振に乞願奉りき、然れこそ奇き恩頼に依り、難き病も頓に癒え心
地さへ清々敷成復りぬ、夫を嬉み辱み報賽の祭典奉仕らむと、今日の生日の足日に、
禮代の幣帛を捧げ奉り畏み畏みも拜み奉る、何某が眞心を平けく安けく聞食て、從
今以往は彌益々健康に、堅磐に常盤に壽命長く令有在給ひ、子孫の八十連續に至る
迄、茂し八桑枝の如く、令立榮給ひ、家内には禍神の枉事不令有産業を彌進めに進め
給ひ、其家門を彌廣に彌遠に令起給ひ、過犯す事の有らむをば、神直日大直日に見直
し、聞直し座て、夜の守日の守に守護給ひ幸へ給へと、畏み畏みも拜み奉らくと白す。

(一二三) 厄年無恙報賽祝詞 山内祀夫

本邦には古來の傳習に男女七歳より六十一歳の間毎九年に厄年と稱して最も慎むべき齡あり然れば此祝詞は前にその厄災を解除し給ふべく神明に祈請したるか無恙に經過せしうれしさを歡びて報賽の御祭を行ひ奉る意なり又後のは家々に年積れる祈禱守札大麻等の古きを拂ひて神棚を清く新しく仕へ奉る祝詞なり讀者は前後此の主旨を以て参照すべし。

何國何郡何里に鎮り座す何大神の大前に職姓名謹み敬ひ畏み畏みも白さく現身の世俗人の言習はしに厄年と唱へて男も女も七歳より始めて六十一歳に至る迄九年毎を良はぬ年と語り續ぎ慎むべき年と言次ぐ隨に何國何郡何村何字何某い豫て大神等の稜威を仰ぎ奉りて家の災身の禍事無からしめ給へと乞祈白し、驗有りて喪無く事無く樂しき春秋を在經さしめ給へる事を嬉み恭なみて今日の生日の足日に御前に參出禮代の幣帛を捧げ奉りて拜み奉る真心を阿波禮と所聞召て、今ゆ往前彌々益々嚴の神靈を幸ひ給ひて病しき事無く煩しき事無く八十禍津

日の枉事有らしめず、堅磐に常磐に壽命長く子孫の八十續に至る迄茂し八桑枝の如く立榮しめ給へと畏み畏みも白す。

(一二四) 清神棚祭祝詞 同上

此神棚に齋ひ鎮め奉る掛卷も畏き天照皇大御神の大麻を始め奉り八百萬神等の御札の御前に職姓名謹み敬ひ白さく言卷も畏けれど年月齋ひ奉りし大御札の彌集ひに集ひ座て今は御棚も狹き許りに成り給へれば古き御神札を除き新しき御神札のみを齋ひ奉り其古きは清き忌火を以て焼き納め奉らむと爲て禮代の幣帛献るを平に安に聞食て過犯す事の有らむをば神直日大直日に見直し聞直し座て夜の守日の守に守り給ひ幸へ給へと畏み畏みも白す。

(一二五) 私宅地鎮祭祝詞 祝詞作例典範

此は世上一般の私宅に建築工事を行ふ時先づ其の地盤を鎮祭し邸宅の造營中神護を

仰ぎて總ての災異無らむ事を祈請する祭なり、作者常に此の意を以て記すべし。
 掛卷も畏き、大地主大神、埴安姫大神、阿須波大神、波比岐大神の御前に、恐み恐みも白
 さく、今度此地の荒草木根、刈除き、大石小石取平して、堅磐常磐に住むべき家居をト
 相定て今日の生日の足日に、地鎮の御祭行ふと爲て、宇豆の御酒御食種々の物を禮
 代の幣帛と捧奉り、拜仕奉らくを、平けく安けく聞食して、雨降り風吹き地震發ると
 も、底津岩根の極み築建る柱の、太く高く動く事無く、溢流る、潦水の障無く、獸類の
 荒び昆虫の災無く、取圍みし真垣の損ひ、打固むる板の、廣く厚く、彌榮に立榮えしめ
 給ひ、井桁を傳ふ蔓草の、彌遠永に異き事危事無く、夜の守日の守に、守護恵み幸へ給
 へと、恐み恐みも白す。

(一六) 新宅祭祝詞 祭文私稿

此は新に家宅の竣成したる際先づ祭典を行ひて家工諸神の靈徳を言壽ぎ、其の神護を
 仰ぎて永遠に災害なく家門の繁榮せん事を祈祝するなり、讀者その意して見るべし。

此の小床を嚴の神床と齋回り清回りて、招奉り令坐奉り鎮め奉る、掛卷も畏き、産土
 大神、屋船久々能智大神、屋船豐受姫大神、生井大神、榮井大神、津長井大神、阿須波大神、
 波比岐大神、與津比古大神、與津比賣大神、豐磐屬大神、櫛磐屬大神と、御名は申して、天
 津奇し祝言以て言壽白さく、大神等の廣き厚き大御恵に依りて、築建畢奉れる此新
 室を、今日の生日の足日に祝ひ奉り壽ぎ奉らむと、大御祭仕奉らくを平けく安けく
 所聞食受給ひて、此の某が新室はも千年萬世年經とも、下津綱根、波布蟲の禍無く、天
 の血垂飛鳥の禍無く、柱桁梁戸牖の錯動鳴事無く、引結べる綱目の緩ひ、取葺る草の
 噪無く、竹の根の伊波布家、葛蔓の長き阿良加と、打堅めたる板の廣き厚き御守を得
 て、築建てたる柱の太く高く立榮えむ事を誓奉り約奉りて、進る禮代の幣帛を、安幣
 の足幣と相宇豆那比給へと、齋主某畏み畏みも、稱辭竟奉らくと白す。

(一七) 家遷祭祝詞 遷居祭祝詞文集

此は家宅の新築落成して始めて住居の移轉を行ふ時神々を祭りて家内の安全と居宅

の怪異なからむ事を祈願するなり、説者は此の主意に依りて記述すべし。
 年の中に十まり二月と月は在ども、月の中に三十日と日は阿禮ども何月何日と云ふ日を、吉月の吉日と撰定て、懸卷は畏かれど、屋船久々能知神屋船豐宇氣比賣神の御前に、奉獻幣帛は、山野に生物は、甘菜辛菜青海原に住物は、鱈廣物鱈狹物、奥津海菜邊津海菜に至までに、齋机も撓に打積置て、稱言竟奉らく、言卷は畏き、手置帆負彦狹知命の傳給ひし家造の業を、工匠等が思過事無く、調和成たる此新室に、五百年千年も可住家居と、今日の生日の足日に、家遷爲たる此家には、火産靈神の荒びも無く、科戸邊神の進びも無くて、家内の者の齡は突立たる柱の太く長きか如く、子孫の末は、取並たる蘆藿の彌繁きが如く、長く久く守護給ひ榮昌しめ給へと、畏み畏みも白す。

(二八) 探闈祝詞 祭文私稿

此は世人の何事が思立たむとする際其の吉凶を卜定すべく神の御圖を探りて所志を決するなり、依りて此の意を述べし。

掛卷も畏き何々大神の大前に、慎み敬ひ恐み恐みも白さく、今度何某い、思起して何々の事始めむと爲るに、現身の人の心に、便無き物にし有れば、將末の吉きも凶きも得悟らえぬを以て、大前に御圖捧奉りて、一向に祈願奉らくを、大神の大御心の隨喜事も一言惡事も一言に事定給ひて、探得たらむ御圖の兆は、高光る日月の明く、眞佐夜氣く宮處の大路正しく、眞直に卜相眞賀那波しめ給へと、恐み恐みも白す。

(二九) 家祓祝詞 高階幸造

此は宮廷並に各神社にて六月十二月晦に行はる大祓式に準じ家々にても年中の季節を探み諸多の罪穢を撰ひ清めて、新に御神護を仰ぎ、常長に家運の隆昌と子孫世々の繁榮を祈願するなり。

此の神床を伊都の眞屋と齋回り清回り、合坐奉り齋奉る、掛卷も畏き、何々の皇神等の大前及天津神國津神八百萬の大神等の大前、言別て此里を宇志波伎坐す産土大神の大前、又被戸四柱の大神等の大前に、慎み敬ひ恐み恐みも拜奉り祈願白さく、高天原に事始給ひし天津祝詞の太祝詞宣申して、天津罪國津罪と過犯しけむ罪と云

八六
ふ罪咎と云ふ咎は有らじと祓申し清申す事の由を走出る駒の耳彌高に開食給ひ
此家内には今も往先も長く久しく四方四角より疎び荒び來む、天の枉津日と云ふ
神の云はむ萬我許止に、相萬自許り相口會ふ事無く、夜の守日の守に守惠まび幸給
ひて子孫の八十連家の奈利波比牟久佐賀に榮えしめ給ひ、惠良々々に笑ひ仁岐波
布門と有らしめ給ひ、諸の枉事は兆さぬ先に伊夫伎拂ひて、思しき事無く、病しき事
無く、守給へ幸給へと、恐み恐みも白す。

第四編 公私開會創業諸工祭祝詞

國家公私の起業に際して赫々たる神祇の冥護を祈請し其の成功を期すべく諸種の祭儀を行ふことは古來我が國民の美風なり、然れば諸官省の建築開闢式を始め銀行學校會社の起業開店鐵道の敷設開通等に至る迄其の建築の安固なると共にその業務の健全なる發達と永遠なる幸運福徳を神々に祈願すべき也、殊に各種の創業祭は天神地祇の大御手風に神習ひて執り行ふものなれば苟も大志を起し偉業を立てんとする際は必らずその誠意を明白ならしむる爲め先づ神明に奉誓して最後の成功を期すべきなり、然して此等の諸祭には主として其の事業に縁故ある神々を奉招し、或は各地の産土神をも併祀して幣饌を供進し恭敬以て其の祭儀に奉仕すべく、惓誠以て各自の希望を奏上すべし、尙委くは以下の作例に就き順次項を遂ひて記述すべし。

(一) 諸官省建築竣工安鎮祭祝詞 山内祀夫

此は諸官廳縣郡役所を建設せし際諸神を奉齋して其の建築の健全を始め出入する官人吏員の無恙息災を祈願し政幣の滯差なくして國運の發展せんことを期する祭なり、讀者其の意して見るべし。

是の齋場に神籬樹て招奉り令坐奉る、掛巻も長き屋船大神、又此所を宇斯波き坐す、

産土大神等の大前に齋主職名某恐み恐みも白さく、是の役所、役場、官署、はしも、是の何府、縣、市、の内なる百千の事をら總治め上中下の人の住む市町の八百町、村の八千村の萬の事を執り行ふ最も要なる所になも有ける故世の進むに連て萬の事業繁く成て其廳(何々の甚廣からす便り良からぬに依て)今度新舎を清く嚴しく高く廣く増築建設ぬるに依て今日の生日の足日を始めと入り集ひ事執行ひ始めむと爲て先大神等の大前に御饌御酒種々の御饗を捧げ奉りて稱言竟奉らくは鋪居し礎の動く事無く築建し柱の傾く事無く地震水流の災無く入居集ひて事執官人參り去出る人等は八十禍津日の禍事無く彌進めに進め彌勵みに勵み勤み勤め結りて公民諸吹風の至らぬ隅無く靡き従ひぬ可く便宜を得しめ給ひ利益を受しめ給へと請祈奉らくを平けく安けく聞食せと畏み畏みも白す。

(二) 諸官衙開廳式祝詞

青木陳實

此は各府縣廳其の他の公衙を建設したる後此れか開廳の式を行ふに當り先づ其の官

衙の榮進し行かん事を祈り併せて職員の隆昌を冀ふ祭なり依りて其の意を記述すべし。

此の官衙を守給ふ神等の御前に白さく世を所知し民を治るに帝都には百官を設け國々には地方の廳有りて諸事を統べ種々に政ちて撫公民世を安らぎ坐事は我朝廷の皇祖より承傳坐す大御手振にして最も尊く辱き制度なるに此度何々の官衙を此處に定給ひ建給て今日の生日の足日に其事始の式を行を以て捧物奠て奉言祝る狀を平けく安けく聞食て自今將來此官衙に在て事執給ふ何々を始め下僚の諸員の上にも禍神の禍事無く日に異に勤く務結て受持て取扱ふ政事は滯事無く談る事無く預れる民草の限を論導き其家業を失ふ者無く朝夕に富榮來て人草諸擊地て可悦く此舉は廣く世に知られ朝廷にも高く聞え其功績に依て官位も年々に進つ、此官衙の彌遠に立祭可く守恵み幸給へと恐み恐みも白す。

(三) 日本銀行建築地基礎祭祝詞

諱辭集

是の齋場に神籬建て招齋ひ請祈奉る此地の産士大神の御靈の御前に齋主大教正本居豊頼畏み畏みも白さく是の地に日本銀行の大室屋を建つと大工の底津石根築固め成し今日の生日の足日に東南の隅の大柱根の堅磐に築居る事始むるを以て先大神の宇豆の御前を拜みて神壽稱辭竟奉る事状を平けく聞食相宇豆那比給ひて此大工事の本末過たず手人等の手躰足躰有らしめ速けく事成竟しめ是の日本銀行の事業をも金銀花咲く御世の大御代の春の朝日の豊榮登に彌遠永く立榮えしめ給へと今より後の年月久に掛て齋ひ乞祈奉る禮代の物は豊御酒豊御饌海川山野の多米津物を置満足はし捧げ奉り手掌櫻亮に拍上て恐み恐みも白す。

九〇

(四) 皇典講究所新室祭祀祝詞

久保惠都

此は同大學校舎の新築成工に際し新室祭を行はんとして諸神を奉齋し神明の加護に依りて永久に災害なく新學の益々發達し國家文運の愈々進展せむ事を言壽ぐなり、學徒はその意以て參照すべし。

荒山の眞木の太く高く板は廣く厚く造り設けつる此

の皇典講究所國學院大學の高樓を伊豆の眞屋と齋ひ定めて招鎮め奉る屋船二柱大神の御前に天津奇護言以て言壽鎮め白さく此の新室は底津岩根の極太敷く礎昆蟲の災無く高天原は青雲の靄く極高知る葦飛鳥の災無く築立つ柱取舉る棟梁動鳴る事無く取葺ける板屋取置ける椽椽擾ぎ損ふ事無く平けく安けく護給ふ神の御名は屋船久々迺運命屋船豊受姫命と御名をば稱奉りて此の齋合を可美舎の嚴し舎と守給ひ幸へ給ふ廣き厚き大御稜威を仰奉り尊奉りて古の例の隨八尺瓊の御富岐の玉に明和幣照和幣を附て四隅に取掛け禮代の大幣帛を忌机に置足はして齋主位姓名忌麻波里清麻波里つゝも言壽鎮奉る事の漏落む事をば神直日大直日に見直し聞直して平けく安けく知食せと畏み畏みも白す。

(五) 諸學校新築始業式祝詞 山内祀夫

此は世上に各種の學校を新築し其の始業式を舉ぐるに際して學舎の健全、校風の隆昌、教學の發達を祝すると共に教職員の奮勵と學生の勤勉に依りて國家有爲の人材を出し國運の發展と文化の普及を神々に祈請するなり、讀者宜しく此の主旨を以て祭詞の

此の神籬に招奉り令坐奉る、掛巻も畏き屋船大神、此里の産土大神、又學の業に幸ひ給ふ、八意思兼神忌部神菅原神等の大前に、職姓名、慎み敬ひ畏み、白さく畏きや、吾大君の大詔を以て、國に物學ばぬ民、无く家に物習はぬ人、无かれと、言依し給へりし、任々、其旨を畏み奉りて、兼て學舎を建設し、教子等を彌集へに集へて、年まねく學業を勤めに勤めしめ、勵みに勵ましめて在けるが、年々に添ひ、月々に増て、教子等の甚多に殖にたれば、此里の里人等思ひ慮計りて、心を合せ力を盡して、如此なも美しく、潔く、廣く、堅く、此學舎を造り設け、竟にたるは、甚も芽出度喜ばしき事に、なも有ける。故、今日の生日の足日に、業始めむとして、大神等の御前に、御饌御酒を始め、種々の物を捧げ奉りて、稱言、竟奉らくは、引据し、五百箇石、礎動く事無く、築建し、百八十柱、傾く事無く、地震水流しの災無く、參り集へる、教師、教子等、種々の枉事無く、苗代小田に時を違へず、種蒔降して、生立苗を耘り、培ひ、取作るが如く、伊加傳、伊加傳人の親たらむ者は、時を違へず、其子等を、此學校に入立しめて、教師の耘り、培ふ、教に隨ひ、習は

しめて、能き人と成し、天皇御門に茂し、八桑枝の如く、立榮え、仕奉る可く、守給ひ幸給へと、畏み、畏みも白す。

辭別て、此新學合に來賓として、參集へる、貴顯庶彦學生諸、其親族教職員に至る迄、自今、往、前日に、異に授くる、教事は、學窓の夫よりも、明に、朝夕に、受學ぶ、學の業は、造立し、校舎の自棟も、秀で、官位高き者とも、爲り、廣く、物知れる人とも、爲て、奇き、才有者の、此處より、多に、起て、人の爲世の爲に、盡し、乍、皇國の光を、耀すべく、親族兄弟も、其心を以て、己が、眞名子の學事に、思を、深め、意を、込めて、怠る事無く、此の學校の、彌益に、榮む事は、打上る、煙火の光より、灼く、其の、譽は、掲し、旗の、靡よりも、高く、彌遠に、守惠み、幸給へと、恐み、恐みも、白す。祝詞作
文自在

(六) 道路開通式祝詞

新撰祝詞集

此は從來峻嶒なりし街道を開作して、其の開通式を舉ぐるに際し、遠く山川原野を通過して、里人工夫等の碎身紛骨せる勞苦空しからず、漸く、竣成したる長程の、壞崩、陷損すべき災害なく、悠久に、垣々たる如砥の良道たらむ事を、冀ふ祝詞なり、讀者宜しく此の意を

水莖の是の岡邊を嚴の岩境と祓清めて五百枝の榊樹生し嚴の神籬と齋定めて招奉り令坐奉る掛卷も長き大地主神植山姫神久那戸神八衢彦神八衢姫神亦此新墾沿道の里々に鎮り産す産土大神の大前に職姓名恐み恐みも白さく高天原に神留座す皇親神魯岐神魯美の命以て此漂へる國を終理固成と詔基知給ひし萬々爾々二柱御祖大御神等百萬千萬の物を産成給ひて漸々に中今の御世と成し給ひしは甚も尊き恩頼にぞ在ける故八巷と巷は在れど何國郡村何街道より何國郡村に往復ふ經路は最險岨しくして荒びに荒び廢れに廢れて遠の山の峽は年積る木葉に埋れ近の谷川岸は世を経る雨に崩損ひ水は道に溢れ橋は朽落て誰しの人も繕ふ事無く直す事無ければ何時しか往復ふ旅人も漸々に跡絶て僅に木樵る山人草苴る里人等が己が自じ行き通ふ乃美にて最も便利悪かりしを阿な樂き哉阿な嬉き哉明けく治まれる大御代の習と交通の不便ぬは其土地の發展に關係ふ事と成にたれば何國何郡の人々等益荒雄の利心起して何々加々傳々此山道を墾き造ら

ばやと議に議り定めに定めて逆ふ者は和し宥め否ふる者は論し治めて違ふ者無く拒む者無く公の許を請て土木技師某をして事取計らはしむ可く定め成りぬ故茲を以て雲を凌ぐ真木の太木も根己自に己自取り若生し木生ふる千引の巖を切碎き轉し避て窪める處は石以て積み低き所は埴以て埋め疊なはる青垣山の峯と云峯は衣々伊々夜々と土堀均し青淵深き谷川の川毎には高橋打渡して何々道と名に負せつ阿波禮此頃迄蜘蛛の園かきし於騰呂の中も今は廣き大道と成て唯に便り宜きのみならず人の車も馬の車も鳴神の登々抒々呂々に引並續けて往還人も日に添ひ月に増て古に比類無き御代の表を心も廣く若草の新大道に踏見る事と成にたるは甚も有難く辱き御代の御惠は更なり皆皇神等の深き厚き神慮になも有ける故年中に月を撰び月の中に日を撰び日の中に時を撰びて今日の生日の足日の朝日の豊榮登に禮代の幣帛捧げ奉りて祈禱奉らくは玉鉢の道の邊の里々は往還ふ旅人と共に彌繼々に榮え行きて豊けき國の基を發かしめ給ひ今も將來も作開し此道の無破事く掛渡せる橋の無損く築上し堤の緩み切下し坂路の崩

れ引通たる原野の道の窪み雨風の障も不令有して世に幸を成む事は此道の幅の自廣も廣く長く悠く有經む事は此道の行手の自長も長く缺る事無く絶る事無く天下の公民等が百千の業に西に走り東に驅る巨許の勞を助け給ひ萬の利を得しめ給ひ若し狂しき物の荒び疎び來むには此處より勿來と守り坐て道行人の禍神に相交こる事無く相口會ふ事無く夜の守日の守に味道の佳道と榮行べく廣き厚き大御惠を蒙らしめ給ひ高き御稜威を仰がしめ給へと恐み恐みも稱言竟奉らくと白す。

(七) 架橋神祭祝詞

新撰祝詞集

此は世に架橋を新設して其の渡橋式を擧ぐるに當り該橋の堅牢にして永久に朽る事なく總ての渡行者に過失の無らむ事を冀願する祭なり讀者は此の意を以て參照すべし。

此處を齋場と卜定めて真榊樹生し小竹指添注連繩引互して伊豆の神籬仕奉りて招奉り令生奉る掛巻も畏き産土大神及添て齋奉る水波能賣神久々能智神道能長

智波神の大前に職姓名畏み畏みも白左久是の何橋はもよ去し何年の頃に架設て有しが年末彌久在經し任々打渡し厚き橋板も年經る雨に朽突建し太き橋柱も今は嵐の風に片向く許りに成て往還の人も荷運ぶ馬も危き迄に損はえるを此度里内の諸人等又は何見畏み議定めて公の許を請けて新に可快橋をなも架け渡すと大神等に祈禱乍木工某に負せて前の年何月の始に事起して今年何月の末に作り竟しめき故如此喪無く事無く速く成竟つるは皇神等の大御惠に依て社と嬉み辱み今日を吉日の吉辰と撰び定めて禮代の幣帛と種々の物のを供へ奉りて稱言竟奉らくと白す。

辭別て白さく何里なる何翁は今年何歳に近き高き齡を重ねて其子も孫も彌榮えに榮え座して幸草の三の夫婦の打揃ひて有れば此を現世の長人此里の遠人と人々推し貴み此翁夫婦をして橋の渡り初仕へ奉らしむる狀を平けく安けく聞召して此橋の堅らに縮らに岩轉ばす洪水にも流るゝ事無く立木折る暴風にも落る事無く旅人の往還も安く惱む事無く荷運ぶ牛馬も恙無く朝夕通ふ里人等往さも來

九八
さも過津事無く、落る事無く、安く渡らひ須々久々に通らしめ給へと、畏み畏みも白す。

(八) 新地開墾工事始祝詞 祭文私編

此は世人が開墾を計畫し其の國利民福を廣からしむる業なれば諸神の加護に依りて成功を全うし以て善美なる効果と土地の繁榮とを冀ふ祭なり、其の意に依りて記述すべし。

此の齋場に招奉り令座奉る、掛卷も畏き、大地主大神、宇夫須那大神の大前に恐み恐みも白さく、今度某が眞木柱太く雄々しき敏心に思起して、顯しき青人草の食ひて活くべき物作らむと、去頃より何の某い親友等談合て、其爲行む手立を謀り、五百人千人を催立て、大御代の爲國の爲に、大御國の爲官の許を請得て、是の地名の草の根木の根取除け、堅石持去り、高きを平げ低きを埋め、畔築き溝掘り、樋渡し、大歳御年の皇神等の依給はむ、大御恵の隨に、手脈に水沫搔垂向股に泥搔寄せて種々の物取作らむと、今日の生日の足日に事始爲むと、此人不住ぬ荒野を開き、依高ては陸田に造

り、就低ては水田と成し、幾萬代の田畑を拓て無限き國の利益を興し、狭國をして彌令廣る、古の國作の業を、今現に勤む事を、皇神の御心に嘉と所看し、輔給て、厚き深き恩頼を幸坐と御祭仕奉り、大御酒、大御食、海川山野の種々の物を置足はして、進り、宇豆の玉串を持、擧げ、伊波比拜奉らくを相、宇豆那比給ひて、喪無く事無く、乞願奉る心足ひに、事麗しく作、竟へしめ給へと、畏み畏みも白す。

(九) 鐵道敷設起工祭祝詞 同上

此は鐵道を新設して國利民福の便益を計らむとその工事を起すに際し、赫たる神護を蒙ぎて成功を期すると共に、落成を告げ開通式を擧ぐる際更に行便出撥の利福を祝祭し、山峽路間の墜道鐵橋迄も線路安全にして、將來の隆盛ならむ事を冀ふなり、讀者は其意を以て參着すべし。

此の齋場に忌竹刺立、伊都の注連繩、曳延、神籬樹て招奉り、令座奉り齋奉る、掛卷くも畏き、八衢比古大神、八衢比賣大神、埴安比賣大神、金山比古大神、金山比賣大神、迦具土大神、及此里より里名の里に至る處々を領坐す、宇夫須那大神等の大前に、齋主某恐

一〇〇
み恐みも白さく萬の物事の月に日に開行く天皇の大御世に便宜き事の佐波なる
か中の便宜き事と鐵道敷き車走らせ人をも物をも積み成して百里千里も時の間
に往來するは一人二人の小利のみに有らず即大御國の公益にし有れば伊加傳
此業興さざらめやと某等奥津藻の最も深く思起して諸人を説誘ひ力戮せ官の御
許を請得て今日を生日の足日と擇定て事始爲してむと御祭仕奉りて宇豆の大御
酒大御食に海川山野の種々の味物をら取添へて今日の御饗と進り入紐の同心に
宇豆の太玉串捧持ち由麻波利清麻波利齋拜み仕奉らくを相宇豆那比給ひ奉る幣
帛を安幣の足幣と平けく安けく聞食て夜の守日の守に守幸給ひ異しく怪しき禍
事無く諸人が勤勞く心足ひに疾く速けく功畢しめ大き績を建てしめ給へと恐み
恐みも白す。

(一一〇) 鐵道開通式祭祝詞

祝詞作文自在

此鐵道の事を守給ふ神の御前に白さく年久に待詫て有し鐵敷く長路の車自此里

何處及の往來開通て山を越河を渡し困難も不見に遠里にも東の間に至れるは越
無き恵なる耳に非ず處々に生出る物作出す種々の品を積み出し送も來て萬物の
扱ひ思儘なれば世に其の幸福を得る事多大なるを以て大御代の榮を計り人草の
上をも令足むと事取れる人々諸心を碎き思を焦して勵み勤みし成績に依て今日
其の開通の式を擧を以て此の山を鑿てる鑿道の崩る時無く谿に渡せる掛橋も朽
る事無く夜晝と不言往交車は安く平けく其の年々に榮行む事は焚上る車の自煙
も繁く其の業の限無む事は築立し長道の彌遠に遠く悠々令立榮給と恐み恐みも
白す。

(一一一) 教會所新設祭祝詞

山内祀夫

此は教會所の殿舎新設に際し此所に參集せる信徒一般の能く教則を遵奉し神道を尊
信して皇國の精神を養ひ奇功を表して國家の隆昌に資すべく祈願する祭詞なり讀者
其の意して見るべし。

是何の處を可快眞保呂と底津岩根に眞木柱太敷立て彌廣き瑞の御在處を何々教

會所と造り設けて、眞棟建て生し、忌竹指添へ、忌繩引互して、嚴の神籬と仕へ奉る。此の
 小床に招奉り令坐奉る。掛卷も畏き、何々大神等の御前に、職姓名慎み敬ひ、畏み畏
 みも白さく明けく治れる大御世の、何年何月何日の朝日の豊榮登を、吉月の良日の
 良辰と選び定めて、此の御殿作功竟御教の會ひ始むると爲て、此の御殿に恪しき人
 々等、此會ひに信しき諸人等、群鳥の伊群れ集ひて、天津菅曾の清々しく神事仕へ奉
 らむと、清き赤き眞心以て由知伊豆知持捧げ、供へ奉れる御饌御酒種々の物を、安幣
 帛の足幣帛と平けく安けく聞し食て、大御教則の神言を誤る事無く違ふる事無く、
 能く慎ましめ給ひ、天皇が御門ゆ布し給へる時々の御制も畏き神の御制と、常も常
 も頂に戴き持て、異しき他の國々の多布禮言に相口會迷ふ事無く、相交こり穢る、
 事無く清々敷神隨の大道に入立しめ給ひて、美はしき皇國の日本魂を、綿らに堅ら
 に立て定め、奇き光りを表さしめ給ひ、現世も幽世も今も、徃先も喪無く、事無く、夜守
 晝守に恵み給ひ、憐み給ひ、撫給ひ補ひ給へど、畏み畏みも白す。

(一一一) 議會開始式祝詞

祭文私稿

此は我國の國會を始め縣郡村其の他諸種の會議を開きて事件を決する際天地の神靈
 を仰ぎて公道正理を保ち諸事の神聖を遂げて國利民福の増進を冀ふ祭なり、讀者此の
 意を以て見るべし。

此の齋場に比毛呂伎立て、招奉り令座奉る。掛卷も畏き、八意思兼大神、一事主大神、及
 天津神國津神八百萬の大神等の大前に、齋主姓名恐み恐みも白さく、上津代に天照
 皇大御神の天石戸を閉て、刺許母理坐して、高天原も葦原中國も、常夜往く皆聞く、萬
 の妖悉に發りし時に、高皇產靈大神の大神命以て、八百萬の神等を神集々へて、禰白
 し招奉らむ狀を、神議議らしめ給ひし大御故實と、晝は五月蠅成す水沸き、夜は火瓮
 成す光く神在り、石根木立青水沫も事問ひて、豊葦原の瑞穂國の荒びに荒びて有り
 し時、天照大御神、高木大神の大神命以て、八百萬の神等を神集々へて、御言向の神を神
 撰に撰ばしめ給ひし、大御故實とに倣ひ奉りて、(村に郡に縣に國に悉く此會を設け)
 種々の事の善惡をら議り論はむ御掟の隨に、今日より議會開始めてむと、今日の生

日の足日に此の何々の會を開と爲て議長を始め諸の議員及事執人等、大前に參集ひて、種々の幣帛捧奉り、宇氣比拜み祈願奉り仕奉らくを、相宇豆那比給ひ公、私、怒以て恨憤り嘗る事無く、清き明き直き正しき誠の心に違ふ事無く、惡事も一言に、善事も一言に云放ちて、何恰に委曲に事議らしめ給ひ、皇大御國の御爲に、玉垣の内、外の政策終成へ、大い功績を建てしめ給へと、鹿兒自物膝折伏せ、鶴自物頸根突貫て、恐み恐みも祈願奉らくと白す。

(一二) 神職講習會開始式祝詞

久保嘉郎

此は神社に奉仕すべき神職一般の學術講習會を開始するに際し、諸神の冥護に依りて、新道の滋奥を研修せしめ、隨神の國風を宇内に宣揚せしめらるべく、祈念する祭なり、次の祭式講習修了の詞は、學徒の無事に祭式を學修せしを感謝すると共に、日常の行事作法を誤る事なく、恭敬慎重以て各自の勤務に任むべく、冀ふものなり、讀者此の意を以て、反覆參照すべし。

此の神籬に招き齋ひ坐せ奉る、掛卷も畏き、天神地祇等の大前に、皇典講究所副總裁、

位勳爵氏名畏み畏みも白さく、皇大御國は、神の御國と遠皇呂岐の大御世より、神等を齋ひ奉る禮式を、食國の常の典と定め給ひ、掟て給へる隨に、神隨嚴しく正しく傳へ來にしを、移ひ行く世の慣と、中つ世より漸々に衰へ廢れしかば、專其の職に仕奉る神職等、だに己が乖々亂れ果て、古の正しき御式は、知る人稀に成りぬるこそ、甚飽かず口惜き極なり、けれ今し新世の嚴し大御世と成りては、千萬の事も物も彌進みに進み、彌整ほりに整ほり行くを、此の式のみ如何でかは、如此ながら得有るべき、故此の皇典講究所は、此處をしも深く思ひ遠く慮りて、公にも請ひ申し、御許を得つれば、此回神職講習會を設け開きて、月は五月日は、百餘五十日の程、國々所々の志厚き人等を選び集へて、斯の道の滋奥を研き究め習ひ修めしめむと、今日の生日の足日に、其の會を始め、議式執行ふ事の狀を、平けく安けく聞食して、此の會の立榮えむ事は、白すも更なり、教ふる人も習ふ人も、祭の式過つ事無く、學の術違ふ事無く、疑しきは、明に思ひ得しめ、覺り難きは、速に考へ知らしめ給ひて、惟神なる正しく嚴しき皇大御國の國風を、彌高に彌弘に張り弘め興さしめ給へと、畏み畏みも白す。

(一四) 祭式講習會修了學神祭祝詞

新撰祝詞集

此の處を嚴の磐境と祓清め、神籬樹て、招奉り令坐奉る、懸經くも畏き皇祖天神八意思兼神、及是の里を宇志波岐坐す産土神等の御前に、齋主職姓名、嚴矛の中取持ちて畏み畏みも白さく、現身の世の中に、人皆の成す業は夏草の最も繁く多にし有れど、玉幸ふ神祭の禮式はしも、君に事へ親に仕ふる道の大元にして、即て家を齋へ國を治むべき、惟神なる最も貴き法則になも有りける、故後宇多天皇は天津神國津社を齋ひてぞ、我葦原の國は治まると詠み出で給ひ、明治天皇は、我國は神の裔なり神祭る昔の手風忘るなよゆめと詠み出で給ひけるは、恐れれど實に然る事にて、我が大御國の世の中に二無く貴き寶祚の天壤と共に窮り無き國體は、斯在る神代ながらなる深き遠き法則に縁る事にこそ有りけれ、茲を以ちて、是の何々會はしも、此の禮式を彌習に習ひ、彌究に究めむと、志有る人等を彌勸に勸め、彌集に集へて、去し幾日と云ふ日より事始めて、今日の生日の足日に其の業成し、竟へぬるに依りて、今し

謹み敬ひ禮代の幣帛と、御饌御酒種々の物を捧げ奉りて、稱言竟奉らくを平けく安けく聞食して、各も各も學び得たる禮式を、彌々益々研きに研ぎ、究めに究めて、過つ事無く違ふ事無く、清き赤き直き誠の心を以ちて、遠く長く怠る事無く、弛む事無く、神事美しく仕奉らしめ給へと、畏み畏みも白す。

(一五) 郵便電信局開業式祝詞

祭文私稿

此は新に郵便電信局を開設して其の始業を擧ぐるに當り、該地方の便益大なるを祝ふと共に實に新聞紙を發行して時々起れる報導の敏速確實ならむ事を冀ふは勿論將來益々諸業の發達して隆盛を極めむ事を祈る儀式なり、讀者は此の意を以て前後の祭詞を反覆すべし。

此の神床を伊都の御阿良加と、由麻波利て、招奉り令座奉る掛卷も畏き、産土大神の大前及天御柱大神、國御柱大神、天鳥船大神の大前に、齋主姓名恐み恐みも白さく、現身の人の智の彌進に進行く隨に、種々の物事開行きて、夏野往く道の松蔭依りて宜しき事共の多なる中に、郵便はしも使遣さで、小鹿の角の束の間に、玉章の書通し、電

信はしも、電氣の力以て、針金の絲の至らむ極彼方より此方に傳へ、此方より彼方に傳へ、百里千里の遠方人と座ながらに言語らはえぬ、此二業は最も貴く最も重き事に有れば、今度此處に如此麗しく家築建て、今日を生日の足日と撰定て、二業の事始爲してむと、官々の人等及預れる諸人等、大前に參來集ひて、持齋回り持清回り、宇豆の大御酒大御食に、海川山野の種々の物を取添へて、禮代の幣帛と捧奉り、手拍ち拜申奉らくを相宇豆那比聞食て、今より後は彌遠に彌長に不意發らむ諸の禍事有らしめ給はず、夜の守日の守幸給へと、恐み恐みも白す。

(一六) 新聞發行祝祭祝詞 同上

此の奥床を假の眞屋と、由麻波利清麻波利招奉り令坐奉る掛卷くも畏き、宇夫須那大神、天津神國津神、八百萬の大神等、國々處々に鎮座す諸の大神等、及久延畏古命の御前に、齋主姓名畏み畏みも白さく、八十日は有れども、今日を生日の足日と議定て、何々新聞と名附くる書の初號を發行はむと、御祭仕奉りて、大御酒大御食、海川山

野の種々の物を置足はして奉り、社長姓名を始て、諸の記者事執人、手人等、皆大前に參侍り、宇豆の玉串を捧持ち、朝成す伊波比毛止保利拜仕奉らくを、相宇豆那比給ひ、進る幣帛を、安幣の足幣と、平けく安らけく聞食て、四方八方より告來む人の書誤る事無く、賣販かむ紙數の年月毎に彌増に増行きて、絶る事無く、減る事無く、彌榮に榮えしめ給ひ、夜の守日の守に守幸給へと、畏み畏みも白す。

(一七) 物品陳列所開始式祝詞 祝詞作文自在

此の祝詞は世に物品の陳列所を設置して其の開始式を擧ぐるに際し、配置整然として日夜觀者の群集し縦覽購求に便益多きと共に會所の益々隆盛ならむ事を祈請する式なり、讀者は此意を以て見るべし。

此所に開なす事業を守給ふ神の御前に白さく、製出す品も人不知ば不求、欲者も不見物には心不動、此故に廣く人に示し、普く欲者に商む事を思ひ、此度有志者胥謀て新に此館を築き、織物染物身の飾り、漆器陶器弄物を始、其禮事に關れる重き品より、常用る桶盟の末に至まで、上に下に、右に左に、類に依て區劃を定め、比きに就て間を

分ち高く掲げ廣く列ね日に異に世人の來て心の儘に可樂觀取設て今日の生日の足日に茲に始式を舉と爲て捧物奠て奉言祝る狀を平けく安けく開食て自今此館の賑ひ著く遂日て榮行む事は展列たる綾織の自映も灼く年々の利益の多らむ事は取並し品物の自數も多く彌遠に彌廣に茂し如八桑枝く可立榮守恵み幸給と恐み恐みも白す。

(一八) 博覽會開始式祝詞

青木陳實

此は博覽會の開始式を行ふに當り、其の所の神社に此の趣を報告する際、該會をして國家の進運を促し社會の開明に資せしむべく多大なる隆盛を冀ふ所以なり、讀者其の意して見るべし。

何々神社の御前に白さく、其事柄を百度聞よりも、一度此を見の優には及すと、唐國人も言傳し如く、世に無限有る物事を悉聞て知得むは難業なれば、集て此を令知を善とし、諸共に境を不越して、他處の物を見、每人に海を不渡して、外國の物を知人の誘智ひ國の開るを助、又其物を出さむ人に在ては、互に其技の秀む事を勉、相共に競

ひ颯て自然物の進を見るを以て、外國にては必此を催し、大に世の爲に謀るが故に、我國に在ても此事を企今年第何回何々會を大神の鎮坐す此市内に開き、茲に事始式を舉と爲て、禮代の物奠て、其由を令奏給事を平けく安けく開食て、自今始めて開行ふ限の内は、日に異に茂榮に榮行て、其聞えの高らむ事は棟高く掲し、旗の彌高に列し品の賣れ行む事は、來觀る人數の彌多に異事無く、忌敷事無く、安く平に令事竟給と恐み恐みも白す。

(一九) 株式會社結成式祝詞

祝詞作文便覽

此は株式會社の新組成に際し、貴き神護に依りて永遠に結社の健固と社員の一致と公益の進展を冀ふ祝詞なり、讀者は須らく此の意に基きて記誦すべし。

是の小床を假の眞屋と、由麻波利清麻波利神籬立て招奉り令座奉る、掛卷も畏き、宇夫須奈大神の大前、及天津神國津神、八百萬の大神等の大前に、恐み恐みも白さく、今度某等思起して公益を計り、其業を押張り押廣めむと、諸人を説獎めて、何の株式會

社と云ふ牟禮を組成し、入紐の同心の人々已が家の應分に財を持來集ひて、今日より始て事執始めむと、大神等に禱白して御祭仕奉り、宇豆の御酒御食、海川山野の種々の味物をら、禮代の幣帛と獻置て、已が自志玉串捧持ち、由志利伊都志利齋拜奉らるるを、相宇豆那比給ひて、安幣の足幣と、平けく安らけく聞食て、此牟禮の絶る事無く退く事無く、彌進に進み彌締に締りて、遠きと近きとの隔絶無く、貴きと賤きとの差別無く、月々に公益の効の表行かむ麻邇麻邇多くの利を護しめ給ひ、富榮えしめ給へと、恐み恐みも白す。

(一一〇) 慈善會開會式祝詞

神道本局祝詞集

此は深慈至愛なる神慮に基き新に慈善會を設くる際酒饌を饗して神祭を督み將來に於ける斯會の進展と國民感化の普からむ事を祈請するものなり、此の趣旨に依りて記述すべし。

此の齋庭を嚴の磐境と神籬建て、招奉り坐せ奉る掛卷も畏き造化三柱大神天照大御神、豐受姫大神、大己貴、少彥名大神、直日大神等の宇豆の大前に、頸根突抜き拜みて

白さく、此の慈善會はしも、去し年何誰が燒鎌の敏心起して、數多の忠實人を誘導き語勸めて、此の東京なる某區某町に取設けしを、始として其執行ふ事業はも、大神等の天下の青人草を、大御寶と愛で給ひ、恵み給ひ、憫み給ひ、救ひ給ふ、其大御心を趣旨と爲て、寄邊なく憂瀨に沈み迷ふ貧しき人、或は足乳根の親に別れて孤兒等を養ひつゝ、在ける程に、漸々に世の心有る人の助を得て、其事業も日に異に進榮えて、此の何郡何町には、何々園と云をさへ設け、感化院、施療院をも次々に設備へて、貧しく苦める人等の疾病を療治し、又は八十禍日に相交り、不良の行有りて、哀れ監獄に繋れし少年の塵居曇れる心をも、神直日大直日の神の御靈賜りて、眞澄鏡眞佐夜夜に立ち返りぬべく、説き感化して、或は手末の事、或は物作る業をも、教導きて、世の爲に善き事をも勤め行ひ、途には玉幸ふ神と君との、深き大御恵にも報奉るべく、成なむ事をしも、彌進めに進め、彌廣めに廣めむ物と、勤勞さける故、今年も年毎の例の隨、此の十一月何日を、生日の足日と齋定めて、御祭仕奉り、又貧しき人には、物施し賑さむと、大御前に百取の机代の物を、置高成て、捧奉らくを、哀と思し坐して、某が如此思起し、勞

勤むる隨に、築立る心の柱を、太く堅く築固めしめ、彌益々に嚴の雄心振り起し、勤緝りて怠る事なく、漫む事なく、令在給ひ、又此事業を相助け、相穴なふ人等は、八十綱打掛て引寄する事の如く、日に月に此所に來入集ひて、彌廣に彌遠に、普からしめ給へと、今日の御祭の事仕奉らくと、謹み敬ひ畏み畏みも白す。

(一一一) 實業開始式祝詞

祭文私稿

此は實業を發起し其の開始式を擧ぐるに當り、大に國力を富し國民を利する計畫なるを陳べ、益々事業の隆榮を極めむ事を冀ふなり、此の意を見て各自の祝詞を記述すべし。宇夫須那大神と以齋ぐ、掛巻くも恐き某大神と御名は申して、是の神床の伊都の眞屋に、招奉り令坐奉り、又天津神國津神八百萬の大神等、國々處々に鎮座す諸の大神等をも、同御床に齋奉り仕奉りて、恐み恐みも祈願白さく、今度某が思成して、事始めむと企起せる何々の業はしも、與津藻の毛止も難かる業に有れど、一人二人の家門興さむ私の爲には有らで、大御國の利潤と爲るべき公の事にし在れば、今日を生日

の足日と撰定て、如此嚴重に御祭仕奉り祈願奉らむと、宇豆の大御酒大御食に、海川山野種々の味物を取添へ、禮代の幣帛と捧奉り、由志利伊豆志利奉れる太玉串を捧持ち、志自萬比波良婆比拜み奉らくを、相宇豆那比給ひて、此業に預れる諸人は、狂津日の云はむ惡事に、相牽り相口會ふ事無く、彌進に進み彌緝に緝り、緩ふ事無く怠る事無く、彌遠に彌廣に、家も名も聞え渡り榮え行くべく、守幸給ひて、打見る島の崎々、搔見る磯の崎落ちず、此業の續の効を護しめ給へと、恐み恐みも白す。

(一一二) 商家開店祝詞

青木陳實

此は商業を開始し又は變更擴張して其の開店式を擧ぐるに當り、社會公私に多大の便益を與ふる事なる奉告し神護に依りて前途家運の發展と事業の繁盛を冀ふべきなり。商法の事に幸給ふ掛巻も畏き、大名牟遲大神少名毘古那大神、事代主大神、宇夫須奈大神、又天津國津神八百萬の大神、皇神等の御前に、恐み恐みも白さく、此度何の某い先祖より營み來し其の手振を更に擴張り、魂合る同志協議て、此の商の館を建、今

日の生日の足日に開店の式を舉と爲て種々の物奠て奉言祝る状を平けく安けく聞食て世人の爲生業の爲と良品を撰び價を低し町内村里の隔無く來求る華客の限不侮不欺直く正誠を盡て實直に商ふ状を嘉み悦び坐て夜晝と不言來購人は置列たる品の自數も多に日に異に榮行む事は軒に掲し自廣告も高く經時積年隨に其聞えも遠く廣く其店の榮昌も例無く彌榮に榮行可く守惠み幸給と恐み恐みも白す。

(二二二) 圖書館開始式祝詞 同上

此は世人の圖書館を建設し天下古今内外の圖書を集藏して社會の公益を計るか故に、その開始に際して益々事業の隆盛と永久に立榮えむ事を冀ふ所以なり、讀者は此意を以て見るべし。

此館の事を守給ふ皇神の御前に白さく事は書て傳る許尊は無く人は今其の書に依て神の教聖人の道佛の説秀たる帝王等の事跡優たる臣等の功又其の國々に傳る國史御宇經國る政事法令賢人の論ひ物知れる者の考へ或は其形を圖引或は其

状を繪畫し物より大小學校に用る教科書毎日に刷出る雜の刷物に至まで皆世人の見て識を廣め身才を研く不本るは無も内外の國の書卷の數は幾千萬と數知ぬ事なれば此を每人に購得て見は手安らぬ爲事が上に古にし物は失もし缺も行て今は全く亡果しも不少ぬを廣集め普求て萬代に保行と共に顯世の人に借もし爲讀もすと此の圖書の館を建築て茲に事始式を舉を以て捧物奠て奉言祝る状を平けく安けく聞食て其榮の繁らむ事は納置書の自數も繁く其聞えの高らむ事は聳立館の自棟も高く遠く悠々令立榮給と恐み恐みも白す。

(二二四) 紀念碑建設祭祝詞 同上

此は家國に功績ありし先人に對し國民子孫の記念碑を建設して其の竣成式を舉ぐるに際し、其の遺烈は永く後世の龜鑑と爲り于歲の下國家を益せん事を祈請する祭なり、讀者此意を以て見るべし。

此造立し碑の前に職姓名恐み恐みも白さく有し昔の功績を偲び後世の龜鑑と爲て其事柄を示者は此を望見る人自然心感て又世に有功者を出す教の本なれば此

度有志者胥議り茲に何々の事を記して其の紀念碑を建しが故に縣郡の司より預て
事執し者或は碑に物せし人の親族家族此里の男女に至まで諸參出來て其式を舉
ると爲て種々の物奠て如此御祭奉仕る状を平けく安けく聞食て自今後は雨降風
吹とも朽事無く傾事無く常磐に堅磐に世に立行て顯世の限り蒼生諸の其跡を慕
ひ習て奇き譽有る者次々に出可く遠く普く護給て其幸の廣らむ事は築たる礎の
彌廣に其惠の高らむ事は建上し碑の彌高に遠く悠く立榮坐と恐み恐みも白す。

(二五) 銅像除幕式祝詞 同上

世々古今を通じて國家に大功ありし人々の銅像を建設し其の除幕式を舉ぐるに當り
其の遺烈は萬世に亘りて社會を感化し大に世人を勵すに至らむ事を冀ふべきなり請
ふ其の意を以て見るべし。

此造立し銅像の前に白さく世に其功を偲び其人の身形を造り著名き公園の中を
撰て此を建は唯に其の功勞に報る耳ならず常に仰觀る人自然其事を奉尊奉慕
て功を立て者績で可出き教の本とも成を以て此度有志者相謀て何某君の爲に以銅

偉なる像を造り今日の生日の足日に覆幕取除の式舉と爲て棒物奠て御祭奉仕る
狀を平けく安けく聞食て自今將來嚴然に此處の空高く晝夜と不言世に立臨て蒼
生諸の開行く世の勢を悟り進行く世に進立可く守り導き幸坐乍世に蒙む御惠は
此の築立し礎の彌廣に公民の奉稱む御功は据奉る身形の彌高に遠く悠く天下を
令榮給て千代萬代に仰かれ居坐と恐み恐みも白す。

第五編 農工商諸業祈願祭祝詞

我が農工商の諸業は國民生活の本源にして其の盛衰豊凶は直に國家の禍福に影響するが故に本編は先づ此等に關する祈願の祭詞を精選して各自の創作に便せしむ、即ち諸業祖神祭を始め五穀、養蠶、製茶、造船、陶磁器、金鑄、釀酒、醫藥等に至る迄常に其の季節を撰びて祖神を敬祭し、其の恩徳を仰ぎて繁榮を祈るべきなり、苟くも斯業を創立して成功を志さむとする者は、貴賤を論ぜず、日夜神明の御稜威を信賴して、必らず其の冥護を仰ぐ事を忘るべからず、讀者宜しく左の數項を参照し、その内容を咀嚼して神意に感應すべき祭詞を述作するに努むべし、尙委くは各項に就きて記す所あらん。

(一) 諸業祖神祭祝詞 二十九題作例

此は各家に於て先づ文武農工商の諸神を祭祀し、其の神護に依りて事業の繁榮と家運の長久、子孫の幸福等を祈願するなり、讀者は此の意を以下内容を参照すべし。

八十日は雖有、今日を生日の足日と齋定て、某が弱肩に太極取掛て、持齋まはり持清まはりつゝも、此の小床を伊豆の眞屋と掃ひ清めて、文武農工商の業の祖神と座

す、某々の大神を招請奉り令坐奉りて、稱辭竟奉くは、神代の昔大神等の某の業を創め給ひ起し賜ひて、天下公民に福へ給へるに因てし、何々の禍を掃ひ、何々の利益を得る事を、意み辱み奉る隨に、今も行先も御恩頼を乞祈奉ると爲て、奉る海川山野の種々の物を、安幣帛の足幣帛と平く安く聞食受給ひて、某等が家にも身にも禍事不令在、日に異に勞き勤る何々の業に、悟深く爲しと爲し計りと計る、物に事に悉く幸あら令め賜へと、鹿自物膝折伏せ、鶴自物頸根突抜て、畏み畏みも白す。

(二) 五穀祭祝詞 新撰祝詞集

此は五穀の成熟を加護し給へる諸神を奉祭して、年穀の豊稔と家業の繁榮を祈願するなり、穀物商店祭の祝詞も亦之に準すべし、讀者は此の意を以て参照する所あれ。

此の小床を祓清めて、招奉り齋奉る、掛巻も畏き、天照大御神、産土大神、又保食大神、大年神、御年神、大地主神、志那津彦神、志那津姬神、水分神、壇安彦神、壇安姬神等の御前に、職姓名恐み恐みも白さく、顯身の人の世に在る物は、夏草の甚繁く、千萬と數へも取

ぬまで品は在れど命繼ぐ食物ばかり必要な物は在らず故此五穀物は靈幸ふ
神代に奇びに妙なる保食大神の身體より成出たる物にして天照大御神天熊大人
を遣し座して献上しめ給ひ是を見そなはし甚く歡座て是は顯見蒼生の食て活
べき物ぞと詔給ひ粟稗麥豆を陸田の種と成し稻を水田の種と爲し天邑君を定給
ひて天狹田長田に植栽しめ給ひ皇美麻命を天下の大王と定給ひて天降し給ふ時
に高天原に所御齋庭の瑞穂を授座て天津日嗣の高御座に大座坐て遠御饌の長御
饌と赤丹の穂に所聞食せと事依し奉給ひ大年神は蝗を拂ふ禁厭の業を教給ひ大
地主神は五百津の神鈕取探らして高田窪田を耕作る業を教給ひ擴め給ひ志那津
彦神志那津姫神は荒き風を防ぎ給ひ水分神は水麻加須る事を宰給ひ埴安彦神埴
安姫神は肥埴を爾夜す術を教給ひき斯く惶き皇神等の專一と御年の事を思し給
ひて力を盡し給へるは只管に青人草を恵み愛み給ふ大御心にも有ける如斯在
廣き厚き御恩顧の露の懸らましかば蒼生は如何で繁殖榮えむ如何で樂しく在經
ましや實に足引の山よりも高く綿津見の海よりも深きは大神等の大恵と尊み忝

なみて限無き眞砂の數の其一つをだに報ひ奉らむと今日の生日の足日に御饌御
酒種々の物を捧げ奉りて稱言竟奉らくを平けく安けく相骨に聞食して各も各も
掌分坐す御功績の隨々に惠給ひ幸給へと畏み畏みも白す。

(三) 除蝗祭祝詞

神職必携

此は田島の産物たる諸の穀菜に對して惡虫害獸等を拂ふ祭なれば讀者は此の意を以
て各神の加護を仰ぎ其等の豐饒を祈願する事を忘るべからず而して次項の祭詞は秋
分に成熟せし初穂を神祇に奉りて報賽の誠を致すものなり併せて以て參照に便せむ。
掛卷も惶き産土大神の御前に乞祈奉る事の由を御年皇神等相共に所聞食せと職
姓名惶み惶みも白さく御氏子諸が恒の産業と田に畑に身も只知らず下立作り朝
には草取拂ひ夕には水引注ぎ菅笠の小笠通して照る眞日に手胫も足も志登杼に
汗搔垂れ奴婆玉の夜目も安くは休まらず物思繼けて有經るを此頃惡虫害獸の多
に生保毘古里て日に異に喰ひ荒すが故に身の及限り心の至る極み千々に萬に防
ぎ禦めむと手術を盡せども人力には至らぬ隈し多ければ其苗葉枯損はえ篠竹如

す凋行なるを憂ひ歎かひ進むも知らに退くも知らに何卒大神等の建き貴き御稜
威を蒙り奉りて此災を拂除かむ物ぞと各々も清き明き誠意を以て祈奉る任に嚴
矛の中執持て聞上げ奉らくを大神等の和魂は御氏子の家をも身をも守幸へ給ひ
荒魂は其惡虫害獸を吹棄る御息の共盡に拂ひ給ひ退け給ひて五日の風十日の雨
時を違へず田に畠に皆悉に頭傾熟らみ御歳豊に得しめ給へと祈の幣帛を捧奉り
一向に願奉る狀を相諾ひ給ひて速く恩願を被らしめ給ひ守幸へ給へと鹿自物
膝折伏、鶴自物頸根突抜て、惶み惶みも白す。

(四) 奉初穗祝詞 祭文私稿

掛卷くも綾に長き、何々大神の大前に、恐み恐みも白さく、大神の氏子等か日に異に
勤しみ勉めて取作れる物の阿之伎風阿良伎水に遭ふ事無くて、如此しも麗しく作
獲つるは母波良大神等の廣き厚き大御米具美にこそ依りけめと、今日なも何々の
初穂と宇豆の大前に捧奉り、高く尊き御恩願を尊み奉り、忝み奉らくを所聞食相宇

豆那比給へと、恐み恐みも白す。

(五) 養蠶神祭祝詞 神職祝詞自在

此は年々各地に於て經營せる養蠶の良好なる結果を見む事を日夜苦心し、貴き神國に
依り飼育者の幸福を蒙らむ事を冀ふ神祭なり、作者宜しく此の意を以て參照すべし。
掛卷も長き、保食大神の大前に、畏み畏みも白さく、靈幸ふ神代に汝大神の奇靈と、妙
なる神徳に依て成出たる蠶はしも、言卷は畏けれど、天照皇大御神の天の香具山に
桑を植て、此を養ふ事を始め給ひ、其繭を口に含て絲を績べき事を教給ひ傳へ給ひ
し隨に、明妙照妙を始め、綾錦をも織成し、老の身にも軽く暖く、又鮮衣にも作りて、神
代より今に至る迄、其恩願を蒙り來つるは、最も尊く辱き極みにも有ける、故何國
何郡何村何誰い、此秋春夏も齋清まはりて、勤み勉め朝には桑葉摘込み夕には蠶坐取
替へ、愛飼ふ蠶はも時候の違無く、霖雨疾風の障無く、桑の進みも安然に休も起も平
然に蕃殖り生育て、白玉如す可美繭を造らしめ給ひ、麗敷絲を獲しめ賜へと、今年の

二二六
養蠶の業を始むと爲て、乞祈奉らくは、八百萬千五百萬の蠶卵の生卵は、善良蠶卵の
榮昌む蠶卵と言祝ぎ稱へて、蠶室には伊豆の生火を所々に差埋み、蠶場には千座の
棚座を八重に結設けて、夜間曉晨時刻しも別す守らひ育す任々に、青木桑青み活動
て、初出桑萌る弱芽の愛らしく發生し毛蠶は、小林桑早くも日立て安けく時を違へ
ず、根太桑夜目を寝て覺て健けく、大伴桑共々に競ひ進て赤枝桑成熟らみ満足らは
しめ、三室桑見の宜くも所得て網衣懸亘し、白玉の御統の眞珠如す繭を、小石丸の固
く美しく造らしめ給ひ、人の利益と白濱の濱の砂如す彌廣に盛港へ國の光と白妙の
雪山如す彌高に積上しめ給へと、禮代の幣帛を捧け持て、恐み恐みも願奉らくと白
す。

(六) 製茶場安全祭祝詞

阿夫利神社祝詞集

此の製茶場を始め製紙、製絲、造船、機業始等の諸祭は何れも其の作業の健全にして生産物の故障なく豊富に精巧に美麗に發達せしめ給はむ事を神祇に祈請するなり、讀者は此意を以て仔細に内容を觀察し各自の作文上に充分の効果を收むべし。

掛卷も文に畏き、阿夫利大神と稱へ奉り來たる大山祇大神、大雷神、高麗神の御前を、持齋波り持清波りて、畏み畏みも白さく、何國何郡何村に、世の宇麻人等が御食の加牟比比考へ議りて、取設け起作れる製茶場は、我が皇國の國産の一にして、國の利益と成るべき茶製る所にし有れば、各も各も殊に志を盡して、朝に夕に其の業、勤勞きつゝ、大神等の御恩頼を常も奉尊りて在りける故に、今般も奇しく靈き大御幸を奉冠らまくと、岩金の峻しき山も峻しとも爲す、岩波の荒き川邊も荒しとも爲で、直渡り直越え來て、大御前に乞祈奉る事の狀を、廣き大御心、厚き大御惠の隨に、所聞食し受け賜ひて、夜に晝に、勉強り勤勞く、製茶る業に、御靈幸へ賜ひて、人多に摘むや、茶の香り久く、色美しく、令製成め賜へと、畏み畏みも白す。

(七) 製絲場安全祭祝詞

同上

青雲の上へ天會々里々々々々々立てる、阿夫利山に鎮座坐す、掛卷も畏き、阿夫利大神の大御前に、某謹み敬ひ畏み々々も白さく、何國何郡何村に、齋柱太く固く、下津岩根に

踏凝し齋はひ建てたる製紙場はも、我が皇大御國の國産の第一とも言ふべくして、世間の利益を計る可美絲製る所にし有れば、各も各も身の分を盡して、其の業勤勞きつ、平素に大神等の大御幸を奉慕り奉辱りて在り經る故に、今般も御恩頼を蒙り奉らまくと、高き山をも踏左久み廣げき川をも打渡り來て、瑞垣近く庭雀蹲踞居て乞祈奉らくを神隨憐しと所思食して過犯す事の將有をば、廣く厚き大御心の隨に見直し聞直し賜ひて朝夕に勉強り勤勞く製絲る業に御靈幸へ給ひて、少女子が引成す絲の長く久く榮ゆる所と令有め給へと、宇自物宇奈根突貫きて、畏み畏みも乞祈奉らくと白す。

(八) 製紙場安全祭祝詞 同上

阿夫利山の山の上に鎮座坐す大山祇大神、雷山の山の上に鎮座坐す大雷神、二重瀧の瀧の上に鎮座坐す高麗神の御前に、齋はり清はりて畏み畏みも白さく、何國何郡何村に土搔平し柱掘居え造設たる製紙場はも、世の爲人の爲に、利益を與へ便利を

増す幸物製る所なれば出入る人々も力を合せ心を盡して勤勉みつ、平常に大神等の御恩頼を奉畏り奉仕りて在經る隨に、今般も大御幸を乞祈奉り辱み奉らむとして、天雲の遠きを厭はず、此の御山に參上り來て、御靈の幸を請願奉る事をし、神隨も所聞食し受け賜ひて、過犯す事の將有をば、廣き厚き大御心に見直し聞直し坐して、清く明き真心以て、朝夕に無怠事く無緩事く、勤勞く製紙の業に、奇靈幸へ賜ひて、天飛ぶや雁の皮なす薄く強く、製令得め成し令得めて、幸有る所、福有る家と、夜の守り日の守りに、守り幸へ給へと祈祝ぎ奉らくと、手拍ち拜みて、畏み畏みも白す。

(九) 造船祈念祭祝詞 祭文私稿

此の齋場に比母呂岐刺立白髮、附由布取垂て、袁岐奉り麻世奉る、掛巻くも綾に畏き、須佐之男大神、及住吉に稱辭、竟奉る三柱大神、此里を領座す、宇夫須那大神の大前に、恐み恐みも白さく、今度何某が思起して、取造らむ大船はしも、彼方此方の人をも物をも積乗せて、打見る島の前々、撞見る磯の前落ちず、真誠志自貫、伊行渡らむ大船に

し有れば大海原を浮濟さむ時は言巻も更なり造と造らむ船工等が過つ事無く怠
る事無く今日より始て奇く異しき大神等の御靈幸給はずば如何かも心足ひに成
得べきと今日の生日の足日の朝日の豊榮登に、事始の御祭仕奉りて種々の幣帛捧
奉り伊波比拜奉らくを相宇豆那比給ひて奉る幣帛を安幣の足幣と平けく安らけ
く聞食て不意兆發らむ異しき怪しき禍事無く緩怠る事無く逝水の最速く造畢へ
しめ給へと恐み恐みも白す。

(一〇) 造船竣工祭祝詞

祝詞作文自在

船の御靈と坐す神の御前に白さく大御代の榮行隨に海路の通も眞盛に往反ふ人
も彌繁く成來るが故に内國外國の無別く物積送り積出す業の烈く此に依て幸福
を得事許多なれば此度何某い志を興し其業を擴張むと何々丸と云ふ大船を造出
し今日の生日の足日に船打清め船下の式奉仕と爲て捧物翼て奉言祝る狀を平け
く安けく聞食て自今後は此船の通路平に港々の泊も安らけく内國を彼方此方爲

は更にも不言八重鹽路を隔し外國を西に東に馳通とも積入し種々物に恙なく乗
たる人々にも障なく暗礁に觸れ風の進に逢ひ誤の火の災ひ進來る船の行合も不
令有、此船に依て蒙らむ幸は其形の總の彌廣に此船に就て收めむ利益は其引組し
網の彌多に無絶事く令有給へと恐み恐みも白す。

(一一) 機業始神祭祝詞

新撰祝詞集

八十日は有れども今日を生日の足日と齋ひ定めて、某が弱肩に太機取掛て、持齋
まはり持清まはり此の小床を嚴の眞屋と掃清めて、機織の業の祖神と坐す、掛巻も
畏き天照皇大御神長白羽神天羽槌雄神天棚機姫神等を招奉り令座奉りて、畏み畏
みも白さく顯身の世の中に食物住所に次ぎて最も要なるは衣服物にして、一日一
夜も無くては得在らぬなりけり故遠き神代に、天照大御神の養蠶の業を始め給ひ、
其繭を口に含みて絲に績む事を教へ給ひ、天棚機姫神をして神衣を織らしめ給ひ、
及長白羽神は麻を績む事を創め給ひ、天羽槌雄神は文布を織り始め給ひけり、故公

民等其業を受續來て、永久に恩頼を蒙り奉る事を貴み忝みて、今日の生日の足日に機業の事始めむとして、禮代の幣帛捧げ奉りて稱言竟奉らくを、平けく安けく聞食て、織女等が手玉も由らに織機の千筋の絲の亂る事無く、經絲の正く、緯絲の竝善く、通はす梭の障る事無く、箴の響の彌高に立榮えしめ給へと、職姓名嚴矛の中取持て、畏み畏みも白す。

(一一二) 陶器製造開業祭祝詞 山内肥夫

此の處を祭の場と祓清め注連引互し眞神樹生して招奉り齋奉る掛巻も畏き土神埴山姫神火神火武須毘神水神水波能賣神添て齋ひ奉る大陶祇神椎根津彦命弟猪命及(何々)燒の祖と座す某の神靈等の大前に、畏み畏みも白さく、皇大御國は神の御國にして、人草は皆神の御裔成す業は總て神の始め給ひ傳へ給ひし事になむ有りける、故陶物造る業はしも、玉幸ふ神代に大陶祇と御名に負座せる神有れば、必此大神や此業を始め座けむ及人の代と成て書に見えたるは、神倭磐余彦命の東の虜を

平け給ふに當りて天神の御訓に依りて推根津彦命弟猪命に仰せて天香具山の巖の土を採りて八十瓮嚴瓮を作らしめて、丹生の川上に天神地祇を祀り給ひしぞ始めなりける、茲に百姓等其業を受續來て、新玉の年經る隨に彌進みに進み殊に長谷朝倉宮に御宇天皇此業を勸め給ふによりて、彌々盛に成て、其道に委しき人さへ次々に出來て、或は瀬戸燒或は唐津燒或は九谷燒有田燒常滑燒美濃燒薩摩燒其他何々燒と云ひて此處彼所の處々より製造り出せる事なも成りて、今し外國々へ鬻ぎて許々太の利益を得つるは、専ら大神等の恩頼に依る事に社と貴み忝なみ今日の吉日に其業始むると爲て、禮代の幣帛捧げ奉りて稱言竟奉らくを、平に安に聞召して、其素と成る可き土の盡る事無く、堅らに廣らに絶ゆる事無く、厚らに縮らに守給ひ幸給ひ、燒き凝らす寇の烟彌高に榮えしめ給へと、職姓名嚴矛の中取持て、畏み畏みも白す。

(一一三) 鑄物師神祭祝詞 同上

此の鑄物師以下諸種の祝詞は古來新業を營める者の其の開居又は創立に際して神護
を仰ぎ家業の繁榮と其の發達に應じて多大なる利益と幸福とを祈請する祭に用ふる
なり讀者は此意を以て見よ。

此の小床を祓清め眞榊樹生し嚴の御室と齋定めて招奉り令坐奉る掛卷も恐き火
之炫毘古神及鑄物師の祖神石凝戸邊神鍛冶の祖神天目一神の御前に職姓名恐み
恐みも白さく言卷も畏けれど遠き神代に大神等の此業を始め給ひ傳へ給へるを
樛木の次々に戴き持て火之炫毘古神の奇き御徳を蒙り乍武士の佩や劔を鍛ひ婉
女が採るや鏡を鑄成し或は大砲小銃に打放つ彈丸を造り或は一早く汽車走らす
る鐵の道を布き或は國の鎮めと海原馳する甲鐵ふ軍艦を造り國の榮と鐵銀金を
始め種々の金を煉り鍛ひ燒凝らし鑄成鑄足し種々の物を造りて萬飽ぬ事無きは
專大神等の御恩頼に依る事に社と尊み嬉み忝なみ喜び奉りて今日の生日の足日
に御饌御酒種々の物を捧げ奉りて稱言竟奉らくを平けく安けく聞食て今ゆ往前
子孫の續々彌遠に彌長に此業を勵みに勵み勤めに勤めしめ給ひ八十禍津日の狂
事有らせず日に異に打や鐵の槌の音高く鑄成す竈の烟豊けく立榮えしめ給へと

恐み恐みも白す。

(一四) 金物商店神祭祝詞 同上

掛卷も恐き金山彦大神金山姫大神及商の業を幸ひ給ふ輕子神の大前に恐み恐み
も白さく眞鐵の奇く妙なる功績は云ふも更なり黄金白金萬の金に至る迄一日も
無くて得在らめや千劔振神代に天香具山の鐵を採りて日の象の鏡を造り給ひ種
々の斧鐸を作り給ひしより其業を受續來て萬の物を造る事とは成にけり抑々皇
國にて金を掘り採る事は神代より受傳たる業には有れど古き書に見えたるは天
平勝寶元年陸奥國より黄金を奉り及白鳳三年對島國より白銀を奉り和銅元年
武藏國より銅と献りたるぞ始めなりける故新玉の年々に其業の進みに進みて中
今の大御代と成りては鐵の道を布き針金を以て蛛蜘蛛如す糸引延へ或は鐵甲ふ軍
の艦さへ造る事と成りて最も大自き功を成すべき要なる物となも成りにたるは
單に大神等の恩頼に依る事とこそと尊み嬉み忝なみて今日の生日の足日の朝日

の豊祭登に、禮代の幣帛捧げ奉りて、稱言竟奉らくを、平けく安けく聞し召して、目輝く黄金の瑠璃の靈き光りに、敵仇共の習伏し如く、大君の大稜威を普く四方に輝かさしめ給ひ、日に異に勤しむ吾家の業は、鐵の堅く白銀の最も清らに、銅の赤き心を以て、各々持分け勉め勵ましめ給ひ、家をも身をも守り給ひ幸ひ給ひて、黄金の花の咲き匂ふが如く立祭しめ給へと、畏み畏みも白す。

(一五) 鑄造平安祭祝詞 祝詞作文便覽

掛卷も長き、鍛冶鑄工の祖神と坐す天之目一箇神、石凝度賣神金の祖神と坐す金山彦神、火の祖神と坐す火産靈神、水の祖神と坐す水波能賣神土の祖神と坐す埴山姫神、言別けては阿夫利大神及此の里の産大神の御前に遙に御酒御饌を始めとして、山野の物海川の物に至るまでに備奉り置きて、畏み畏みも白さく、某は遠祖の代よりなも鐵銅を鑄て食物を煮炊ぐ器物を始め種々の物を造りて、利潤を得るを家業とはしにける、此所に其の業の始を思へば、千早振神代の昔高天原に大神等の事始

め賜ひしなりけり、如此て今も某が男道無かりつゝも、尙其の御業仕奉るは、全く大神等の恩頼にし有ければ、齋麻波り清麻波り赤星の曉方より夕星の夕に至る迄勤め志麻里て、勞くべき業にこそ有れ故大神等の大御幸を蒙りて、吹鑄奉らむ鐵は天之香具山の伊豆の眞金と令成、鑄出す齋火は天之香具山の伊豆の御火と令成、汲使ふ水は天之眞名井の眞清水と令成、諸の形を造れる埴は天之香具山の清き埴と令成、吹處の狹庭の土は天之香具山の清き土と令成て、吹くが隨に吹過事無く、鑄るが隨に鑄害事無く、鑄得しめ造得しめ賜へと、乞祈奉る事の由を科戸邊の風の吹屋の棟の彌高に所聞食賜ひて、子孫の八十續榮ゆる業、賑はふ家と守り賜へ幸へ賜へと、平手拍上げ、畏み畏みも白す。

(一六) 竹細工開業祭祝詞 山内祀夫

此の所に忌竹立生し、注連引延えて伊豆の御室と齋ひ定めて、招奉り令座奉り、神饌御酒種々の物を捧げ奉りて、稱言竟奉る、掛卷も長き、鹽土老翁命の大前に、神職某恐

み恐みも白さく、千劔振神代に、火折尊故有て憂ひ苦しみ座し時、汝大神の奇靈に妙なる神術を以て、五百箇の竹林を成し、即て其竹を取りて、大日靈籠を作りて、火折尊を其の中に入れ奉りて、海神宮に送り給ひき、故今に至る迄、其御業を受け續ぎて、種々の器を作りて、普く世に鬻ぐ事とは成りぬ、此如在る貴き恩頼の百千か一つをだに報賽奉らむと、今日しも其業始めむとして、如此なも稱言竟奉らくを、平けく安けく聞食て、吳竹の千代に八千代に替る事無く、年々に生添ふ庭の竹の子の彌次々に立榮えしめ給へと、恐み恐みも白す。

(二七) 旅宿營業神祭祝詞 同上

此の何の屋の奥床を祓清めて齋奉る、掛巻も畏き、屋船大神、及天細女大神、此里を宇自波岐坐す、産土大神等の大前に、姓名畏み畏みも白さく、畏きや大神等の甚も尊き恩頼に依てし、旅人宿るべき家居建設け、種々の料調て、家の業と格む随々、勤むる隨々に、彌益に彌廣に、遠近の旅人打集ひ乍、宿乞ひ續くるは、扁に皇神等の高く尊き御

恵に社と、嬉み忝けなみ謝び奉りて、御饌御酒種々の物を献りて、稱言竟奉らくを、平けく安けく聞召て、宿泊る旅人の伊寝も安く、種々の障有らせず、和き樽の和やかに、鮮なる鱈廣物、廣く宇滿良に悦ぶ可く、家をも榮ゆ可く、心を凝し力を盡して、勵み勉むる隨々に、守給ひ幸給ひ、親族家族を始め、他し諸人等をも睦び集へて、愛々良々に笑ひ和ぎ合ふ家と有らしめ給へと、畏み畏みも白す。

(二八) 祈造酒祝詞 祭文私稿

此は酒の醸造を警む者の常例に任せて、其の調造に従事せるが神護に因りて、好果を收めむ事を祈願する祭詞なり、作者は其意を以て、各自の参照に資すべし。
此の酒殿に齋奉る、掛巻も畏き、大山咋大神、石立少名毘古那大神の大前に、恐み恐みも白さく、大神等の奇く妙なる御靈を幸給へる神和邪の麻に、萬爾此家の業と醸造る御酒を、今日より彌益に勤み務めて、醸成さむと御祭仕奉りて、種々の幣帛を禮代の幣帛と捧奉り、齋回り清回り、拜奉り祈願奉らくを、相宇豆那比聞食て、御酒造の長

一四〇
を始て造酒者諸に至る迄彌締に締り彌務に務め夜半曉不知に勞力めて醱畢しめ
豊御酒の可美御酒と國々所々に販賣がしめ給へと恐み恐みも白す。

(二九) 祈醬油造幸祝詞 祝詞作文便覽

掛卷も畏き大山祇大神大雷神高麗神の大前に畏み畏みも白さく某が醬油を醱も
す業を以て家の業と爲て世を經る事は全く大神等の御恩頼に在けりと平常も畏
み奉り辱み奉り齋き仕奉りて在ける故に此度大御前に參登り來て大御幸を乞祈
奉むとする状を神隨も平けく安けく所聞食て過犯す事の將有をば見直し聞直し
賜ひて廣く厚き大御徳と守り幸へ賜ひて手人仕丁等が朝夕に緩む事無く怠る事
無く彌勤めに勤め彌結りに結りて勞づく事業の方に違ふ事無く過つ事無く美き
麴甘き醱を醱成し造り得しめ賜ひて遠近に賣販げば販ぐ任に利潤在らしめて家
の屋業を望月の滿ち足はしめ販はしめ賜へと鹿自物膝折伏せ宇自物頸根突抜て
畏み畏みも拜み奉らくと白す。

(二〇) 醫神祭祝詞 青木陳實

此は醫術の業を開始するに當り斯業の祖神の遺し給ひし仁術にて毎に其の恩悉に浴
し益々業務の隆昌ならむ事を冀ふ祭なり讀者此の意を以て見るべし。
醫師の道を守給ふ神の御前に白さく顯身在る人の世の理の示すが如く不
思病に罹りて苦しむは痛ましき事の限なれば天坐神の御惠を以て此れに手當し此れ
に樂し救助る道を始給しより大已貴少彦名の二神外國々の此道に妙なる人々々
に廣之め遺之て今は其業を學究る事も世に至り盡るを此度何の某い其を悉く學
卒しを以て茲に官の許得て今日の生日の足日に其業を開行と爲て捧物奠て奉言
祝る状を平けく安けく聞食て自今將來人草諸の病と病み惱と惱む重き輕き病の
限は速に直し悉く活て蒼生を憂瀨に救ひ生人を危に助て基開し天神の御心に代
り爲の限を盡行て千萬の者の其仁を稱へ天下廣く其名を聞て彌高に彌遠に可立
榮守惠み幸給と恐み恐みも白す。

(二二) 藥神祭祝詞

祭文私稿

此の小床を伊都の真舎と由麻波利清麻波利招奉り齋鎮奉る掛巻くも畏き大穴牟遲大神少名毘古那大神二柱大神の大前に慎み敬ひ恐み恐みも白さく顯見の世の人等が苦瀨に落ちて阿都加比惱む病を治むる藥の方を始め給ひ何某が家の業と勤み務むる醫師の業に奇く尊き御靈幸ひ給ひて諸の人を助給ひ救給へる廣き厚き恩頼を重み奉り忝み奉りて御祭仕奉らくと宇豆の御酒御食種々の物を禮自の幣帛と捧奉り伊波比伏しつゝ拜奉る狀を相宇豆那比給ひ安幣の足幣と平けく安らけく聞食て今より後も彌遠に彌永に守幸給へと恐み恐みも白す。

(二二) 藥劑師開業神祭祝詞

新撰祝詞集

衣手の常陸國大荒酒列二所の山の上に御神靈を留め給ふ磯前大神の大前を遙に拜み奉りて職姓名が弱肩に太襪取懸禮代の幣帛を捧げ奉りて稱言竟奉らくは掛

巻も恐き大己貴命少彦名命と御名は白して遠き神代の昔天神の詔の隨に御心を合せ御力を協せ坐て大八洲の國造坐て現き蒼生の爲に藥事をも定め給ひ傳へ給ひしより四方の國に生れ出る青人草等古從今に到る迄悉く恩頼を蒙り奉らざる者は有すなも有ける故其神徳によりて何某此藥劑の道を學びに學び研めに究め山野に生る草木毛の荒物毛の和物海川に成出る藻菜魚に具に至まで覓ぎ集め種々の藥と奈志つゝ蒼生の外の病内の病をも朝日の影に露霜の消へ失する事の如く伊吹の風に雲霧の晴れ行く事の如く現身を平けく安けく治めしめ給ひ千里の外四方の國々までも伊行到て人とふ人の齡を長き齡の遠き齡に爲さなむ事を大御神等の奇魂の奇しく妙に幸魂の幸ひ給ひ助け給へと猪自物伊波飛伏鶴自物頸根突齋ひ申し禱申す事を磯打波の音の高々に聞食せと畏み畏みも白す。

(二三) 祈牛馬病氣平癒祝詞

祭文私稿

掛巻くも畏き保食大神大己貴大神少彦名大神と御名は申して恐み恐みも拜み禱

白さく、明津御神と大八洲國知食す天皇の遠御膳の長御膳と赤丹の穂に聞食す五穀物を始て顯しき青人草の食ひて活くべき雜食物作らむ助と保食大神の成し給ひし牛馬の此頃作波に病臥せるは如何なる神の御心ぞもと占相麻賀那波志牟禮ども、卜人の卜にも出でず是を以て只管大神等に祈禱白して奇く妙なる恩頼を仰ぎ奉らむとす阿波禮大神等奇く妙なる伊都の御靈を幸給ひて一日片時も速けく牛馬の夜米流禍和邪防除かしめ給へと鹿自物膝折伏せ鶴自物頸根突抜て恐み恐みも祈願奉らくと白す。

(二四) 創業祭祝詞

五儀略式

此の二項は世に事業を創めんとする者の先づ神祇に祭饗して健全なる發達と永遠の幸福を祈ると共に其の成功を告ぐるに際し更に神恩の大なるを感謝し、報賽の誠を奏して益々神護の新ならんことを冀ふなり、此の意に依りて深く本祭の祝詞を味ふべし。掛巻も畏き産土大神及其業知看大神の御前に、神官某慎み敬ひ畏み畏みも白さく氏子某負氣無れど云々の事成むと思起して、云々の事を以て誓の證として、大神の

御前に願奉り誓奉る状を委曲に聞食て奇き御靈を幸へ給ひ、營業に智深く有しめ賜ひて障事無く過事無く事成しめ功立しめ給へと、畏み畏みも白す。

(二五) 奏功祭祝詞

同上

掛巻も畏き産土大神及其業知看大神の御前に、神官某恐み恐みも白さく、氏子某往年大神の御前に誓奉り、創業しより、深く厚き御恵を蒙り奉り、某年には云々の功を立て、某年には云々の事成竟て、今は幾年の齡と成き、故奏功謝奉らむと、奉る幣帛を平く安く聞食子孫八十連彌遠長く、家の業をも彌榮に榮しめ、守幸賜へと、畏み畏みも白す。

第六編 旅行誕生結婚朝賀諸祭祝詞

本編は古來我が國民の生活間に起れる旅行結婚出産朝賀等の諸項に會し、必らず先づ神祇に奉奏して其の安全と慶福とを祈願するを例とす、然して旅行發足の際は各人の往來する海陸途次の災厄を始め船車の禍難なからむ事を神々に祈請し、又出産誕生は人生中の重要事なるが故に其の平安と健全の成育を冀ひ、結婚には夫婦の和合子孫の繁榮は勿論、世々家門の隆昌ならむ事を期成し、殊に朝賀に在りては宮廷の大儀なるを以て千代萬代に皇室の御安泰と國家臣民の慶福し之を諸神に奉告して永遠に天佑神護を仰ぎ奉るべきなり、苟も神官職として此等の神祭に預り諸種の祝詞を作製せんとする者は仔細に各項の作例を參觀し文意共に遺漏無らむ事を期すべし。

(一) 發旅祭祝詞 青木陳實

此は世人の旅行せむとするに際し先づ産土神に幣饗を供して、陸途上の災禍風障疾病等より船車の患害無く無恙に歸省せん事を念じ、神護に依りて安全なる往來を祈願すべきなり、殊に海外の出稼留學等の場合は航路の無難にして安泰なる成功を冀ふべし、讀者は此意を體して委曲に内容を參酌せざるべからず。

掛卷も畏き、何々神社の大前に、恐み恐みも白さく、何某い今日上道爲て某國某里に行むと爲るを、此度某商業の事に附て來む何日豫定の隨に、其設調へ旅立を以て吾大神の高き貴き恩頼に依りて往來の旅路に在る間は、夜晝と無く恙む事無く、身の健全に有經む事を乞願奉るか故に、御前に詣で、禮代の物奠りて、御祭任奉る狀を平けく安けく聞食て、一里を行く車に乗にも、乘の過無く、一夜を明す宿にも、禍事の發事無く、或は水の爲に隔られ、或は雪の爲に塞られて、打惱事無く、家在人々の身にも、無喪く無事く、其身は素より異き病に犯るゝ事無く、鐵道の汽車の直馳にも、浪路の船の東間にも、其の行合に起る無災雨風の障も、不令有安く平けく、幸く穩に令歸來給へと、恐み恐みも白す。

(二) 祈外國出稼安全祝詞 岡部廣

挂まくも恐き、何神社と稱言竟奉る、何大神等の大前に、恐み恐みも白さく、何國何郡何町何村に住める戸主姓名等、何誰い、(今回)何國に至り産業の爲に勤み務め、許々

多の利益を得て歸り來むと爲て馴にし里を離れ親しき親族を置て何月何日に何の港より船出爲て遠き海原を渡り千里の外の他國に出發(在る)に依て其族親子兄弟姓名い禮代の幣帛を大御前に献りて喪無く事無く安く全からむ事を祈禱奉らくを平けく安けく聞食て大海原の浪風穩に伊行渡りて思ふ港に泊しめ給ひ其身壯健に病しき事無く煩しき事無く産業の道に便惡き事無く其目的の違ふ事無く守給ひ幸給ひて勤むる隨々周む隨々に許々多の利益を得さしめ給ひ事成竟て歸り來む時も種々の障無く諸の災無く安く穩に故郷に着しめ給ひて子孫の彌連續々に茂し八桑杖の如く立榮えしめ給へと畏み畏も白す。

(三) 出船祭祝詞同報賽 祭文例

掛卷も恐き吾大神の大前に恐み恐みも白さく何某い今船出爲て某國某里に行むと爲を吾皇神の高き貴き靈に依て行さ來さの海路に風浪の愁無く守給ひ幸給ひて平けく加多良加に歸しめ給へと禮代の幣を棒持て恐々も稱辭竟奉くと白す。

同報賽

挂も畏き吾大神の大前に畏み畏みも白く先に何某が某國某里に船出爲る時吾大神の靈に依て平く安く歸しめ給へと祈白き然るを祈白し、も均く海神の可畏き道を都々麻波す面變不爲して家に還著しめ給へる事を尊み喜み禮代の幣を棒持て謝付奉らくを神隨聞食と畏々も白す。

(四) 祈航海安全祝詞 新撰祝詞集

此處を領知す掛卷も畏き何大神に乞祈申す事を住吉に坐す三柱大神等相共に聞食せと職姓名畏み畏みも白さく今回何大神の氏子某い何々の爲に何國に至らむと何月何日に何の港より船出爲むとして禮代の幣帛捧げ奉りて稱言竟奉らくは言卷も畏けれど住吉大神はしも磐余稚櫻宮に天下知らし、大御代に栲衾新羅國を征伐よと事教へ給ひし任に足姬命は穴門國の小山田に忌宮を立給ひ大身親神

主と成て齋はり高播を千幡立琴頭に琴尾に置き御誓ひを白し給はく前日に天皇に御悟の有ける神は誰の神の御心ぞ大神名を知らまく欲すと請白し賜へば橋の小門の水葉も稚やけく出居る神上筒男中筒男底筒男三前神と事教へ御言告らせ給ひき如此著明き命を得ては黙止有む事畏し争で手拱て有めやと御軍を誘ひ給ひ大御船離ひ發して少女の眉引成せる國をしも召給はむと直渡り渡り給へば三柱大神等船に艦に御立し坐て和御魂は御身に服はり荒御魂は御先鋒と成て大御船御手打掛て天傳ふ日の入方に速々と導坐せば時の間に到り着して劍太刀手握持て打向ふ事しも無きに久方の天厭神と奇異なる大御稜威に自然摧かえけらし諸の韓の王等忽に奴と爲て御軍に伏ひ來ぬ是を以て内屬る國をら内屯家と定め天皇の遠の朝廷と日本府を置て歸り坐す時に住吉の其大神の荒御魂を押へと成して足引の山田に齋き給ひ和御魂を守りと爲て淳長倉の大神に令坐て往來の船路神と宮處定め給ひぬ故此大御稜威を畏み奉り仰ぎ奉りて如此なも御祭仕奉るを平けく安けく聞食て大海原浪風穩に鐵道を走る事の如く最速けく伊行渡

りて思ふ港に泊しめ給ひ其身壯健に病しき事無く煩しき事無く諸の障り無く目的の違ふ事無く思ふが任々に事成竟て恙無く歸る事を得せしめ給へと畏み畏みも白す。

(五) 外國留學生安全祝詞

岡吉胤

掛卷も長き何大神の大前に何某畏み畏みも白く何某い夙に敏心を振起して今茲明治何年を始めと五年を限りて海離る西洋獨逸の國に物學して在事を所知食て日に異に勞き營む身心は安く穩に瘴癘の障り無く傳へ修る學術に直く正しく横左の道に惑事無く顯世の眞理は更にも不言工業器械の小枝に至まで洩る事無く墜る事無く功績を令樹給へと御酒御饌雑々の物を置高成て親族諸共に乞祈奉らくを平に安に所聞食受給ひて遠境も無隔事竟て歸參來む迄の年月は一日片時も見放給ふ事無く夜守日守に守惠幸へ給へと十六自物膝折伏て畏み畏みも乞祈奉らくと白す。

(六) 新授子祝詞 山内紀夫

此の新授子祭詞は夫婦間に生見なきを憂ひ神護に依り繼嗣者を授け給はらむ事を冀ひ、次の新産は婦人の體姪して後、身心に故障在らせず平安に分産せしめ給はむ事を祈ると共に母子の健全に日立ち行かん事を願望し、又誕生せし嬰兒の始めて産土神に参詣して神恩を奉謝し、尙誕生日を期して神祭を行ひ生兒の健全に成育すべく祈念し、漸く成年に達せば之を奉祝して將來の榮達を冀ふ等順次項を遂ひて記述せるを見るべし。

掛巻も恐き多賀神社と稱言奉る神御祖二柱大神の大前に、恐み恐みも白さく何郡何町何村に住める誰い某を妻と定てより、何年を経つれども一人の子をも得不産、負持つ御祖の家の名を受繼ぐべき系さへ絶なむと爲るは、悲しとも悲しく、憂はしき限になも在ける、故夫婦諸共に清き赤き真心を以て大御前に乞祈申し、白玉にも黄金にも憂るてふ子實を授け賜はらまくと、禮代の幣帛捧奉り、只管に乞祈申す形状を、阿波禮と見備し聞食て、大神等の稜威の神靈を幸へ給ひて、言巻も恐れ

ど大神等の島の八十島國の八十國八百萬神等を生給ひし事の如く、愛し子を授け給ひ産しめ給ひ、木の彌繼々茂し八桑枝の如く立榮しめ給へと、恐み恐みも祈禱奉らくと白す。

(七) 祈産祭祝詞 神職必携

掛巻も恐き吾大神の珍の御前に、畏み畏みも白さく御氏子(信徒)何誰の室誰い、懐胎て早く産期に近附ぬれば、家人等諸も苗刺晝は志美々に、手摩足摩衛生り攝養ひ、奴婆玉の夜は安くも夜目を寝す、勞り繼けて、何卒で平穩に眞玉如す子を産しめむと、待勞き頼勤めて、今只管に乞願白す事の由を、嚴陣の中執持て祈奉らくを、慇懃と所聞食て、此御名符を産屋の鎖と持齋き齋奉る任に、産婦誰が心の鎖と言書ぎ結べる、下の帯の爵結ほる事無く、産醫乳母に至る迄、手躰足躰在らしめず、海原に時得て直刺す潮如す満て足らひて、落多岐津早川如す、須具々々と祝ふ産屋の安けく、場沫る鹽の平けく、初聲高く生産しめ給ひ、母も子も喪無く難無く、日足らしめ給へと、神僕

神酒を進りて、畏み畏みも白す。

(八) 誕生奉告祭祝詞

祭文私稿

此里を宇之波伎坐す、掛巻くも畏き、宇夫須那大神の大前を始奉り、此家の神床に齋奉り、令座奉る、天津神、八百萬の神等の大前に、慎み敬ひ、恐み恐み、白さく、某が眞名子、某い、去何日の生日の足日に、皇神等の神慮の隨に、宇都會美の世に生出にたれば、今日しも大前を祭りて、其由告奉り、奇しく、尊き恩頼をし、仰奉りて、可美人の眞細人と成らしめむと、現在より將來をも兼て、言壽の志留之の禮代と、宇豆の御酒御食赤飯に、種々の物を取添て進奉り、齋萬波利清萬波利拜み仕奉る狀を、平けく安らけく聞食、宇豆那比給ひて、夜の守り日の守に、守惠まひ幸給へと、恐み恐みも白す。

(九) 生兒命名奏上祝詞

山内肥夫

掛巻も畏き、産土大神の御前に、職姓名、畏み畏み、白さく、大神の愛み給へる御氏子何

某か妻、某い、懷妊りしより、平けく安けく、其子の産出む事を祈願奉しを、神隨幸ひ給ひしも、著明く、本月何日に障る事無く、安々と産出しめ給へるに依て、今日の生日の足日に、名を(何々)と負せぬる事を、相宇豆那比給ひて、自今以後、喪無く事無く、生緒長く、玉の緒久しく、山松の千歳を懸て、縁加はる事の如く、櫻の花の年の端毎に、旬加はる事の如く、君の爲國の爲に、功を立名を揚げしめ給ひ、家の風をも吹起さしめ給へと、禮代の幣帛を捧け献りて、畏み畏みも、稱言竟奉らくと白す。
(注意) 女子には、操高く美しく、生添ふ庭の若竹直く正しく、親にも優りて立榮しめ給ひとすべし。

(一〇) 初宮詣祝詞

同上

掛巻も恐き、多賀神社に鎮坐す神御祖二柱皇大御神の宇豆の御前に、職姓名、畏み畏み、白さく、何國何郡何町村何某の妻、誰い、懷妊て有ける時に、平けく安けく産しめ給へと、乞願ぎ奉りて、(産婦某)は更なり、親族家族等朝には、指夕計へ夕には、思ひ片設

け時の至るを待しに、神奈我良守幸ひ給ふ驗有りて、何年何月何日に障る事無く産出しめ給ひて、母も子も安らかに日足し行かしの給ふ隨に、早くも今日は何日の足日に成ぬ、故高き尊き恩頼を喜しみ、忝なみ、某の生、兒い、忌回り、清回り、初めて參出て、禮代の幣帛を奉り、拜み奉らくを愛しと聞食、慈じと見備はして、今ゆ、後此御神靈を身の守と持齋き祀る任に、彌々益々撫給ひ、恵み給ひて、病しき事無く、煩しき事無く、健に生立長き齡を重ねて、人の人たる行ひを能く盡さしめ給ひ、君の爲國の爲高き功をも立しめ給へと、畏み畏みも白す。

(注意) 女子には世の遠人と在しめ給へととすべし。

(一一) 誕生日祭祝詞 同上

此の奥床を拂清めて、招奉り齋奉る、懸巻も文に恐き、神御祖伊邪那岐大神伊邪那美大神、産土大神等の御前に、職姓名、恐み恐みも白さく、何大神の御氏子(信從)何某、兼て大神等の恩頼に依りて、何年何月何日に生出しより、何年の間、夏冬の暑さ寒さに

も惱み損はる、事無く、常に身體健に日足らしめ給へる隨に、早くも出生し今日とも成ぬ、故其高き尊き大御惠を喜み辱みて、豊御饌、豊御酒を始め、種々の味物を供へ奉りて、報養の御祭仕奉らくを、大御心も須賀々々しく聞食て、今ゆ、行前八十禍津日の枉事無く、生前長く年齢加はる隨に、幸福添はりて、君の御爲國の爲に、功しく忠實なる人と成らしめ給へと、恐み恐みも、稱言、竟奉らくと白す。

(一二) 祈生子育成祝詞 阿夫利神社祝詞集

掛巻も畏き、阿夫利大神の御前に、慎み敬ひ畏み畏みも白さく、世間に寶と爲べき物は、大有れども、子に若く者なも無有可き、然るに姓名は、子の幸薄く、幾回か子は産つれど、幾人か持つれども、高津神の妖か、高津鳥の災か、或は産れて不活、或は生れて無問病に罹り、悉に養育敢ずて、家の系繼べき子さへ在ける隨に、此度大御山に參上來て、大御幸を乞祈奉る狀を、神隨も阿波禮と思行坐て、自今以後は、大神の高く尊き大御心と、子の幸厚く授け賜ひて、生れば生る、隨養育せば、養育隨に、健剛なる子を得

しめ家系繼しめ賜ひて、家内賑しく、子孫の八十續遠長に榮行べく、奇しき御靈を幸へ給へと、畏み畏みも白す。

(一一三) 成年祭祝詞 祭文私稿

此里の宇夫須那大神と、某神社に鎮座す、掛巻くも畏き、某大神の大前、及家内に齋奉る天津神、國津神等の大前に、恐み恐みも白さく、某い何年月日現身の人と生出し、より年普く日遍く、大神等の守給ひ幸給へる、廣く厚き恩頼に依りて、喪無く事無く、生立榮え、今は童の群を離り、獨立つべく、壯に建き、壯士と成りぬれば、今日を生日の足日と撰び定めて、成年式仕奉り、保岐恭止申奉らくを、宇豆那比給ひて、此の献る御酒御食種々の幣帛を、安幣の足幣と平けく安らげく聞食て、今より後も彌遠に彌長に守り幸給ひ、世長人世の遠人と、名に負ふ可く、命長く在らしめ、皇に忠國に義親に孝の人たる道を遂得しめ給へと、恐み恐みも白す。

(一一四) 結婚式祭祝詞 神道結婚略式

此の結婚以下年賀祭に至る數項は、人生道義の大體にして、世に子女を持てる者は一定の時期に於て必らず結婚の禮を行はしめ、子孫繼承の道を立つる際先づ神祇を祭り、夫婦睦じく一家和合し、家門の隆昌ならむ事を冀ふなり、養子縁組祭の場合も其の意同じ、次に金銀婚式より年賀祭にては、定數の年期に到達したる時、其の長壽を祝福して、家運の發展と各自の息災延命を祈請するなり、讀者其の意して見るべし。

此の眞床を拂清めて、奥山の神の枝を、打折持來て、神籬差立奉招り奉坐りて、稱言竟奉る、掛巻も恐き、高皇產靈大神、神皇產靈大神を奉始て、妹背の道を始給ひし、伊邪那岐大神、伊邪那美大神、出雲國杵築神社に鎮坐て、嫁繼の事を掌給ふ、大國主大神、須勢理比賣大神、及産土大神等の大前に、何某慎み敬ひ恐み恐みも白さく、今度某宮に仕奉る神職、何某が相議りて、某神社の氏子、何某に、某神社の氏子、何某が、女某を娶りて、嫡妻と定めむと爲るが故に、今日の某月某日を、生日の足日の吉日と撰定めて、婚禮式行ふと爲て、持齋まはり持清まはりて、捧奉る禮代の幣帛は、由紀の御食御酒は、斐

戸高知豊腹満双て山野の物は甘菜辛菜青海原の物は鱈の廣物鱈の狭物奥津藻菜
 邊津藻菜に至るまでに如横山置高成て奉る幣帛を安幣帛の足幣帛と平く所聞食
 て夫妻の契は如巖彌堅らかに如咲花移事無く令有給ひて皇神等の遠津神代に定
 給ひし事の如く左右の違無く赤き清き直き正き誠の心持て相背かじ相違はじと
 契合せ約合せて家門高く廣く子孫の八十續如茂八桑枝令立榮給へと祈白す事を
 相諾給ひ相助給ひて堅磐に常磐に夜守日守に護給ひ幸給へと頼自物頸根突抜て
 恐み恐みも稱言竟奉らくと白す。
 辭別て白く今嫡妻と定めむ某い女の大道なる操正しく爲て常に言先立事不令有
 後事をら洩事無く落事無く令掌給へと恐み恐みも白す。

(一五) 全式祭誓詞(婿)

大社教結婚式

掛卷も恐き皇神等の大前に、恐み恐みも誓ひ奉らく、某い某と夫婦嫁繼の式を行ふ
 と爲て、皇神等の大前を拜み奉り、堅め宇伎由比して仕奉らくは、惟神の本教に背く

事無く男女の大道に違ふ事無く、清き赤き誠の心に勤め締りて己が向々爲す入紐
 の同心に睦び愛みつゝ、夫婦二人が中に、如何なる憂事在りとも堪忍びて、相扶け相
 護らむ某はや男には在れども、汝を置て他心を持事無く、異き行を爲す事無く、玉緒
 の長く久く相背かじ相違はじと誓奉らくを、若過犯す事の有らむには、皇神等咎め
 給ひ罰め給へと白す事を聞食せと、恐み恐みも白す。

年號月日

爵位姓名

誓詞(婦)

掛卷も恐き皇神等の大前に、恐み恐みも誓ひ奉らく、某い某の妻と爲りて、嫁繼の式
 を行ふと爲て、皇神等の大前を拜み奉り、契り堅め宇伎由比して仕奉らくは、惟神の
 大道に背く事無く男女の大道に違ふ事無く、清き赤き誠の心に勤め締りて己が向
 々爲す入紐の同心に睦び愛みつゝ、夫婦二人が中に、如何なる憂事在りとも堪忍び
 て相護らむ某はも女にし在れば、汝を置て夫は無く男は持す、束の間も節の間も他

心を持事無く玉緒の長く久く相背かし相違はじと誓奉らくを若過犯す事の在らむには皇神等咎め給へと白す事を聞食せと恐み恐みも白す。

年號月日

姓名

(一六) 養子縁組祭祝詞 新撰祝詞集

掛卷も畏き多賀神社と稱言竟奉る伊邪那岐大神伊邪那美大神の大前に恐み恐み白さく遠津神代に神御祖二柱大神此の漂蕩國を修理固成せと宣らし給ひし天津神の大詔を受け給ひ此の國に降り座て萬物を生産し給ひ最終に伊邪那岐大神天下の君たる可き御子を産むと御心を凝し給ひて三柱の珍の御子を擧げ給ひて天津日嗣の動き無き基を始め給ひし隨に天照座皇大神は大御鏡を皇孫邇々杵命に授け給ひ此の寶鏡を視まさむ事猶吾を祝るが如く爲よと詔らせ給ひしぞ祖先神を齋ひ奉る起源にして世々の御祖の御祭を絶さぬは吾國の重き習慣なりける故何國何那何村字何何某い其の後を繼ぐべき生の子の無きに依て今回何國何郡

何村何某男某を乞請て家督を續かしむと養子の契を結び固むるに依て八十日日は雖有今日の生日の足日に職姓名嚴矛の中執持て大前に御饌御酒を始め海川山野種々の味物を献り置て神事仕奉狀を平けく安けく聞食て自今後千代に八千代に生涯相睦び相翼けて恐かれど此の漂蕩國を修理固成し給ひし事の如く家の基を彌堅めに堅め家の名をも彌高に擧しめ給ひ子孫の八十連續茂八桑技の如く立榮しめ給ひ樛木の繼々彌遠永に世々の御祖の御祭美しく仕奉らしめ給へと御池の龜の伊波ひ回り恐み恐みも白す。

同誓詞 同上

今日の生日の足日の良時に親子の契り結ふ儀を行ふとして神御祖二柱大神の大前に誓ひ白さく神代の昔伊邪那岐大神の三柱の貴の御子を擧げ給ひし神業を仰き奉りて何の某を相續子と定めて親子の契を結びつるは尊き大神の御心と悦び奉りて今より後は千代萬代に變らじと互に睦み親みつゝ修理固成と詔り給ひし

神語の任に上下の位を誤らず、苟且にも親子の道に違背く事無く、親子心を一にし、
て相補けつゝ、家政を整理ふべく、御祖の名を汚す事無く、墜す事無く、勉め勵まむと
誓ひ白さくを、平けく安けく聞食せと、媒何某恐み恐みも白す。

(二七) 銀婚祭祝詞 山内祀夫

掛卷も恐き神御祖伊邪岐大神、伊邪那美大神、産須那大神等の御前に、職姓名恐み恐
みも白さく、大神等の撫給ひ愛給へる何誰い、何誰と嫁繼の式を擧しより二十有餘
五年と成ぬ、故今日の生日の足日を、白銀花咲く吉日と撰び定めて、大前に禮代の幣
帛と御饌御酒、雜々の物を獻り、親族家族朋友等を彌集へに集へて、神祝ぎ豊祝ぎ御
祭仕へ奉りて、祝賀の式行はむとする状を、然こそ愛たけれど、大御心も惠良惠良に
所聞食て、白銀の白きが如く、眞白髮生ふまでも、笑榮え、若栗栖の彌若延に若延て、百
年も面變なく、五百年も病煩無く、世の長人世の遠人と稱へらるつゝ、家の鎮め子孫
の龜鑑とも成て、彌々益々家門高く賑しく立榮へしめ給へと、恐み恐みも白す。

(二八) 金婚祭祝詞 同人

是の神床に神籬立て招奉り令坐奉る、掛卷も畏き神御祖伊邪岐大神、伊邪那美大
神、産土大神等の御前に、職姓名恐み恐みも白さく、言まくは、恐けれど、妹春二柱大神
天津神の御勅の任に、天の瓊矛を以て、天地の坤軸と衝立給ひ、左より右より廻合はし、
綾に奇しき神語詠み交しつゝ、妹妹の道を興し賜て、天下の青人草等が宇麻波理榮
行く可き、大き御式を定め給ひ、旋て給ひし任に、天の益人國の益人と生出る人民等、
身を興し家を始め、有と有ゆる萬の物等悉に其御蔭に覆れ、其恩頼に依り奉らざる
は無し、茲に何某が父某、母某、其の奇く貴き恩頼を他よりも異に深く厚く蒙り奉
りてか、去し何年何月に、妹妹の契結び逢初めしより、永き年月喪無く事無く、世繼の
宇朱子共多に儲け、分相應に、功も立乍、鴛鴦の番ひの睦び合ひて立榮來つゝ、今年父
は何歳と成母は何歳と數へて、此何月何日は、全く五十年に満ぬるを以て、今の世の
大御手風に依りて、金婚式と云へる祝賀式執行はむと爲て、日に異に蒙り奉る大御

惠の百千が中の其の一つをだに報い奉らばやと豊御饌豊御酒を始めて海山の味物を捧げ奉りて親族家族諸人等と共に玉串の取々に拜み奉らくを善らに廣らに所聞食て二人か心清々しく八千代の春も黄金花咲く陸奥山の陸魂合ひて幸く眞幸く妹妹二柱大神の皇孫命の御血統の天壤と無窮き事の如く眞子に孫に八十連續に彌廣に彌遠に立榮えしめ給へと萬代の龜の伊這ひ回りつゝ畏み畏みも白す。

(一九) 年賀祭祝詞 同人

言卷も文に恐き天津御祖大神産土大神八百萬神等を招奉り令座奉りて職姓名恐み恐みも白さく吳竹の憂節繁き世の中に身健けく齡重なり行くばかり芽出度は有らざるべく茲に何大神の氏子(信徒)位爵姓名い大神等の惠給ひ愛給ふ廣き厚き御蔭に隠るひて心安く轉樂しく新玉の年月來經行く隨に今年早(幾年)に成ぬ故常に身體健然に在經るは更にも云はず男子女子を始め孫等に至る迄樛の木彌次々に蕃殖榮えつるは愛たき限にして此上無き幸福になも有ける是を以て家繼げる

某は更なり眞名子等を始め孫裔親族家族等(舊)の臣今の家の子又親しき友垣出入る諸人に至る迄嬉しみ悦び今日を生日の足日と擇定めて謝恩の御祭仕奉り年賀の式執行はむと大前を持忌回り清回りに獻る禮代の幣帛は和稻荒稻に五百杵八百杵に謠ひつゝ杵搗造れる餅の鏡を七重八重に千代の壽言積み重ね御酒は祝瓶に豊戸高知豊腹滿並べ鱒廣物鱒狭物奥津藻菜邊津藻菜甘菜辛菜御水堅鹽に至る迄に品善き物を取貯て手長の袖の列々に捧奉り八十五玉串の取々に拜み奉らくを然こそ愛太けれど大御心も惠ら惠らに所聞食て自今以後も彌若叡に若叡彌足ひに足へしめ給ひ心爽快に和び睦びて世の長人世の遠人と稱へらえつゝ子も孫も園生の松の春毎に縁加はる事の如く未遠く齡加はり秋の足穂の前長く幸福添りつゝ家門高く賑しく立榮しめ給へと畏み畏も稱言竟奉らくと白す。

(二〇) 光仁天皇立皇太子詔

藤原繼修 祝詞文例

此の大詔より御即位に至る諸項は我が萬世一系の皇室に於ける宮廷の大儀を宣詔し

給へるものなると共に、世々之を皇祖に奉告し神祇に奉奏して千萬載に寶祚の無窮を祝福し國家の安泰を祈請する趣旨に成れり、殊に本項の宣命體は既に最首の作法大意中に述ぶる如く祝詞文とは些か構成を異にせるも作者の要意までに實例を撰精して茲に掲ぐる事とせり、其の内容は各文中に就きて吟味し仔細に其の字句を咀嚼して創作に資すべきなり。

寶龜二年春正月辛巳立他戸親王爲皇太子乃詔之

明神御八洲養德根子天皇詔旨勅命を親王諸王諸臣百官人等天下公民衆聞食宣隨法に皇后御子他戸親王立爲皇太子故此狀悟て百官人等仕奉詔天皇御命諸聞食と宣故是以大赦天下罪人又一二人等冠位上賜治賜又官人等大御手物賜高年窮乏孝義人等養給治賜くと勅天皇命を衆聞食宣。

(一一) 文武天皇即位詔 菅我眞道修 祝詞文例

持統天皇十一年八月甲子朔受禪即位庚辰詔之
現御神と大八島國所知天皇大命らまると詔大命を集持皇子等王臣百官人等天

下公民諸聞食と詔高天原に事始而遠天皇祖御世中今至までに天皇御子之何禮坐む彌繼々に大八島國將知次と天つ神の御子隨も天坐神之依し奉し隨聞看來此天津日嗣高御座之業と現御神と大八島國所知倭根子天皇命授賜ひ負賜ふ貴き高き廣き厚き大命を受賜り恐坐て此の食國天下を調賜ひ平賜ひ天下の公民を惠賜ひ撫賜むとなも隨神所思行さくと詔天皇大命を諸聞食と詔是以百官人等四方食國を治奉と任賜へる國々宰等に至までに天皇朝廷敷賜行賜へる國法を過犯事無く明き淨き直き誠之心以而御稱々而緩息事無く務結而仕奉と詔大命を諸聞食と詔故如此之狀を聞食悟而歎將仕奉人者其仕奉れらむ狀隨品々讚賜上賜治將賜物ぞと詔天皇大命を諸聞食と詔。

(一二) 明治天皇御即位宣命 神職必携

此の宣命も前と同じく天皇陛下御一世御一度の大典たる御即位式に際し、天皇親しく高御座に即きて天日嗣を所知食す事を百司萬民に告げ給ふ詔なり、皇國の式典に奉仕する者は謹て此の大旨を奉知すべきは勿論一般奉祝文の規範として千古に拜禮すべ

現神と大八洲國所知す、天皇が詔旨らまと宣ふ勅命を、親王諸王、百官人等、天下公民、衆聞食と宣ふ掛卷長き平安宮に、御宇す倭根子天皇が、宣ふ此天日嗣高座の業を、掛長き近江の大津宮に、御宇し天皇の初賜ひ定賜へる法隨に、任奉と仰賜ひ授賜ひ、恐み受賜へる御代々々の御定有が上に、方今天下の大政古復し賜ひて、橿原の宮に、御宇し天皇の御創業の古に、基き大御代を彌益々に吉き御代と固成賜はむ、其大御位に、即せ賜ひて進も不知に退も不知に、恐み坐さくと宣ふ大命を衆聞食と宣ふ、然に天下治賜へる君は良弼を得て、平く安く治賜ふ物に、在となむ所聞、爰朕雖淺劣、親王諸臣等の相穴なひ扶奉む事に依て、仰賜ひ授賜へる食國の天下の政は、平く安く仕奉べしと祈念行す、是を以て、彌抱正直の心て、天皇が朝廷を衆助仕奉と宣ふ、天皇が勅命を衆聞食と宣ふ。

慶應四年八月廿七日

(三三) 東宮御誕辰奉祝祭祝詞

神職必携

璞の年の中に、日刺方の空行月は、多在れど、八東足穂の重穂の、莫然熟らむ長秋の長契を、七重八重色香に籠めて、咲菊の花盛の、今月の此日は、掛卷も最も、惶き高光る皇太子尊の、此顯世に降座し、何、冷日の生日の、足日にし有れば、綾に尊き皇神の、珍の御前に、職姓名禮代の幣帛を、擎持て、慎み、惶みも御祝の、賀詞を稱、辭白さく、言卷も文に、畏かれど、鑛の地球の上に、在と在らゆる國土は、天星如す、數多有る中に、敷島の日本國知らし、皇祖の大御業を、窺奉れば、八百萬千萬歳と、來經往む世の、盡動くまじき御思兼に、神量思量て、國體の、丕礎を築固め、國中の、眞柱を、建定て、天長井の、永世に汲とも、盡ぬ御徳の、深源をなも、發し給ひたりける、阿奈長此大御量は、や、運行遠はぬ天地の、廣げき道の、公道と、環端の際、限無く、往ては、來る四季の、序正き天理に、感貫き照合ひて、伊笹村竹些も、世の、校意の、節も無く、最も、正確しく、分明けく、神聖とも、至妙と仰くべき、大道とこそ、讚美つべけれ、阿那爾耶志、此眞秀國と、國民の、有の、悉群肝の

心眞直に現神吾至尊を尊み奉る吾足乳根の父母を敬ひ國の憲法を嚴鋒重し守りて人を幸へ物を感むは云も更なり緩急し有らば醜の御楯と海山に水漬草生左に右に願慮は爲じと焼太刀の丹心の銳意を軍服の帶の一筋に結固めて只管に任奉らむ斯大道の中に在て御裳裾川の上瀬は彌澄々て深く遠く御隆え座せり下瀬は流派れて長く榮昌えて在けり爾を以て日の没る國の唐錦綾に畏み日の出る神明の御國と語繼ぎ言傳へつゝ天水仰ぎ服従ひ宇宙の退方の極み尋ぬとも比類在らじと言擧て感げ奉れるぞ宜なりける此正道は壺切大御劔如す至も嚴しく十寸鏡如す至も明けき極みにし在れば石上古き御世より白眞弓遙けき末の末懸て射放つ征矢の一筋に貫通りて朝霞立てるが如く彌高に充薫らひて誤る御世無く玉垣の内國は云も更なり八重浪遊る海外の野にも山にも吹風の布施して若草の崩ゆるか如く彌廣に生蔓衍りて悖る地無かるべし故斯大道を千代八千代萬代懸て高御座に承繼座む高光る日嗣の御子の大御壽は八咫鏡の押露て不二の高嶺に月日影匂ひ照合ふ事の如く面照足らひ座し坐さなむ大御稜威は草薙御劔廉に打

固めて疑無く斷定る事の如く昏直刺す奥津島新高山の高根より西果なる外國の國の奥區に至る迄伊照輝き座し坐さなむ大御徳は八坂瓊の御統の珠の行合に麗く和やかなる事の如く旭直刺す千島のや磯碕より東洋の遠疆の八十限の隈手も墮す彌充渡り座し坐さなむ如此御面足ひに照輝き充渡らひ座し坐さば春花の世は眞盛に打開けて海の内外の八十國の國の八十人入紐の同心に面向ひ平和ばむ御誓の大主と打仰ぎ稱幸て於々不々奈々富も利益も貢船煙も高く立て繼げて常世の波の重波の彌及々に參來集ひて任奉らむ如此任奉らば神聖の皇國の御威光は豊秋の最中の月影と伊照互らひ吹風は枝を鳴らさす降雨は壤を動かさす慶雲日月に映き祥霞山河に棚引きつゝ草木禽獸に至る迄悉に御德澤を蒙り奉らむ事の状は今既日月に照合ひて其證明こそ眞明なりけれ未照天地に懸て其兆徴こそ正確かりけれ故守幸へ奉坐す皇神等も然こそ嬉と所思すらめ然こそ樂と所思すらめ任奉る國民も尊しとこそ頼み奉れ愛しとこそ侍奉れ實に天地も依合ひて贊成奉らむ月も日も寄て照さむ大御世の御祝の賀辭を相諾ひ所聞食て御賀の効顯

著明く、眞幸く在らしめ奉給へと、天八開手打舉つゝ、惶み惶みも稱辭竟奉らくと白す。

(二四) 御踐祚奉告祭祝詞 四部讀

掛卷も恐き、何神社と稱辭竟奉る、何大神等の宇豆の大前に、御饌御酒を始め種々の味物を獻置て、神職姓名、恐み恐みも白さく、言卷は恐れれど、現津御神と天下知食し、大行天皇の大御病悶熱給ふと傳へ承りし時、廣く厚き大御神等の大御力に憑りて、争で一度療し奉り治し奉ばやと祈禱在りしに、定れる大御壽にや在けむ幽冥に、大御事業や在けむ、有名る醫師等の術も詮無く、竟に去し月の三十日と云ふに崩御座ぬるぞ、甚も惜く甚も悲き極に、なも有ける、然れば大御掟の任に、皇太子殿下には直に天津日嗣知らし給ひ、天津璽を受け給ひ、年號を大正と定め給へり、故大行天皇の大御心を大御心と爲、大御功績を大御功績と爲、大政は天地に通りて、正く尊きも卑きも老たるも少きも、皆其の所を得しめ給ひ、彌益々に皇大御國の大御光を輝

さしめ給ひ、大御恵を施しめ給ひ、天皇の大御代は、嚴御世の足御世に、千代萬代に守り給ひ、幸ひ給ひ、親王等、王等、百官人等、天下の公民に至まで、嚴し八桑技の如く立榮しめ給ひて、尙大行天皇の天壤の共無窮に、此世に坐すが如在しめ給へと、恐み恐みも白す。

(二五) 御即位奉祝祭祝詞 同上

掛まくも畏き、某神社の大前に、職姓名、畏み畏みも白さく、八十日は有れども、今日の生日の足日は、明津御神と大八洲國知食す、天皇命の、天津高御座に、即き給ひ、天津日嗣を知食す、最も芽出度く最も尊き美し日なるか故に、大前を持ち廻り持ち清廻りて、豊御饌大御酒を始め、種々の味物を捧げ獻りて、御賀の壽詞を言祝ぎ奉らくは、高天の神王神漏岐神漏美の命以ちて、皇御孫命を、天津高御座に座せて、天津璽の三種の神寶を授け給ひて、言壽き宣給ひし、皇我宇都の御子皇御孫命、此の天津高御座に座して、天地の共萬千秋の長五百秋に、大八洲豊葦原の瑞穂國を安國と平けく

所知食せと言寄さし奉賜ひて國中に荒振神等をば神問しに問し給ひ神掃ひに掃ひ賜ひて語問し磐根樹根立草の片葉をも語止めて天の磐座放ち天の八重雲を伊豆の千別に千別きて天降し依し奉給ひしより生座す皇子の續々絶ゆる事無く變る事無く大御統直一筋に天津日嗣受繼給ひて八尺の勾瓊の美麗しく和なる事の如く八咫の鏡の直明に照輝ふ事の如く草薙の劍の銳利く截斷つ事の如く穩しく正しく嚴しく政ち給ふ任々に大神等の御靈の彌益々に幸へ給ひて大御世は年に月に立榮えつゝ大正の新御世とこそ成にけれ故是を以ちて皇神等の見齋かし座す四方國は天の壁立極國の退立限青雲の靄く極白雲の墜居向伏限青海原は棹舵不干船の艦の至留極大海原に船滿てつゞけて自陸往道は荷緒縛堅て磐根木根履さくみて馬瓜の至留極長道間無く立てつゞけて狭國は廣く峻國は平けく遠き國は八十綱打掛けて引寄する事の如く國の八十國島の八十島漏るゝ事無く墜つる事無く所知食さむ皇御孫命の大御世を茂御世の足御代と堅磐に常磐に天地と共に平けく日月と共に安けく守り給ひ幸へ給ひて赤根刺し豊榮登る日本の國の光

を廣く普く四方八方に照徹らしめ給へと天津御空の彌高に八十國原の彌廣に仰ぎ乞祈み恐み恐みも御賀の吉詞を稱言竟奉らくと白す。

第七編 入學入營就任奉告祭祝詞

本編に引例せる入學入門式以下の諸項は何れも學神を祭りて學術技能の精通進歩と健全なる人格の向上と發達を祈請し、厚く先人賢哲の靈徳に浴して偉人英傑たるの實力を養ひ得べく最善の成功を期すると共に教育教導に關する各項は皇祖先聖の高大なる慈教と明徳を感謝し赫々たる遺風を體現して育英上に必要なる教訓教務を完くせん事を冀ふなり、次に軍入入營の項は國家防護の兵事に關する國民壯丁の一大義務を完くし其の本分勞役を無難に服了せん事を奉請し、又官公吏教職神職補任の報告祭は特に天地神祇の佑助に依りて各種の職務を實行し國恩の萬一に報せんとする誠意を表し、位勳階位の拜授に關しては深く神皇の恩徳を拜謝し之を千古に慶祝すべき趣旨に成れり、讀者宜しく此意を體して各自の創作に資すべく尙委くは各項の題下に記述すべし。

(一) 神道入門祝詞式 堀秀成祝詞文集

懸卷も恐き、稗田命太朝臣命、舍人親王命、并荷田宇斯賀茂字斯本居宇斯諸の大前に

稱言竟奉る、我皇大御國の上津代はしも、世人の心表裏の逆心有事無く、清き赤き眞澄鏡の曇無き心にも有る、然れば皇美麻命の大御面向けに順ひ奉り種々の取行ふ業をも總て古事の例に倣ひて神隨に安けく平けく在ける三粟の中津代に至て、蟹が行横佐の道の參渡來て、内日刺都を始め天放比那の野山に至まで弘りて、皇大御國の古事の廢にしかば、自ら民の心も加多美行他國の横佐の道の時めくに、毛智鳥の拘らひ泥みて、其方に相麻自古理相口會て、佐賀無き心曲たる心持たる人多に成行て禍神の禍事ぞ於保く交たる、故今の世に在ては、一人だに古の廣き正き貴き高き眞道の學問に令面向て、大御神等の道は咲花の匂か如く彌盛に眞盛に成行べく、専力を盡すべき時にも有る、然に某い、自今大御神等の道の學問を、伊曾志麻むと爲を、大神等守護給ひて、其志緩怠事不令在、末終に其名を天下に輝すまで、功績高く立しめ給へと、畏み畏みも申す。

(二) 信徒入社式祝詞 天理教祝詞集

掛巻も畏き天理大神の大前に教師職姓名慎敬ひ恐み恐みも白す此度何國何郡何村大字何なる某大神の御功德を慕ひ奉り教祖の大教の旨を畏奉りて吾が尊き教を受け斯の道に入立むと請祈奉る心の切なるに依りて定れる義式の随今日しも入社式行はむと禮代の幣帛捧奉る状を平けく安けく聞召して今日より後は身も剛健に心も安穩に在らしめ給ひて大神の御稜威を畏み教祖の大教を守らしめ廣き厚き大御幸を蒙らしめ給へと畏み畏みも白す。

(三) 勸學祭祀詞 四部讀

物學ちふ事は難波津の木の花と共に開け初め學校を建て教ふる事は篠波の大津の宮よりも始りけむ中つ世に至りては氏々相競ひて學院を興しつれど其も級高き邊にのみ止り鎌倉室町の末には廢れに頽れて書讀む者も有らず成りぬ徳川の世に至りて盛に物學ぶ道をば興さえつれど尙普くは及ざりけり此の明治の新世と成りては夙く學制を定め給ひ掟て給ひて脱る方無く遺る限無く施き行はし

め勤め勵ましめ給ひしより今は奥山の荆棘か下磯崎の藻草の間谷蟻の狭渡る極み沙沫の留る限至り届かぬ處も無く薪樵る山賤汐酌む盞が庵にも晤讀む聲の聞へぬ里も有らず成りて心無き兒童等も指俵りつゝ六歳に滿つるを待ち付くる計にさへ成りぬ故今年は大神の御産子何郡何町何村何大字何某の何男某を始め幾人何村何學校に入る可き歳と成りぬれば今日の生日の足日に村長校長を始め事に關れる人等大前に集ひ參來て大御祭奉仕り御饌御酒を始海川山野種々の味物を机代に獻り置て此の年月喪無く事無く生ひ育ちし恩頼を嬉み辱む状を平けく安けく聞食て來らむ四月には相率の相携て尋常小學校に入らしめ給ひ入りての後も身を健全に病しき事無く學の業に智深く行正しく學の師の教ふる任に能く從ひ能く守りて小學の業卒へたらむ後は其の人々の希望の隨に等高級學校にも入り農業に商業に工業に其の分々に勤み勉めて大津の浦に寄る波の眞佐也加に家の業をも興し難波津に咲く木の花の香精く親の名をも揚げしめ給へと恐み恐みも白す。